

浦添市立図書館紀要

BULLETIN OF THE URASOE CITY LIBRARY

No. 12 2001.3

-
- グラビア 「ダイナマイト作業に従事する女性たち」
- 図書館コンピュータシステムの変更（バージョンアップ）の経過
及び図書館機械化・情報化の未来をさぐる 森田 牧子 (3)
- 【平成12年度 図書館行事報告】 もっと本と親しむために 石川 あきの (28)
- 【評定所文書覚書11】 芸能史研究からの評定所文書へのアプローチ 徳元 剛 (34)
- 2000年度刊行案内『琉球王国評定所文書』 (42)
- 【短信】 平成12年度 沖縄学講座「市史を読む会」
ー基本テーマ：自然・環境と自立ー 野原 千明 (43)
- 【文化財報告】 前田・経塚の古墓群調査
ー平成11年度 真知堂地区の成果ー 佐伯 信之・新里 まゆみ
北条 真子・山本 正昭 (45)
- 沖縄学研究室寄贈受付図書資料一覧（1998年度後半～99年度前半） (55)
- 【研究論文】 軍用地と軍作業から見る戦後初期の沖縄社会
ー1940年代後半の「基地問題」ー 鳥山 淳 (67)
- 【研究論文】 引揚げと収容所からの出発 伊敷 勝美 (83)
- 【史料紹介】 『学事関係諸令達通譯』収載の学童疎開関係公文書について 長間 安彦 (100)
(一)
-

浦添市立図書館

〔写真Ⅰ〕



〔写真Ⅱ〕



「ダイナマイト作業に従事する女性たち」

〔写真Ⅰ〕

＜ダイナマイト作業全景（屋富祖）＞

大きな岩石をボーリングする人、そのあとにダイナマイトを詰める女性、そして結線、作業は細心の注意を払いながら、慎重に進められた。

"沖縄1952" 撮影：習志野市 太宰 好夫

〔写真Ⅱ〕

＜火薬班の女性達（屋富祖）＞

火薬班の女性は近くの主婦や娘さん達で構成されていた。危険な作業の中にあり乍ら、仕事の合間には冗談を云って人々を笑わせる朗らかな人達だった。

"沖縄1952" 撮影：習志野市 太宰 好夫

〔解 説〕

写真は1952（昭和27）年頃の牧港補給地区（キャンプ・キンザー）建設工事でのダイナマイトによる岩石の粉碎作業に携わる女性従業員の姿を撮したものである。

米軍基地拡張工事に日本の建設業者が参加するようになったのは、1950年代に入ってからのことである。当時、浦添では旧1号線（現国道58号線）の拡張改良工事、牧港火力発電所や牧港補給地区の建設工事などが進められており、屋富祖、城間、宮城といった沿道の地域には、建設工事や軍作業に従事するために各地から集まってきた人々（女性も含む）が下宿や間借りのような形で暮らしていたようである。

〔写真Ⅰ〕の背景には屋富祖の高台にあったタンクが映っており、城間辺りから撮影したものと考えられる。

撮影者の太宰好夫氏は、当時清水建設の社員として沖縄を訪問し、当人も米軍基地建設に携わる傍ら、那覇から北部の宜名真に至る約600枚にわたる写真を撮影した。折しも1952年といえば、基地建設を請負う日本企業を相手に労働争議が沸き起こった時期である。過酷な労働条件と日本人労働者との差別待遇に苦しむ沖縄の基地労働者という背景を踏まえてみると、笑顔の写真とは裏腹な厳しい状況が見えてくるような写真である。

掲載した写真は、1993年4月19日に太宰氏から浦添市教育委員会文化課に寄贈された浦添市関連写真10枚に含まれる。現在は、当沖縄学研究室で保管し、閲覧に供している。

（野原 千明）

図書館コンピュータシステムの変更（バージョンアップ） の経過及び図書館機械化・情報化の未来をさぐる

森田 牧子

はじめに

先頃発刊された、『沖縄の図書館－戦後55年の軌跡』（教育史料出版会 2000年10月）の中に、浦添市立図書館についてふれられた箇所がある。前書きには、「全域奉仕と全面コンピュータ化、魅力あふれる建築として、（その登場は）強烈で全島の関心を引きつけた」という文章があり、他に「県内ではじめて電算化で優れた実績をあげている浦添市立図書館には多くを学んだ」など、本稿がテーマとするところの、図書館業務のコンピュータに関する記述が見受けられる。

当館が、戦後沖縄図書館界における一定の役割を果たしたと言われるのは、県内市町村立図書館の中で本格的図書館建築の先駆けを担った点と、市民本位の運営方針を中心に据えた点、そして県内初のコンピュータ導入による質的・量的なサービス拡大をはかったためだったと言われる。

その開館から十余年を数え、今や図書館業務のコンピュータ化は当然のことのようになり、導入そのものがエポックメイキングとなった時代は、はるか遠くになってしまった。最近では、図書館の業務の幹でもある図書館システムに、コンピュータそのものの進歩も相まって、最小の投資で、より高度で多角的な面が一層望まれるようになった。

通常3～5年を目安とし、賃借期間が満了する時にその時点における最新の機器に替え、システムを再構築することを「バージョンアップ」と言う。この機会にからめて新機能の搭載を企図し、それ以後のサービス

の新機軸をどのように展開できるのかが益々問われるようになってきた中、今回のバージョンアップは1998（平成10）年7月に諸準備を開始、1999（平成11）年4月から稼働となり、この間どの職員も熱意を持ってコンピュータシステムの改善に取り組んだ。

稼働から一年半を経た現在、一息ついたところで、当時の担当の一人としてそのような選択及び決定のプロセスの様子をここに綴ってみたい。また、バージョンアップに係る膨大な資料をここに繙くことで、ささやかながら情報を公開することの手助けにもなればと思う。

併せて、日々刻々と変化をみせる情報通信技術（いわゆるIT）の世界にも目を向けて、21世紀の図書館像をも探っていきたいと考えている。

1. 業務のコンピュータ化

そもそも図書館業務のコンピュータ化とは何を指すのか。今では役所や商店・病院など、どのような所にもコンピュータの端末があるので、窓口で接客時に使用する・必要な情報を引き出す・事務処理に使うというイメージとして既に定着している感がある。

その通り、通常図書館業務でのコンピュータ使用といえば、いわゆる窓口業務であるところの、貸出し・返却・予約や、資料の検索を容易に思い浮かべることができる。

公共図書館業務にコンピュータが導入されたのは国内では1976（昭和51）年ころからで、県内では公共図書館に先んじて琉球大学附属

図書館で1982（昭和57）年閲覧部門のコンピュータ利用が始められた。

コンピュータ化するまでの貸出し・返却業務は主に、自分の名前と借りる資料を記入する記帳式や、学校図書館等で現在も使われる個人カードとブックカードを用いるニューアーク式、または袋のようなものにブックカードをはさんでおくというブラウン式などで行われていた。利用者の氏名や住所・電話番号などの情報は利用申請書上で、また所蔵する資料のデータは「書名」「著者名」「分類（請求記号）」「件名」の各種目録カードや資料原簿（台帳）で管理され、貸出しデータ・利用者データ・資料データを始め、資料に予約がかかった場合の予約情報なども、別々の主に紙媒体にあり、それぞれを手作業で繰っていくというものであった。

コンピュータの特徴は、多種多様なデータを蓄えてさえおけば、情報処理即ち情報の加工や蓄積・検索を、人間の能力以上に迅速かつ確実に行えることである。言葉や数字で検索をすることの多い図書館業務にうってつけの、技術の進歩の賜なのである。

先にもふれた通り、当館は1985（昭和60）年の開館時点からコンピュータ導入をしており、各々のデータは一元化され、それぞれをクロスオーバーで、それも瞬時に引き出すことが可能である。2回目のバージョンアップを迎える1998年頃は、利用者データが約5万件、資料データが約20万件、貸出しデータが年間約30万件というデータを保有するまでになっていた。当館の諸業務の実績は、まさにコンピュータの情報処理能力の恩恵に浴した中にあると言っても過言ではない。

これまでのコンピュータ関係の歩みは次の通りである。

＊

1984（昭和57）年11月14日

機種決定

1985（昭和60）年4月23日

図書館開館に伴いシステム稼働

1988（昭和63）年6月2日

としよまる（BM車）の運行開始に伴い携帯端末稼働開始

1991（平成3）年4月9日

中央カウンター側に利用者端末1台設置

1994（平成6）年6月3日

第1回バージョンアップの稼働日

1995（平成7）年

開館10周年記念学校ネットワーク事業専用回線による検索システム「てだこネット（PC-ネッ図くん）」運用開始（市内5中学校・1小学校）

1999（平成11）年4月23日

第2回バージョンアップの稼働日

＊

2. バージョンアップを取り巻く状況

県内の動き

当館が、2回目のコンピュータバージョンアップを控えた1996（平成8）～1998年頃、県内では丁度沖縄・具志川・石川の各市立図書館で機種切り替えが行われていた。沖縄県立図書館では膨大な郷土資料目録情報のデータ化と全面電算化、及び宮古・八重山各分館とのオンライン化が始まり、県都那覇市においても分館とのオンライン化が始まっていた。

既にコンピュータを導入しているところではどの館も共通し、同社同機種のグレードアップを当然のこととして回を重ねてきている状況であったが、当時あえて異業者異機種の選択の道を選んだのが沖縄市であった。業者変更の経過のほとんどを詳細で膨大な資料にきちんとまとめあげている上、変更した後の新業者とも諸機能の開発に余念がない様子は、数回の見学で教示を受ける私たちを驚かせた。沖縄市はまた、事務用インターネットの導入もしており、TRC（図書館流通センター）の

発注データと抽出MARC (machine readable cataloging/機械可読目録)のやりとりをし、図書発注の合理化を図っていた。かたや具志川市では、学校図書館とのコンピュータによるネットワークを計画していることもあって、業者の変更はなく、開館日数の維持を第一義とした短期間で効率のよいバージョンアップが工夫されていた。

具志川市立図書館は、1991年の開館以来、常に何事にも最先端にある図書館であるが、このころ既に県内公共図書館では初めて、国内の公立図書館でも早い時期に自館作成ホームページの立ち上げをおこなっており、web上での利用案内や所蔵雑誌の一覧や利用統計の掲載を行っていた。

両図書館のそれぞれのノウハウは後日大変参考になったものだ。

情報部会の役割

折しも国内では、パソコンの低価格化が進み、Windows95のブーム、個人利用インターネット利用の急増が見られ、図書館システムもオフコンからパソコンへ移行し始めた頃で、新たな胎動が感じられる時期でもあった。

情報部会は沖縄県公共図書館連絡協議会の、奉仕・資料・BM・広報・AV・児童の中の5番目の専門部会として1992(平成4)年発足された。県内各市町村立図書館や公民館図書室、その他、地域の資料室の職員が各館各1名ずつ参加し、年間4～5回程度集まって研修及び情報交換をしている。

県立図書館の電算化の話や沖縄市・具志川市の話題、コンピュータ全般の最新情報、コンピュータの中で蓄積される資料データのグレードについてなど、部会に参加することにより得られる生きた情報が多い。このような情報が、開館と同時にコンピュータ導入をするような図書館や、当館のようにバージョンアップを控えた館などには有益で、振り返ってみれば、広い視野でのシステム選択にとて

も役に立ったのである。

館内の様子

ところで当館では、開館以来沖縄コンピュータ業界先駆けでもある業者に、図書館システムの構築を依頼していた。開館から使用してきたシステムの第1回目のバージョンアップを経て、1995年には開館10周年を記念して図書館システムとは別途、PC-ネッ図くんというパッケージをつかった「学校ネットワーク」の新規事業にも携わってもらっていた。この業者への信頼は厚く、長年話し合っ

てシステムを相互補完してきたことの安心感があり、専任SE(システムエンジニア)は技能が確かで、誠実な仕事ぶりが評判であり、沖縄の公立図書館コンピュータ化の黎明期・発展期を支えてきた人として図書館員からの信望も厚かった。

当時使用していたシステムに関しては、ある程度の満足感はあったが、折に触れ目にした県内新設館の真新しいシステムに目を奪われ、インターネットやCD-ROMなど新しい業務に対する期待とともに改善を要する点を、賃借期間の終了を目前にしてほとんどの職員が口にするようになっていた。

自分の館の少々古めかしい画面レイアウトや周辺機器(バーコードリーダーやプリンター)の処理能力に対する要望、台数の絶対的不足による慢性的な長時間勤務の発生、ほかに1人の技術者で本島・離島の図書館システムを受け持っていることに対し、同レベルのSEを増員するなどの打開策がなく、企業の人材育成面に対する不安感がしのびよっていたのも事実であった。

う選択以外は考えられず、他社との比較など考えもつかなかったのである。

3. バージョンアップの実際

ーシステム検討から決定まで

口の端々にのぼってくる改善点があるならば、まずは出し合い客観的にみてみようと、1998年7月、新コンピュータシステムの選定に先立ち、職員を対象に『新コンピュータシステム導入に関するアンケート』を行った。

アンケートでは貸出し・返却業務、検索・予約業務のほか、資料登録や相互貸借、利用者端末、現行機種の台数や周辺機器の使い勝手等について問いかけ、回答を得た。

館内組織化

新コンピュータを導入するにあたり、職員の意見を集約し、じっくりと調査や検討を行うためにも、館内に検討スタッフを置く必要があった。コンピュータ賃借契約を司る当館資料係長を委員長とし、奉仕係長・沖縄学主査・主任（主事）2名・図書館業務嘱託員2名で構成される「新図書館コンピュータ導入検討委員会」が1998年7月10日設置され、前述の内容の職員アンケートを実施した。アンケートはA4用紙21頁分にまとめられ、以後ほぼこのメンバーで他館のシステムを見聞し、仕様の詳細を検討した。

他館視察見学

県外先進地視察の予算化を特にしていなかったため、石川市・糸満市・沖縄市・宜野湾市・具志川市・豊見城村の各図書館システムを視察見学し、コンピュータの担当職員からの導入経過や使い勝手など細かな点の聞き取りをすすめた。と同時に、カウンター内での職員の機器の操作性や各端末間の動線をチェックし、フロアにおいては、利用者端末を使う方々の動き等も見せていただいた。

先の検討委員が代表ででかけた視察だった

が、どのようにうまくできたカタログでも、現物を見、音を聞き、触ってみるのに勝るものではなく、このことが後にふれる「館内デモンストレーション」に結びついていく。

要望書の作成

業者の出入りも増え、視察見学をすすめる7～8月頃には、現行システムの業者を含め6社の名前が挙がっていた。うち新規参入予定だった3社は、やり取りの中で、サポート体制に必要な公共図書館専門のSEがいないこと、本館の運営と一体であるところのBM（移動図書館）対応がなされていないことにより、

○株沖縄富士通システムエンジニアリング
・・・富士通

○株オーシーシー（OCC）・・・NEC

○株創和ビジネス・マシンズ・・・IBM

（五十音順）

の3社が選定対象となったのである。

前述の職員アンケートをベースにし、沖縄市や具志川市の資料を参考にして352項目（B4用紙全18頁）からなる『新コンピュータシステムに関する要望書（質問票）』（資料Ⅰ）をまとめ、その3社に対して送付し、回答を得た。9月下旬、352の件数は内部からも質問項目の精選・コンパクト化の指摘をされたが、職員のアンケート結果にはバージョンアップに対するあらゆる角度からの指摘があり、拙い表現ながら一言一言をないがしろにはできない面があった。

通常別途仕様書を作成して臨むべきであり、豊見城村の新館準備で用いられた仕様書が参考になったが、なにより当館要望書は日々業務を遂行する中から生まれた疑問・質問・要望の数々と新コンピュータ業務へのヒントに満ちたものだった。また質問が非常に細かったため、検討委員会においてこれを仕様書に代えることに決定した。よって「要望書への回答」をベース（仕様書代わり）にし

てシステム開発を進めていこうということになったのである。業者にもその点は了解願った。

要望書と同時に、各カウンターや部屋ごとの必要台数や周辺機器の台数の案を出し、システム開発費用に合算した形での見積書を3業者に提出してもらった。

業者選定委員会

要望書の発送と相前後して、同じく9月下旬に「新・図書館コンピュータ業者選定委員会」が設置された。

委員長は図書館長、副委員長は資料係長で、検討委員の奉仕係長・沖縄学主査、2主任(主事)に加え、館外から情報処理課長、情報処理課技査の2名を迎えた。

当時の情報処理課長は、当館の開館時奉仕係長を務め図書館コンピュータ導入の中心にあった方で、図書館システムが何であるかを充分掌握していたのが幸いだった。技査においては本庁のシステム全般を担っている方でもあり、兩人には業者選定に係る議事のなかでの確かな指摘をしていただいた。他に契約面へのアドバイス、機器及び価格面のチェック等、委員会外でも選定の様々な場面での助言も得難いものだった。

デモの実施

要望書への回答が集まり始めた10月下旬から約1週間ほど、館内視聴覚室において3機種のデモンストレーションが行われた。これまでも、3社3様のプレゼンテーションはあったのだが、どれも実際の操作が伴わず、選定をしていく上でもデモは必要不可欠と見なされた。検討委員会でも、当初より選定に際しては、3業者からの回答書における得点とデモにおける得点が大きな比重を占める点で話し合われていた。

デモに使う視聴覚室には、パネルで各ブースごとに仕切をし、他業者には見えないよう

に配慮した。機種ごとに必要に応じてSEや営業担当者に手ほどきしてもらい、職員については空き時間に各ブースを訪れ、または1人でゆっくりさわってみて、あらかじめ決めてあった次のような項目のチェックを行った。

*

「コンピュータ・デモに対する点数表・コメント(チェック表)」

〔貸出〕

1. 貸出処理はスムーズに行えますか。
2. 他画面へ行ったときの操作はどうか。(貸出→予約、貸出→資料検索)

〔返却〕

3. 返却処理はスムーズに行えますか。
4. 他画面へ行ったときの操作はどうか。(返却→予約、返却→貸出)

〔資料検索〕

5. 資料検索はスムーズに行えますか。
6. 他画面へ行ったときの操作はどうか。(資料検索→資料修正、資料検索→利用者検索)
7. 913.6アの資料を検索してみてください。

8. 予約処理はスムーズに行えますか。

〔利用者登録/検索〕

9. 利用者登録はスムーズに行えますか。
10. 利用者検索はスムーズに行えますか。
11. 他画面へ行ったときの操作はどうか。

〔総合〕

12. 画面は見やすいですか。
(画面構成、文字の大きさ等)
13. 画面や文字の色使いはどうか。
14. スキャナーの読みとりはいいですか。
(スピード含む)
15. レシートの打ち上がるスピードや印字の様子についてはどうか。
16. 機械から発生する音についてはどうか。(耳障りでないか)
17. マウス、キーボードは使いやすいです

か。

18. 頻繁に画面を変えなくても業務を行うことができますか。

《補記》

1. 各担当で使用する画面について良いと思われる箇所。
 2. 特に良いと思われる機能について。
- ※その他3社に共通して（記述式）

＊

カスタマイズ 1

このように当館で集約し9月に提示した同質問表の要望（質問）に対し、10月には各社から回答を得ることができたほか、窓口業務従事者を対象として実施した各社システムの操作デモの結果、10月の下旬には回答書とデモによる得点、及び見積書が出揃っていた。

同時進行で、職員からの意見・感想を中心に、検討委員会で352項目のなかから業務を洗い出し92項目に絞りこんだ。これらの項目は図書館にとって大切な機能であるのにも関わらず、各社ともほぼ基本機能になく、カスタマイズ項目であり、別途開発を要すると答えられていたものであった。絞り込まれた項目は当館の新システムにとって重要・必須なものとしてみなされ、各社あて「新・図書館コンピュータに係る作業工程表の作成と見積書の提出について（依頼）」再要望（質問・回答受理とも／12月）されるに至る。つまり、どのシステムも92項目以外の機能は、程度の差こそあれ基本的に有しており、図書館側が重要で落とせないと思う機能に対し、別途開発が必要ならば作業工程や見積書上にどう現れますか、という問いを発したものであった。

各社とも暮れのせわしい中迅速な対応で回答を寄せてくれたが、対応可能項目が多く、行程表上も当館の希望する日程に近い上、見積書においても最も安価であった業者が選定されるに至る。この業者は、先の2つの得点

表においてもトップであった。

＊

〔ここまでの流れ〕

- (7) 職員アンケート→図書館からの要望
(352項目) → 回答→得点化
- (i) 館内デモの実施→チェックポイント
→得点化
- (u) 重要92項目決定・再要望→再回答
(カスタマイズ可能項目と工程表)
- (I) 第1回見積書→破棄→第2回見積書
(7)+(i)+(u)+(I)=業者決定
- (o) 時間外・土・日等休日の対応
(ぬきうち調査)

※(o) は業者決定そのものには加味されず、業者選定会議上で参考資料とされた。

＊

こうしてクリスマスイブに行われた業者選定委員会において満場一致で新コンピュータの業者が決定された。

4. 大きなうねりの中で

ーシステム決定から稼働まで

データ移行

年が明けて1月、正月3ヶ月の短期決戦のため、当時の日誌を見てもデータ移行やシステム導入、カスタマイズに関する会議がほぼ毎日のように行われていたのがわかる。

次の文章は、データ移行にいよいよ着手しようという3月、移行仕様書のかみ文としてしたためたのだが、データ移行について端的に表されているので少々引用したい。

＊

○データ移行概要

この度、図書館業務用コンピュータの賃借期間満了に伴い、現行システム「NEC社製オフィスサーバーLICS1/AD」から新システム「富士通社製ILIS/X10NX」への機種変更をすることとなり、現システムから新システムへデータ移行の要が生じました。

ここでいうデータ移行とは、旧システムで利用していたデータを新システムに寄せ替える作業であり、今回は特にオフコンからパソコンのクライアントサーバー方式に変更になったということもあって、新旧でそのデータ管理やデータ保持の仕組みが大きく異なる面が特徴といえます。具体的には、当館との仕様打ち合わせを経て作成された『データ移行仕様書』に基づき、新システム担当者（業者）の作成したプログラムや移行ツールを用いてのコンピュータ上での作業となります。

○データ移行仕様書

3冊の仕様書は、データ移行の品質を高めるため、また図書館側と新システム担当者との共通理解を促進する上でも必要不可欠なものです。

内容は、コンピュータ上の各ファイル毎（図書・利用者・貸出・AV・雑誌・典拠）の項目一つ一つに対し、移行に際しての細かな指示がなされています。わかりやすく言えば、「現機種の○○項目に入っているデータは新機種でも間違いなく○○へ入りなさい」であるとか、逆にこの機会に「現在は△△項目であるが、行き先を変更したいので新機種では□□の欄に入りなさい」などと決める新旧対照表であり、移行プログラムのベースとなるものです。約500を数える各項目毎の指示（編集方法等）は、図書館と新システム担当両者の幾度にもわたる討議・検討・確認の結果得られたものであり、今回の当館システムオリジナルの貴重な成果です。（後略）

＊

データ移行の打ち合わせというのは、先に述べたとおり元住所のマンションから新転居先のマンションに移る際に、部屋番号を間違えないようにとの確認作業にほかならなかった。利用者データのようにシンプルなものならまだしも、図書・雑誌・AVのような項目が多岐にわたるものについては作業も困難を極めた。特に困ったのは、例えば、旧システム

には1家庭に2人で住んでいるのに、新居では2人とも別々の部屋に移りなさいと言うような指示をする時である。つまり、元システムには「一般件名」という1項目の枠しかないのに、新システムには「個人件名」と「一般件名」の2つがあるという時で、この場合はどうするか、また別の場合はどうするなど、意志決定を迫られる場面が多々あり、各データ項目とも適切な移転先を探して、悩みながらの作業が続いた。書名の位置に出版社が入るなどという間違いがあってはならず項目一つ一つの決定に最も気を遣う作業だった。

SEの作業としては、「著者名」「出版社名」「件名」の3つの典拠ファイル移行があった。件名については当館が積極的にデータ入力してきたものであり、典拠の移行は必須だった。旧システムでは大勢で入力をしてきたこともあり、不統一なデータも多く、典拠ファイルを移行しても修正を要するものがほとんどだが、沖縄関係や児童書の件名はこれなしではリストアップがなりたないもので、まずは移行を成功させなくてはならなかった。

ほかには、データ移行のタイミングに併せて固定長TRC MARCデータを可変長Uタイプ化へ変換する分が10万件、その変換後にUタイプデータに内容細目ファイルを寄せ換える作業、開館当初児童書で採用していたNPL MARCデータをTRC MARCへ変換する分が2万件と、バージョンアップの機会をとらえ図書データの充実も図った。データ移行の前段階であるデータの抜き取りについては旧業者に、データの寄せ換えについてはTRCの手をわずらわせた。

またマシン対マシンへのデータ移行に際しては万全の体制で臨むため閉館せざるを得ず、10市の状況を確認した上で、資料・利用者・貸出し等のデータ量に鑑み、期間を1ヶ月とさせていただいた。「こんなにかかるの？」とよく尋ねられ、春休みの時期とも重なり胸の痛い思いもしたが、オフコンからパ

ソコンへのデータ移行そのものに加え、業者変更という要素もあり、またMARCデータの置き換えなどは図書館側が強く望んだ点でもあり、今回は、より短期間かつ安全な方策を探らなければならないが、良質なデータあってこそその後のスムーズな図書館活動も成り立つもので、1ヶ月というのは妥当な設定であったといえる。

カスタマイズ2

カスタマイズとは、「ユーザー自身の使い方に合わせて設定や機能を変えること。パソコンでは主にソフトウェア上の設定を指す」『日経パソコン新語辞典2000年』日経BP社刊より

CUSTOMER=顧客

COSTOMIZE=顧客化・顧客仕様

新コンピュータシステムは、窓口業務や資料登録業務などをはじめとして業務全般にわたりグレードアップした機能があり、視察や操作デモでの職員からの評価は高かった。このようなパッケージの持つ基本機能に、当館要望を受けて付加される重要・必須機能をカスタマイズという。業者側にとっては、基本パッケージに対してのプログラムの新規開発を指し、新システムにおいて、更なる業務展開をめざして実施される当館固有の機能なのである。

業者決定後の流れは次のとおり。

＊

カスタマイズ対象項目検討ヒアリング（図書館対システム開発元東北富士通システムエンジニアリング／1月～4月／計6回）→項目統廃合・最終項目決定（→25項目）→優先順位決定（→19項目にまとめる）→導入時期決定（第1期・第2期）

- ・第1期 1999年4月23日導入→優先順位第1位～第9位
- ・第2期 1999年9月30日導入→優先順位第10位～第19位

データ移行・資料受入・統計の起算開始を4月と設定したい項目、窓口業務で特に利用者の便に係る項目・窓口業務で特に多くの職員の便に係る項目を第1期カスタマイズ分とし、残り窓口業務・係個別業務等は、第2期カスタマイズ項目とした。

＜第1期＞

- (1) 自館入力分・パンチ入力分・他社MARC分（例えばNPL）へのTRC MARCの一括上書きが可能。
- (2) 各種MARCの取り込みが可能。
- (3) 雑誌検索第1画面で雑誌の基書誌と当館における所蔵期間をみるができる。同じ画面で雑誌受入簿のように受入状況や貸出状況を把握（色または文字で）することができる。実際の発行からの検索だけではなく、「○年○月号」「巻次」「通し番号」「ISSN」からの検索が可能である。
- (4) コピー枚数と催し物は毎日のカウントを自由に入力可能。月毎／年毎の累計が可能。
- (5) ○○図書館からの借用実績や明細の統計出力やリスト打ち上げが可能。（現在貸出し中の点数等と年度内の借用タイトル等を必要に応じて選択）
- (6) 貸出し画面から予約・リクエスト一覧をレシートで出力する。
- (7) 貸出しの際、予約待ちが多い資料はレシートで「この資料は予約返却待ち現在○人です。利用後はお早めにご返却ください」などとプリントアウトをする。
- (8) カード忘れで貸出した回数を累計する。累計した所定の回数で、「カード忘れ○回につき再発行してください」などの指示をする。（レシートでプリントアウトなど）
- (9) 返却時に利用者コード（利用者名）を

同時に表示する。その時に貸し出し点数と返却点数及び残り点数が表示される。また、この画面で返却証明レシートを出力することができる。

＜第2期＞

- (1) 貸出し資料でこちらの特定するものにはカラー表示をする。

例：期限切れ資料（期限切れで予約のかかっている資料含む）・弁償手続き中資料等

- (2) 「弁償届け」の用紙をプリントアウトする。
- (3) 予約画面で貸出し利用者一覧を出すと、返却予定日順で利用者名や貸出冊数、電話番号、利用者番号をみることができる。
- (4) 返却期限切れの資料に予約がかかった場合、画面上で何らかの表示をする。
- (5) 例えば企画書架など、期限を設定したロケーション活用が可能である。（期限が過ぎたら元ロケーションに自動的に戻る）
- (6) 予約資料が準備できた場合、検索画面から予約ハガキまたは事務用レシートをプリントアウトする。別途事務用帳票も出力する。
- (7) 家族一括修正（住所・電話番号等）ができる。
- (8) 予約処理状況の出力が可能。（未処理状況／未提供資料リスト）
- (9) 督促ハガキは随時何度でも打ち出し可能（期間設定／予約あり／督促回数など）。
- (10) 長期未返却（仮に3年以上）資料を持った利用者に自動的に「長期未返却です」などというコメントがかかる。このコメントによるリスト打ち上げも可能。
- (11) 弁償手続き中の利用者のリストアップが可能。（弁償後はデータ削除）

- (12) 督促ハガキの資料番号の欄で「予約あり」（返却期限を過ぎた予約ありの資料）のコメント表示が自動的に可能。

- (13) 多督促者一覧表を作成することが可能。（月日指定／督促回数指定）

- (14) 督促対象図書一覧表（図書一覧表と同一帳票形態）の作成が可能。（月日指定）

- (15) 督促一覧表は同一電話番号及び同一住所で並べる。

- (16) 蔵書点検後、点検もれ一覧を種別やロケーション別、予約資料別にリストアップする。

＊

当初の項目を統廃合し見直しながら、それ以外にも次のような機能も盛り込んだ。

- (ア) 週約2,000件の国内出版データが、インターネットを介し配信される TRC「新刊全件MARC」を採用。

- (イ) 類義語・同義語を自動相関検索するシソーラスデータベース辞書を採用。

- (ウ) 全文検索（コンテキスト検索）を採用。

- (エ) 著者人名典拠ファイルを採用。

このように様々な基本機能・オリジナル機能を搭載し、新システムは予定通り開館満14年の春の吉き日に稼働を開始した。

担当職員の課題

業者変更というゼロからの出発であり、かつ業者決定からシステム導入まで3ヶ月の短い期間で、カウンター業務や個人業務を持ちつつ、タイムスケジュールどおりに諸準備をこなすのは負担が大きかった。今回は業務分析をして、職員に負担のないよう専任を置くなどの策を講じながら、県立図書館や那覇市立中央図書館のように庶務的なポジションにコンピュータ諸準備業務をまかせることなども考えたい。図書館業務に精通しコンピュータに詳しい職員なら、導入後のメンテナンスもそこでできるようになり、合理的でもあり

安心でもある。

5. 業務内容の変化

ー機種変更後のメンテナンスと課題

インターネット接続

インターネットの普及の原因は、各人各所で生み出された情報の塊（データベース）に自分でたどりつき、直接情報を得られることとされる。いかめしい人々の頭の中や、図書館の本の中や専用回線上のデータベースに囲い込まれていた情報が、整備されていれば、たちどころに活用可能となる。

システムのバージョンアップと時期を前後して、浦添市では全庁的にインターネットの使用が始まり、図書館においても新システム上6台で事務用として利用が可能になった。まだ検索に不慣れな職員が大半であるが、特に資料発注業務や書誌検索、レファレンス室における活躍というまでもなく、検索結果をプリントアウトし利用に供する事ができないなどの制限はあるけれども、蔵書で掲載された情報に併せてフル活用している。

また、インターネットの接続により期限付きではあるが国会図書館総合目録ネットワークモニター館として参加することができ、ネットワーク参加館の書誌や所蔵状況を確認して、国会図書館からの貸借や県外館からの借用しての利用者への資料提供に大いに役立っている。

機器と業務の変化

バージョンアップ後、15インチ液晶画面を採用したことで、ディスプレイが約3分の1の薄さになった。これで各カウンター上にそのままディスプレイを置くことができるようになり、結果カウンター内を広々と使うことが可能となった。なにより利用者からの評判がよく、どこで買えばいいかと言う問い合わせも相次ぎ会話はずんだ。このような機器

の新調や利用者端末の刷新、レシート・資料一覧出力のスピードアップや多機能化は利用者の目にもとまりやすく、わかりやすい改善点かもしれない。各部屋・カウンターごとに増えた台数と目に見えて改善されたところを（資料Ⅱ）にまとめた。

職員の所感は、改善が叶ったところや今後の課題を含め、使用1年目に「新コンピュータ使用に関する職員アンケート」にまとめたものに詳しい。この結果は、本年度4月4日付で業者宛送付し、アンケートについて数回話し合いを持ち、契約の範囲内の改善については迅速な対応をみている。費用を伴う下記のような改善点については今後の課題としているところである。

事務方改善は市民の目には直接ふれないが、効率的になった分が結局は市民に返っていく。要望書には挙がっていたものの、時期尚早な点もあり技術革新には届かなかった次の(Ⅰ)～(Ⅴ)のようなことも、これから随時改善されていくであろう。

(Ⅶ)台数の更なる増設

準備段階で試算し確実な台数を抑えたつもりだが、現在事務用の台数不足感是否めない。2000年8月28日付「IT時代に対応した地方公共団体における情報化施策等の推進に関する指針」（旧自治省）でも職員1人あたり1台が望ましいとされており、早めの改善が必要であろう。

(Ⅰ)BMの業務

現在ノートパソコン2台とPORTYという携帯端末3台でBM業務を行っている。BM職員の望むことは、出先においても本館からリアルタイムな資料情報等が検索可能なことにつきる。昨今ではモバイルインターネット(iモードなど)が爆発的に普及し、移動しながらにしての廉価な情報検索と入手が夢物語でなくなってきた。奇しくもBM(BOOK MOBILE/ブックモービル)のMOBILEは今流行のモバイルの別の読み方で「移動可能な」

という意味であり、日本が世界に誇る携帯電話の技術やアイデアが、特に移動図書館の近未来に明るい希望を見せてくれるだろう。

(ウ)所蔵情報の変容

今回、館内利用者端末で立体的に資料の形状を確認できるところまでは実現できなかった。現在の平板な「あるかないか」の状況確認と探している資料の表紙や背表紙・文字の目録情報があれば利用者にはより便利になる。著作権の問題も今後は定価への課金などでクリアし活用できるのではないかと考えている。

(I)蔵書点検

図書館が蔵書点検期間をもち続けるなら期間を短縮化し、よりグレードの高いメンテナンスを行わなければならない。そこでこれまでの「不明／非不明（館内あり）」の確認以外に一冊一冊の資料の状況把握を機械化した。資料のあるなしと、閉じられた中の汚損・破損状況も一見してわかるような新機種があるとよい。これも今回のバージョンアップには間に合わなくて残念であったが、蔵書点検合理化・高度化へのアイデアがやがて各社から出てくるのが楽しみである。

(ウ)予約資料準備の連絡

予約準備ができたという連絡を利用者に行う場合、図書館システムと連動してメールやファクス等を利用して連絡するというのも進歩を期待するジャンルである。

今後、図書館システムの高機能化がすすみ、どの業者の製品も肩を並べ更に甲乙つけがたいものになるだろう。来るべき時点で選択できる最適なシステムを選んでいくことに変化はないが、これからは館内セキュリティを含む機械化全般をトータルコーディネートできるところや最先端の情報通信技術を安価で提案できるところが図書館にとって優位性（随意契約の理由）を見いだせる業者になるのではないかと思う。

6. 資料検索ホームページと地域イントラネット構想

図書館システムが軌道にのり落ち着きをみせた頃、国際交流課の主管である浦添市公式ホームページ事業が各課宛通知された。市のホームページは、2000年4月1日からの稼働を目標に準備が進んでおり、開設のコンセプトは「浦添を市外へアピールすると同時に市民が活用できる行政情報を満載する」というものであり、図書館は公民館や「施設ガイド」に施設案内や利用案内等を掲載する予定であった。

当館では施設ガイドを先に発信し、翌年資料検索システムを導入しようと考えていたが、市民の声の高まりもあり、急遽市役所全体の開設日2000年4月1日に間に合わせる事となった。他の要因としては1998年から3ヶ年計画で「情報化・活性化事業（旧文部省補助）」が開始され、学校図書館にインターネット接続可能なパソコンが各2台ずつ置かれるという状況による。児童・生徒の学習にとって公共図書館の蔵書情報は有益であるという点から、専用線のてだこネット以外の蔵書検索システムを、実は前年度から主管課の指導課より切望されてもいた。

残念ながら開発費用の予算措置はされていなかったもので、図書購入費などからの流用でまかなうこととし、図書館システムとの連携が考えられたので、業者は富士通と決まった。2～3種の提案があった中から、費用面・管理面・スケジュール面からみて東北富士通システムエンジニアリング内にサーバー機を持つアウトソーシングで行うことになった。

画面のデザインを奉仕係で、web上に乗せるデータの項目の決定と新規開発分のメニューチェックを資料係で分担し、全国の図書館の画面を参照しながら作業をすすめた。

現在、第1・第3火曜日に差分（増減）データを抽出し圧縮、東北宛にe-mailで送信し、2週に1度のデータ更新をしている。また、

同じくe-mailを利用して、各学校からと県内公共図書館からの予約を受け付けている。

近い将来、貸出し状況等がリアルタイムでわかる方法や、ID・パスワードを用いた予約対応型に改訂せねばならず、いずれはモバイルの検索にも応じられるようにしたい。

現在月平均400件のアクセスがあるが、先に述べたような機能の充実を図ると、益々の利用拡大が見込めるであろう。

有用なシステムを目指して

郵政省の補助事業「浦添市地域イントラネット基盤整備事業」が計画されている。市政情報・美術館・文化課・教育研究所・市内16校・当館の各ポイントからのデータ構築と相互検索が可能になる。10年ほど前には笑われていたことが、この程実現するのである。

数年後にはほりをかぶった端末が各施設に残らないようにするために、価値ある情報を日々蓄え、私たちは次のいずれかに属する職員となって、光ファイバーの線の中を高速で流れる情報の質の向上と内容の更新に努めたい。

- ①資料（史料）そのものの価値を見抜く
- ②情報を整理・体系化・データベース構築をし、データの均一化を図る
- ③情報化構築と予算的裏付けができる
- ④情報の活用を促す

知的財産のネットワークに関する見識を持ち、単課・単部的な発想を避けて連携すれば市域・県域の枠を超えたデータバンクとして各所で活用されるのは間違いない。誰がどこでどのような情報を必要としているかは計り知れないこの時代、だれでもどんな情報でもインターネットの上で自由に発信できる今だからこそ、行政の一端から出所確かで役に立つデータを構築・管理・発信したいものだ。

7. 図書館業務機械化・情報化の未来 ーさらに向こうへ

最新技術のショールーム

さてここまでは図書館コンピュータシステムを中心に話を進めてきた。ここからは図書館全般の機械化・情報化にも目を向けたい。近年の公共図書館では、この機械化の話題が各所でみられ、例えば自動貸出し機がいいのか悪いのかなどと論争も巻き起こっている。

自治体自体が情報化・情報公開・合理化の諸観点から電子政府・電子役所化の渦に巻き込まれようとする中、行政の一員・または図書館員として生き残り策を真剣に考えるときがやってきたような気がしている。

折しも7月に九州・沖縄サミットで「グローバルな情報社会に関する宣言（IT宣言）」が採択され、現在、2001年（平成13）1月に「高度情報通信ネットワーク社会形成基本法（IT基本法）」が施行される前段にある。どちらにもほんの一部分だが図書館についての記述があるということを、私たちも胸におとしてみるべきであろう。

ところで、IT宣言の11条にみられる「デジタル・デバイド（情報格差）の解消」にみる図書館への期待とは何であろうか。

11条の「教育、生涯教育及び訓練を通じてIT関連の読み書き能力及び技能をはぐくむ機会の提供」をはかるという部分であるが、まずはパソコン・インターネット等にふれてもらう場の提供に始まるだろう。図書館のエントランスホールに置くことは、すぐにでも実現できそうなことである。

いかにインターネット人口2000万人を超えようとも、自宅や職場にパソコンやインターネットの設備のない方々、インターネットカフェ（サイバーカフェ）等へ行けない方への情報アクセス権は公的に保障されるべきである。我田引水であるが公共施設のロビーにただインターネット接続パソコンをおいてあるよりも、情報リテラシーの獲得と生涯学習の観点において、より図書館にあることが望ましいと私は考える。

また今後はインターネット端末の開放のほかに、先端情報技術のショールーム化する必要も出てくるだろう。最先端の技術を図書館員が使うだけでなく、利用者が直接ふれることにより情報技術の使い方の端緒を知り、臆せず使いこなすまでの役割を果たすというのが、デジタルデバイドの解消のための図書館の役割ではないのか。その為の職員のスキルアップは必須であるが。

学校教育における情報の獲得・加工（リテラシー）は義務教育課程で今後引き続き強化されていくであろうから、社会人については図書館等で保障していくことが必要となる。図書館の役割を簡単にまとめてみる。

- ①インターネット・CD-ROM・パソコンの使用・衛星放送等最新技術の積極的導入
- ②①を一定ルールを決め開放するか、または活用する
- ③①の活用方法を伝える（図書館員が直接または図書館講座の開講で）
- ④①を活用したデジタル情報の蓄積（技術者・ボランティアの育成）
- ⑤①を備えている人に対しての情報発信

学びの殿堂

飛躍してしまうが、11条の「他の方法によっては教育及び訓練を得られなかった人々に対して革新的な生涯学習の機会を提供するためのITの利用を奨励する」という部分に即し、情報通信技術を活用した図書館の運営を考えてみたい。

現在、各種民間の資格取得や学習塾の講座に加え、放送大学がCS（通信衛星）で講座をもっている。その他の通信課程を持つ大学でも衛星放送やインターネット等を利用した講義方法を検討されているというが、通信課程でなくてもネットワーク型の授業が試行されている大学もあり、国内では衛星受像ができ「エル・ネット（教育情報通信ネットワーク／文部省）」で実施される公開講座を受講

できる図書館もある。沖縄の地域格差を埋めるためにも、今後は教養を深めるのみならず、希望する人には学習単位取得をめざせる学習方法があるといい。将来は衛星放送等の受信可能な設備が、当館の例えば現在の当館視聴覚室・学習室にあり、講義を受講したら、今度はレポートを書くための参考資料・文献を書架から抜き取れる。個人のリカレント教育・リフレッシュ教育を支え育てて行くという図書館の未来像が見えるような気がする。

IT技術の活用と文献利用、これが今後の図書館の姿のように思える。少子・高齢化を生きるあらゆる年代の人に、また学びたいと望んでやまない人に、図書館は場と機会を準備することができる。近い将来、生涯の学びに意欲を燃やす大人たちや総合的学習で「生きる力」を得たこどもたちは、情報通信技術を使いこなし、きっと新しい世界を切り拓いてくれるだろう。

おわりに

最近よく読まれている本のタイトル『僕にできないこと、僕にしかできないこと』（春山満著）を真似て「人にできないこと、人にしかできないこと」と変えてみると機械化のキーワードが浮かんでくるだろうか。電子自治体構想でも職員の数が減るのではなく、仕事の質が変容するのだとあり、ジェネラリストから各部門のスペシャリストへという、来たるべき時代の職員像が垣間見える。利用者の立場に立てる職員、慣れない方々への案内やガイダンス、図書館の使い方の手ほどきに長けた職員、問われた瞬間に適切な資料が浮かぶ職員、資料選択眼がある職員、読み聞かせ（読み語り）が上手な職員。これまでも図書館職員にはこのような要素が求められてきた。そこに今や「情報通信技術に長けた」という要素が入ろうとしており、これらの技術が複合的に備わった職員が望まれると聞く。

図書館の歴史は情報の蓄積と合理的な活用

に他ならない。従前もこれからも肝心なのはいろいろな技術を使ってどのようにサービス展開をしていくかである。最新技術に追われるのではなく技術を引き寄せ、無駄な投資は慎み、活用されることを目的として日々邁進したい。

浦添市立図書館の萌芽期に、自由で先見性のある発想があったように、いわゆる成熟期の今日においてもなおその視点を変えず、新技術にも門戸を開いていきたいものである。

しかし、いかに機械化（電子自治体化）されようとも「機械に仕事をさせる職員」は必要だという。私たちは21世紀の図書館サービスひいては行政サービスに価値ある「ひと」として生き残り、グレードの高い仕事をしていきたい。今日も明日も最新機器を笑顔で操り図書館玄関の扉を大きく開けて待つ職員でありたいと思う。

〔参考資料〕

- ・郵政省編「特集 ITがひらく21世紀～インターネットとモバイル通信が拓げるフロンティア」『通信白書 平成12年版』ぎょうせい 2000年6月
- ・日本インターネット協会編『インターネット白書 2000』インプレス 2000年6月
- ・ラッセル・コミュニケーションズ編著『IT用語事典』ベストセラーズ 2000年10月
- ・藤田英時著『パソコン用語語源で納得！』ナツメ社 2000年10月
- ・坂村健著『痛快！コンピュータ学』集英社インターナショナル 1999年11月
- ・井熊均著『電子自治体－2003年ネット革命で「役所」が消える』日刊工業新聞社 2000年5月
- ・榎並利博著『自治体のIT革命』東洋経済新報社 2000年6月
- ・白井均〔ほか〕著『電子政府（デジタルガバメント）－ITが政府を革新する』東洋経済新報社 2000年7月
- ・石井威望監修『iモード革命』とは何か！－衝

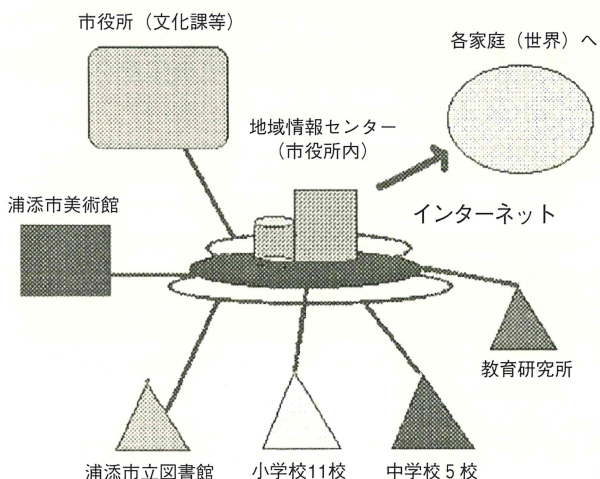
撃のITビッグバン！！』青春出版社 2000年6月

- ・浜田和幸「『IT革命』アメリカも悩んでいる」『文芸春秋』2000年12月号
- ・『図書館年鑑 2000』日本図書館協会 2000年6月
- ・『図書館ハンドブック』日本図書館協会 1990年

〔参考ホームページ〕 参照は2000年12月18日現在

- ・首相官邸ホームページ
www1.kantei.go.jp/index-j2.html
- ・旧自治省 www.mha.go.jp/news/000828.html
- ・日本総合研究所電子自治体フォーラム
www.e-govforum.net/
- ・週刊「行政情報化推進ニュース」
cgi.kapu.cplaza.ne.jp/m/569.html
- ・朝日新聞九州・沖縄サミット
www.asahi.com/paper/okinawa/sammit/
- ・情報科学技術協会(INFOSTA)
www.infosta.or.jp
- ・放送大学 www.u-air.ac.jp/hp
- ・私立大学通信教育協会 www.uce.or.jp/
- ・黒澤公人のホームページ
subsite.icu.ac.jp/people/kimito
- ・浦添市立図書館（蔵書検索）
<http://www.library.ne.jp/urasoe.okinawa>

〔資料Ⅳ〕教育・文化システムイメージ図



〔資料Ⅰ〕

『新コンピュータシステムに関する要望書（質問票）』

1. 貸出処理

- (1)一つの画面で一般・団体の貸出カードが使えますか。
- (2)貸出しカードの有効期限を自動的にチェックしコメントで知らせることができますか。
- (3)各種エラー及びコメントの検出時には音または静止画面で知らせることができますか。
- (4)貸出しの時ワンタッチで本人の期限切れ一覧が出力できますか。
- (5)継続貸出しの時予約資料をコメントと音で知らせることができますか。
- (6)強制返却の該当資料を自動的に不明本にすることができますか。強制返却時にその資料の予約状況・件数などをレシート等で出力できますか。
- (7)貸出し画面から利用者修正ができますか。
- (8)貸出し延長は個別継続・一括継続の指定ができますか。
- (9)貸出し画面から利用者検索をし、データ取り込みができますか。逆に、利用者検索画面から貸出し画面に移行できますか。
- (10)資料が未返却状態でも貸出しが可能ですか。（同一人物または別の利用者へ）その際予約資料の判別が可能ですか。
- (11)利用者の情報を1つの画面で見ることができますか。
例）リアルタイムの貸出し資料名・予約資料名（予約順）・利用者コメント等
- (12)貸出し可能点数枠（貸出し上限）を常時表示し、その側にリアルタイムで現貸出し点数と、残り貸出し可能点数を表示できますか。
例）「上限10点／貸出し中6点／残り4点可能」という表示。
- (13)貸出し資料でこちらの特定するものにはカラー表示ができますか。
例）期限切れ資料（期限切れで予約のかかっている資料含む）・弁償手続き中資料等
- (14)提供可能な予約資料の貸出し画面における表示が、貸出し画面で可能ですか。
- (15)貸出し画面で利用者名の表示を選択できますか。
例）利用者番号のみ表示／利用者番号かつ利用者名表示
- (16)資料毎の貸出し期限設定ができますか。
（一夜貸出し／特別貸出し対応）
- (17)貸出し画面から予約入力・予約解除ができますか。
- (18)貸出し上限や貸出し期限の設定が自由にできますか。
- (19)「〇ヶ月以上の未返却資料」がある場合、貸出し画面でカードをなぞったらレシートで「未返却資料があります。資料返却後に貸出しをお願いします」等のメッセージがプリントアウトできますか。
（貸出し中資料名表示）
- (20)貸出し処理中の利用者の、同画面上での返却も行うことができますか。

- (21)利用者が登録外資料を借りに来た場合、その場で元データを引くなどして貸出しを行うことができますか。
- (22)カード忘れて貸出した回数を累計できますか。累計した所定の回数で、「カード忘れ〇回につき再発行してください」などの指示ができますか。
（レシートでプリントアウトなど）
- (23)リクエスト資料はその場でタイトルをワープロ打ちし、その入力した資料名を貸出し画面の予約欄でみることが可能ですか。さらに、資料検索画面で検索対象とすることができますか。利用後は削除可能ですか。
- (24)貸出しの時に「このカードはご本人ですか」という問いかけが可能ですか。
- (25)貸出しの際、予約待ちが多い資料はレシートで「この資料は予約返却待ち現在〇人です。利用後はお早めにご返却ください」などとプリントアウトできますか。
- (26)貸出し時のレシート出力は選択ができますか。
（出す／出さない）
- (27)貸出し画面から予約・リクエスト一覧がレシートで出力できますか。
- (28)貸出し画面から資料検索画面へいけますか。（資料番号・タイトル・著者名・出版社名・出版年・金額等が検索可能ですか。）
- (29)特別貸出し利用者用に利用者データ・貸出し情報を管理するメニューを設定することができますか。
- (30)貸出し時のレシートの書式は、数パターンを自由に随時設定できますか。
- (31)1人の利用者が図書を5冊借りた場合の、貸出し画面におけるデータ読み込みの所要時間（タイム）をお知らせ下さい。
- (32)返却画面で図書が5冊読み込まれた場合の所要時間（タイム）をお知らせ下さい。
- (33)図書を5冊貸出しした時のレシートの出力時間をお知らせください。

2. 返却処理

- (1)返却処理時、バーコードを読みとった資料（返却済資料）のみ音で判別できますか。予約資料の判別は異なった音（または音声）で可能ですか。
- (2)返却処理中にすぐ貸出し画面へ移れますか。
- (3)返却画面上の予約情報は「本館予約・BM予約・ネット予約・相互予約」の別に表示することができますか。必要に応じて、簡単な操作で予約者名などの詳細を見ることができますか。
- (4)返却画面から最終貸出し者を検索できますか。または全く検索できない方法も選択できますか。
- (5)予約資料の返却時、館内資料・閉架資料の返却時等には静止画面と音（音声）で知らせることができますか。静止画面のリセット解除操作はワンタッチで可能ですか。
- (6)返却時に各種コメント（利用者コメント・資料コメント）

- ト)のチェックが可能ですか。
- (7)未返却資料でも貸出し処理をすると自動的に返却処理がされますか。
- (8)未登録資料が返却された場合、静止画面またはコメント等で表示ができますか。
- (9)返却画面で資料の今年度の回転数と回転数累計がどちらも表示されますか。
- (10)返却時に利用者コード(利用者名)を同時に表示することが可能ですか。その時に貸し出し点数と返却点数及び残り点数が表示されますか。また、この画面で返却証明レシートの出力が可能ですか。
- (11)返却画面でその資料の複本状況が表示されますか。
- (12)返却時に未返却資料「〇ヶ月以上未返却です」「期限切れ資料に予約がかかっています」等のメッセージの表示が可能ですか。
- (13)利用者の資料利用の履歴を全く持たず、返却後は職員もSEも全く調べられないようなシステムですか。
(資料名/資料コード)
- (14)予約資料の返却時に、予約者連絡票がレシートで自動的にプリントアウト可能ですか。

3. 資料検索

- (1)全集の中の作品名からも検索できますか。
(内容細目を入力してあるとして)
- (2)資料検索画面から貸出し・返却画面へ1操作で行くことができますか。
- (3)貸出し中の資料についてワンタッチで利用者情報を表示できますか。
- (4)請求記号・ISBN・MARC番号・NDC・資料番号による検索が可能ですか。
- (5)ISSNによる雑誌検索が可能ですか。
- (6)レーベル番号による検索が可能ですか。
- (7)検索結果から予約者情報の検索及び受け付けが可能ですか。(時間による優先順位指定)
- (8)検索した資料に予約をかける時、予約者名を照会できますか。(予約作業終了後即時に消えますか)
- (9)不明資料については曝書不明か強制不明のどちらかがわかる表示が可能ですか。
- (10)著者名・出版社・件名・(自館)NDC典拠等の参照が可能ですか。
- (11)廃棄・除籍してもデータは保存・検索可能ですか。
- (12)予約者の優先順位は受付日・時間で管理し、貸し出された時点で次の人の順位が自動的に繰り上がりますか。取り置き済みの画面表示も可能ですか。
- (13)複本は一冊に予約をかけると他の本にも自動的にかかりますか。
- (14)誰が何を予約したかということは、資料を提供後予約統計をとった後で即消えますか。
- (15)予約処理状況の出力が可能ですか。
(未処理状況/未提供資料リスト)
- (16)不明資料・破損資料・弁償待ち資料・紛失資料は予約から除外されますか。

- (17)シリーズものに予約をかける時、操作がワンタッチでできますか。
例)『〇〇全集』全12巻中1～5巻までを1操作で予約をかける。(各巻それぞれにかけるとでなく)
- (18)件名・キーワード以外に例えばテーマ別検索が可能ですか。
例)クリスマス/課題図書等
- (19)検索時該当件数を表示した後諸条件による絞り込みができますか。その後選択で一覧表の画面表示が可能ですか。その際の表示順または出力順は選択可能ですか。
- (20)破損資料・不明資料・弁償待ち資料・紛失資料は一時的に利用者端末の画面には表示しないようにすることが可能ですか。(但し職員用端末には常時表示する)
- (21)資料検索から利用者検索への移行がワンタッチで可能ですか。
- (22)例えば著者名検索で著作の五十音のいくつかを区切った絞り込み検索が可能ですか。
- (23)検索画面では自動的に高速中間一致が可能ですか。
- (24)図書・雑誌・AV・新聞記事等の同時検索(くじしし検索)が可能ですか。
- (25)資料検索画面から1操作で複本検索画面につながりますか。複本検索画面では資料の状態(貸出し中・予約棚・としまる・不明等)が一画面でわかりますか。
- (26)資料検索画面(第1画面)でも予約がかけられますか。その画面で予約をかけたら、予約処理後「予約〇〇番目です」というレシートが自動的に打ち上がるよう選択できますか。
- (27)予約待ち利用者一覧は1画面で何人見ることが出来ますか。
- (28)予約画面で貸出し利用者一覧を出すとき、返却予定日順で利用者名や貸出冊数、電話番号利用者番号をみることが出来ますか。
- (29)書名・著者名・出版社・件名の関連登録(検索)は可能ですか。
- (30)英語以外の言語使用が可能ですか。(検索)
- (31)オ・ヲ/エ・ヘ/ヴァ・バなどの関連登録(検索)は可能ですか。
- (32)関連登録しなくても件名・キーワードなどで同義語・類義語などの同時検索が可能ですか。(類推機能)
例) O-157<--->食中毒
- (33)同義語・類義語の追加・削除は任意に行えますか。
- (34)新刊情報(発注MARC等)、蔵書情報、CD-ROMの検索が混在及び単独でワンタッチでできますか。
(但し通常は所蔵資料検索とする)
- (35)資料検索画面で、発注中資料の検索及び予約入力が可能ですか。
- (36)保管場所毎の検索は可能ですか。
- (37)資料種別に新聞クリッピング等が入れられますか。
- (38)図書検索第1画面で画面上をクリックすれば一般・児童・郷土等に絞った検索が可能ですか。
- (39)検索結果の表示が幾通りか選択可能ですか。(例えば、

出版年順／書名の五十音順／請求記号順など)

(40)検索結果の表示を複数かけ合わせプリントアウトできますか。

例) 新田次郎の全著作×件名山岳または登山)

(41)返却期限切れの資料に予約がかかった場合、画面上で何らかの表示が可能ですか。

(42)予約画面から督促ハガキまたは職員用の督促用レシートが打ち出せますか。別途事務用帳票も出力可能ですか。

(43)新聞の記事検索(スキャナー等入力済みとして)が可能ですか。

(44)予約・リクエストカードの当館の書式のうち、下部にあたる貸出し中利用者情報が随時プリントアウトできますか。

(45)資料検索からデータ修正画面をワンタッチで開くことができますか。

(46)資料検索から資料修正を行うと終了後は最初の画面に戻らないようになっていますか。

(47)資料検索第1画面でAND, OR, NOT等の複合検索ができますか。

(48)資料検索第1画面で所蔵場所(ロケーション)がわかりますか。

(49)雑誌検索第1画面で雑誌の基書誌と当館における所蔵期間を見ることができますか。同じ画面で雑誌受入簿のように受入状況や貸出し状況を把握(色または文字で)できますか。

実際の発行日からの検索だけではなく、「〇年〇月号」「巻次」「通し番号」「ISSN」からも検索可能ですか。

(50)簡単な資料紹介が検索画面から見えますか。

(書誌登録画面で入力しておくとして)

(51)予約資料を家族のカードで貸出した時、本人の予約データを自動的に解除できますか。

(52)検索結果をプリントアウト(レシートでもよい)できますか。

(53)検索画面の画面コピーができますか。

(54)予約をかけた時点で予約月日・書名等、利用者用のレシートがプリントアウトできますか(選択可能かどうか)。

(55)予約資料が準備できた場合、検索画面から予約ハガキまたは事務用レシートがプリントアウトできますか。別途事務用帳票も出力可能ですか。

(56)検索の絞り込み条件の一つとして、頻度の高い資料を自動的に設定できますか。

例) バストリーダーや予約の多い資料など。

(57)資料検索は日本語・カナ・全角・半角・大文字・小文字の混在でもできますか。

(58)資料検索は、図書資料・雑誌資料・AV資料、ハンディキャップサービス資料・新聞資料等の全資料にまたがった横断検索をし、その結果を印刷できますか。

(59)TRCD-ROMの全データを図書館システムのサーバーにダウンロードし、TRCD検索ソフトを使用せずに複数クライアントから同一項目について同時に検索でき

ますか。その結果を印刷し、FDに記録できますか。

(TRCと別途契約してあるとして)

(60)『失楽園 上』の所蔵が5冊あるとして、「講談社」「シツラクエン」の二つの項目から複合検索をしたときの検索所要時間をお知らせ下さい。

(全所蔵25万冊として)

(61)著作毎の資料の回転数(利用頻度)の累計が可能ですか。(現年度分小計/累計) また、出力も可能ですか。

4. 利用者検索

(1)利用者単位に予約状況(予約棚保管等)の把握が第1画面でできますか。

(2)ひとつの画面で利用者番号、氏名(カナ、漢字)電話番号、生年月日、連絡先、貸出状況、督促状況、コメント(利用者、資料)、仮カードの発行回数等が表示できますか。

(3)利用者検索画面から1操作で利用者修正画面へ行くことができますか。

(4)利用者検索第1画面でフルの氏名、名のみ(カナ、漢字)、電話番号、利用者番号、住所、生年月日等のどの項目からでも、自由なかけ合わせで絞り込みができますか。

(5)カード忘れ等のために利用者名/電話番号、あるいは利用者名/生年月日のどちらかが高速検索になりますか。

(6)利用者検索画面でタマシロ/タマキ/タマグスク、アラカキ/アラガキ/シンガキのようによみが2つ以上ある時のための関連機能がありますか。

(7)利用者名の漢字検索の際、姓名の間があいていてもつまっているもどちらでも検索可能ですか。

(8)利用者に関するコメント類は全て第一画面に、常時表示されていますか。

(9)利用者検索から貸出し画面へ1操作でいけますか。貸出し状況の把握が可能ですか。

(10)本人から家族(姓、住所、電話番号の同一等)検索が可能ですか。

(11)諸業務から利用者検索への移行が1操作で可能ですか。

(12)利用者登録画面の利用者氏名覧は、日本語・カナ・全角・半角・大文字・小文字・ローマ字等の混在でも入力できますか。

(13)二重登録防止のためのチェック事項はどれですか。

例) 利用者名/電話番号/生年月日等

(14)利用者検索時にパスワード/ID番号設定が可能ですか。

(15)外国人利用者の検索方法(英米人以外も含む)をお知らせ下さい。

5. 利用者登録

(1)電話番号入力は市外局番/PHS/携帯電話/内線/呼び出しに対応可能ですか。また、複数の設定も可能ですか。

- (2)一つの画面で一利用者の全ての事項が登録できますか。(コメント含む)
- (3)生年月日は和暦・西暦どちらからでも入力可能ですか。(どちらか1つをいれたら自動的にもう片方にも入りますか。)
- (4)利用者登録申請者の名前を書き込める欄がありますか。(申請者の名前に関しては利用者検索対象外)
- (5)外国人利用者の原綴り(半角/全角)が入力できますか。
- (6)一般利用者の職場名に対応した電話帳(職場電話番号を入力したら自動的に職場名がでてくる、または逆)機能がありますか。
- (7)家族一括修正(住所・電話番号等)が可能ですか。
- (8)保護者の住所が登録者と同じ場合、自動的に保護者欄に読み込むことができますか。
- (9)学校のコード設定が可能ですか。小・中・高校生の学年の自動更新はされますか。
- (10)地区コードで浦添市以外の市町村の設定が可能ですか。
- (11)新郵便番号に対応可能ですか。新郵便番号と住所(コード)の連動はありますか。
- (12)家族登録の時、電話番号と利用者の姓の一致によるデータのコピーが可能ですか。コピーしたデータに上書きが可能ですか。その際、家族全員のデータ一覧の参照が可能ですか。その参照欄からのデータ修正も可能ですか。
- (13)カード忘れの回数がカウントできますか。仮カードを発行した日付の入力が可能ですか。
- (14)〇年以上使用していないカードの件数等の把握が可能ですか。詳細を確認の上、一括削除が可能ですか。
- (15)利用者修正画面はパスワード/ID番号対応可能ですか。(修正履歴がとれますか)
- (16)利用者コメントのコード対応と自由書き込みの両方が可能ですか。
- (17)当館において利用頻度の高い地名、人名(団体名)は、簡便に変換できる方法がありますか。
- (18)一般・団体ともカード有効期限の設定は可能ですか。期限を超過した場合貸出し画面でメッセージが出ますか。
- (19)利用者登録のどの項目も、かな/ローマ字のどちらの入力も選択可能ですか。
- (20)同一画面で団体・特殊登録が可能ですか。
- (21)データ削除をおこなう場合確認メッセージが出てきますか。
- (22)利用者登録画面では、利用者の登録処理日、変更訂正日、利用者カードの発行履歴が自動記録されますか。また、処理担当者名の記入履歴はありますか。(担当者名は複数)
- (23)利用者名・住所の文字数上限をお知らせ下さい。
- (24)外国人利用者の登録方法(英米人以外も含む)をお知らせ下さい。
- (25)利用者仮登録に最低必要な項目は何ですか。

- (26)利用者カード再発行の機械上の手順についてお知らせ下さい。

6. 図書登録

- (1)資料受入日はMARC投入日(または登録日)が自動的に書き込まれますか。書き込まれたあとは、随時修正可能ですか。
- (2)内容細目ファイルの利用(受入)は可能ですか。
- (3)可変長MARCデータの取り込みは可能ですか。(固定長との混在は?)
- (4)自館入力分・パンチ入力分・他社MARC分(例えばNPL)へのTRC MARCの一括上書きは可能ですか。
- (5)図書へのコメントが複数かけられますか。コメントをかけた図書は、バーコード読み込み時にチェック機能がありますか。
- (6)ファイルにない文字(外字)が自由に作れますか。
- (7)保管場所変更時、画面上に貸出し回数が出ますか。(現年度/累計)
- (8)典拠併合が済み、0件となった著者名・出版社・件名は典拠画面から消去できますか。
- (9)カナ、ローマ字入力がスムーズに行え、かつ切り替えが容易にできますか。
- (10)入力後分かち書きを自動的に行うことができますか。
- (11)著者名・出版者・件名などの典拠管理はどのようになっていますか。不要な項目は、随時削除可能ですか。
- (12)ロケーション(棚番)は2つ入力可能ですか。
- (13)図書に関する簡単な内容・資料紹介が入力できるスペースがありますか。
- (14)図書登録時に背表紙と表表紙及び目次等の画像処理登録が可能ですか。その画像は資料検索画面や利用者端末からも見ることができますか。
- (15)キーボード入力せずにスキャナーや音声処理で図書データ入力ができますか。
- (16)図書に印字されたISBNをスキャンすることで、どの端末でもデータのダウンロードができますか。
- (17)インターネットによる図書データの取り込みは可能ですか。
- (18)第1画面・第2画面で書誌データ、ローカルデータ(所蔵事項・内容細目・内容注記・件名等)を見ることができますか。その画面でデータの入力や修正・削除が可能ですか。
- (19)登録・修正画面でNDC・BSH及び自館の分類表・件名典拠等を見ることができますか。諸典拠からの複写は可能ですか。
- (20)日本語入力辞書ファイルは使用できますか。単語登録・新語作成を簡略化してありますか。
- (21)すでに登録されているデータを簡易に利用して登録業務に利用できますか。(MARC番号・ISBN・書名検索でのデータコピー・複本処理等)
- (22)表記文字一括カナ変換ができますか。(自動カナふり機能)
- (23)類義語辞書作成、削除機能がありますか。

- (24)図書登録画面でバーコードをなぞった同一本は、一度で複本登録可能ですか。
- (25)CD-ROMからのダウンロードが図書館システムの画面上でできますか。
- (26)TRC発注MARCを登録データとして使用できますか。
- (27)例えば企画書架など、期限を設定したロケーション活用が可能ですか。(期限が過ぎたら元ロケーションに自動的に戻る)
- (28)データ入力文字数の上限をおしらせください。(書名・著者名・出版者・内容細目・件名等)

7. AV資料登録

- (1)AV資料の出入力事項はおおむね図書に準じていますか。
- (2)各種MARCの取り込みが可能ですか。
- (3)自館入力分・パンチ入力分へのMARCの一括上書きは可能ですか。
- (4)アーティスト名・グループ名等の相関登録は可能ですか。また何件まで登録可能ですか。相関登録をしたものはそのどちらからも検索可能ですか。
- (5)人名・発売者・件名等典拠一覧を利用した登録が可能ですか。
- (6)利用対象区分の入力が可能ですか。(子供向け等)
- (7)英文タイトル・曲名に自動カナ振り機能がありますか。
- (8)1曲に対し1つの画面でカナ読み、カナ漢字表記・英文原綴り、英文表記を見ることが可能ですか。
- (9)曲目毎に時間数の入力が可能ですか。
- (10)スキャナー等で曲目などの細目読み込みが可能ですか。
- (11)曲目毎に簡単なコメント(ライブ録音・全〇〇曲所収等)を書き込むことができますか。
- (12)データ入力文字数の上限をお知らせください。(タイトル・人名・発売者・曲目・件名等)

8. 雑誌登録

- (1)雑誌の出入力事項はおおむね図書に準じていますか。
- (2)入力した特集記事名が登録画面で一括表示されますか。
- (3)誤った登録をしたとき、容易にデータ修正ができますか。
- (4)所蔵雑誌タイトル一覧(五十音順)と所蔵号数等の目録表示(帳票出力)が可能ですか。
- (5)目次スキャンによる自動入力が可能ですか。またそれで入力されたデータは検索可能ですか。
- (6)逐次刊行物の登録はできますか。
- (7)雑誌・逐次受入簿画面がありますか。雑誌登録と同時に受入簿画面に登録したデータが自動的に書き込みされ、1つの画面で受入状況を把握することができますか。
- (8)雑誌登録画面で雑誌基タイトルを、どのような方法で呼び出しますか。
- (9)登録画面で発行年月日/巻次/通しナンバー等のどちら

も入力できますか。各雑誌毎に発行年月日/巻次/通しナンバーのどちらでも一覧表記することができますか。

- (10)データ入力文字数の上限をおしらせください。(雑誌名・人名・出版者・内容細目・件名等)

9. 借受予定入力

- (1)借受予定入力画面で「借受予定取り消し/削除」が可能ですか。
- (2)借受予定入力画面でMARCデータの取り込みが可能ですか。
- (3)借受予定入力で取り込んだ書誌データは資料検索画面での検索が可能ですか。

10. 借受処理

- (1)借受予定入力で取り込んだデータの借受処理画面への自動移行が可能ですか。またMARCデータの借受処理画面での取り込みが可能ですか。
- (2)〇〇図書館からの借用実績や明細の統計出力やリスト打ち上げが可能ですか。(現在貸出し中の点数等と年度内の借用タイトル等を必要に応じて選択)
- (3)相互貸借によって資料を他の公共図書館や他機関から借りた場合に、FDで提供された書誌データ(マーク)を図書館システムの相互貸借エリアにダウンロードし、またリスト印刷ができますか。
- (4)より最新かつ合理的な借受処理(相互貸借)への提案がありますか。

11. 借受資料返却

現在ある機能は全て残したいが可能ですか。

12. 移動図書館業務

- (1)巡回後のエラーリスト/コメントリストの出力が可能ですか。
(時間帯別、ステーション別、コメントのコード化)
- (2)ノート型パソコンでの対応が可能ですか。
(本館同様の機能搭載)
- (3)ノート型パソコンにスキャナーが接続され、貸出し・返却を読みとると画面に書名・資料番号貸出期限が表示されますか。
- (4)スキャナーの読みとり速度は本館と同程度ですか。
- (5)レシート出力は本館と同程度ですか。
- (6)資料検索結果のプリントアウト機能がありますか。
- (7)貸出し・返却時の音量調節が可能ですか。
- (8)携帯電話・PHS等でのリアルタイム処理(データ受信/発信)が可能ですか。
- (9)BM利用端末の提供が可能ですか。
- (10)戸外使用のための特別な工夫がありますか。(ごみ、ほこり、日光対策、バッテリー、画面の見やすさ等)
- (11)巡回前後の機械上の処理とその所要時間と過程をお知らせ下さい。
- (12)ステーション登録はどのようになっていますか。ス

テーションのコード化は可能ですか。

- (13)途中、補充なしで3時間程度のノートパソコン使用が可能ですか。

13. 随時業務

現在ある機能は全て残したいが可能ですか。

14. 日次・月次業務

- (1)コピー枚数と催し物は毎日のカウントを自由に入力可能ですか。月毎／年毎の累計が可能ですか。
- (2)過去の日報・月報どちらも必要に応じて出力可能ですか。
- (3)「レファレンス処理記録画面」で処理した件数が処理と同時に日報に加算され、日次統計入力で更に入力する必要がないシステムですか。
- (4)リクエスト件数も「借受予定入力」または「発注処理」のメニュー利用と連動して日次統計処理に反映されますか。
- (5)翌朝の日次／月次処理が可能ですか。(開館していても処理可能か)
- (6)日次／月次更新処理は必要ですか。(開館していても処理可能か)
- (7)日次／月次統計の全項目にプレビュー機能がありますか。
- (8)日次統計入力画面の修正の際チェック(メッセージ)機能がありますか。
- (9)開館時にリアルタイムで統計情報を画面表示できますか。随時出力も可能ですか。
- (10)打ち出し時に項目毎に範囲指定ができますか。
- (11)打ち出し館、打ち出し順を指定できますか。
- (12)日次／月次統計の項目を全てお知らせ下さい。その項目は選択可能ですか。一括処理の選択も可能ですか。(また必要な項目のグラフ加工等が可能ですか)

15. 年次業務

- (1)必要な統計資料の項目追加・削除について柔軟な対応が可能ですか。
- (2)帳票のプレビュー機能がありますか。
- (3)年次統計の総括画面がありますか。現時点での累計等を見る場合、総括画面から必要な項目のみを選択できますか。
- (4)開館中の年報出力・年次更新が可能ですか。
- (5)年次処理の項目を全てお知らせ下さい。その項目の出力選択は可能ですか。
各項目のかけ合わせ検索・出力は可能ですか。
- (6)過年度のデータ保存の方法をお知らせ下さい。

16. 資料管理

- (1)複本登録の際どちらのデータを親にするか選択できますか。
- (2)貸出し中の資料も含め、一括ロケーション変更が可能ですか。

- (3)ロケーション表示枠を2つもつことは可能ですか。

(元ロケーション、現ロケーション等)

- (4)バーコードを通さずにロケーション変更が可能ですか。
- (5)除籍後の資料は画面に表示しないことが可能ですか。または、画面表示される場合はロケーションを空欄にできますか。
- (6)除籍資料リストの打ち上げは項目の選択が可能ですか。(種別、期間等)
- (7)除籍予定入力後、随時にリストを打ち上げることができますか。
- (8)何らかの指定による資料の一括除籍は可能ですか。(種別、出版年、ロケーション等)
- (9)一冊しかない資料は除籍の際、チェック機能が働きますか。
- (10)ロケーション変更はどのような手順で行われますか。

17. 発注管理

- (1)資料の発注時点でTRC MARC利用が可能ですか。
例えばTRCDを発注画面で使用した場合、納品・検収後MARCの登録への切り替えが簡易な形で可能ですか。
納品されなかった場合削除も可能ですか。
(データは残さない)
- (2)発注日付毎に発注先の発注一覧を随時みるができますか。(出力も)
- (3)種別毎の「納品日付順の業者別伝票一覧(金額・冊数／累計)」の管理が可能ですか。
- (4)資料種別毎の予算管理について具体的にお知らせ下さい。

18. 利用者管理

- (1)督促ハガキは随時何度でも打ち出し可能ですか(期間設定／予約あり／督促回数など)。
- (2)長期未返却(仮に3年以上)資料を持った利用者に自動的に「長期未返却です」などというコメントがかかりますか。このコメントによるリスト打ち上げも可能ですか。
- (3)弁償手続き中の利用者のリストアップは可能ですか。(弁償後はデータ削除)
- (4)弁償届けを出した日付を利用者のコメントに書き込むことができますか。また、貸出し画面で表示はできますか。
- (5)督促ハガキの新郵便番号対応は可能ですか。
- (6)BMのみの督促ハガキ打ち出しも可能ですか。
- (7)督促ハガキの資料番号の欄で「予約あり」(返却期限を過ぎた予約ありの資料)のコメント表示が自動的に可能ですか。
- (8)予約あり督促一覧表の打ち上げリストが利用者名の順で随時出力可能ですか。連絡済み状況を任意で書き込める欄がコメント欄以外にありますか。
例) ○月○日本人に連絡・・・など。
- (9)貸出しの際、督促対象者が貸出しを受ける時はメッセ

ージが画面に表示され、ワンタッチキー操作で本人の督促資料（図書・AV雑誌）一覧が表示されますか。

(10)督促日と督促回数が記録されますか。

（ただし、返却されたら消去されること）

(11)督促状の打ち出しは家族単位でも可能ですか。

(12)督促未返却者一覧表を作成することは可能ですか。

（月日指定）

(13)多督促者一覧表を作成することは可能ですか。

（月日指定／督促回数指定）

(14)督促対象図書一覧表（図書一覧表と同一帳票形態）を作成することは可能ですか。（月日指定）

(15)督促返却率を表すグラフ機能を持たせることは可能ですか。（但しグラフ等の形態が容易に変更可能なこと）

(16)予約資料返却期限切れ一覧表を作成することは可能ですか。期間は任意に指定でき、資料コード、資料名、利用者名、電話番号、住所などを表示することができますか。（予約中の資料で貸出し期限がきた資料）また、予約の資料で一週間以上延滞した資料については打ち出すことができますか。

(17)督促一覧表は同一電話番号及び同一住所で並べるとは可能ですか。

(18)「弁償届け」の機械上の手続きについて具体的にお知らせ下さい。

19. 蔵書点検

(1)ノート型パソコン・POTによる蔵書点検のとき、より高速で安定したシステムの提供が可能ですか。

(2)蔵書点検後点検もれ一覧を種別やロケーション別、予約資料別にリストアップ可能ですか。

(3)バーコードをなぞる以外で20数万点を合理的に蔵書点検する方法がありますか。具体的にご提案をお願いします。

20. 目録台帳業務

(1)日付毎の（新着）資料リストが随時出力可能ですか。

(2)資料別に各種目録を打ち出すことは可能ですか。

（図書、AV資料、雑誌等）

(3)目録は請求記号、書名、著者名、出版者、価格、複本、資料コード、ISBN、サイズ、ページ数、本館、BM別複本冊数等の表示が可能ですか。

(4)目録の抽出条件はどのような条件でも可能ですか。

例）請求記号の掛け合わせ、版年の掛け合わせ、テーマ等。

(5)目録はどのようなサイズ（B4、A4、B5等）にも出力可能ですか。

(6)AV資料の各目録及び、検索を形態区分別（テープ、ビデオ、CD、カセット等）に打ち出しが可能ですか。

(7)目録のCD-ROM化は可能ですか。

(8)リスト出力の際、ページ指定が可能ですか。

(9)予約資料を取り置きした場合の連絡表は、1日毎に印刷できますか。

(10)目録台帳業務について具体的にご提案下さい。（どの

ような項目が帳票出力可能ですか。また各項目どのように絞り込みが可能ですか。）

(11)統計／帳票の出力例見本を全種類提出して下さい。

(12)目録表示で出版者毎のリスト作成が可能ですか。出版年を区切ることもできますか。また出版者の関連機能がありますか。

21. MARC管理業務

(1)フロッピーによるMARCとりこみ以外にCD-ROM、インターネットなどによるデータ取り込みが可能ですか。

(2)既に入っている自館データにMARCでの一括上書きが可能ですか。

22. システム管理業務

システム管理に関しては担当数名に絞ったパスワード対応が可能ですか。

23. 利用者端末

(1)次の操作を知らせるガイドメッセージが常時表示されますか。

(2)ガイドメッセージ等は日本語以外に英語等での表示が可能ですか。また随時切り替えが可能ですか。

(3)検索はカナ、漢字、ローマ字、アルファベットのいずれでも可能ですか。

(4)当館の行事案内／お知らせ（県内図書館情報含む）／利用案内／館内レイアウト表示が可能ですか。

(5)故障しにくい工夫がなされていますか。

(6)資料検索では、書名・著者名・出版社・NDC・請求記号・件名・ISBN・レーベル番号・ISSN・キーワード等による検索が可能ですか。（自動中間一致）

(7)資料検索後利用者端末でプリントアウト（レシート可）が可能ですか。レシートは最大何点まで印字可能ですか。

(8)資料検索後館内書架配置図での表示が可能ですか。

(9)大人用／子供用の画面切り替えが可能ですか。

(10)資料検索画面は必要に応じ、資料の表紙や背表紙が表示可能ですか。

(11)検索後利用者自身で仮予約が入れられますか。仮予約受付のレシート出力が可能ですか。

(12)表記については職員用端末と同等の機能がありますか。（関連機能／同義語・類義語検索機能／お・を、え・へ／外国人著者の姓・名双方からの検索機能等）

(13)図書、雑誌、AV、新聞の串刺し検索は可能ですか（職員用と同様）。

(14)所蔵情報の検索の他、発注MARCやTRCDを用いた新刊情報検索が可能ですか。

(15)必要に応じて複数種類の複合検索が可能ですか。

(16)タッチパネル式の利用者端末以外にシンプルな検索専用（レファレンス用）の設置が可能ですか。（他の機能は一切排除し、検索とCD-ROM読み込みだけを可能とする。キーボード＋マウス対応）

(17)利用者端末からTRCD(J-BISC)の検索が可能ですか。

- (18)県内図書館の総合目録検索が可能ですか。(将来)
- (19)利用者からの「みんなのこえ」の書き込みが可能ですか。また返答も公開できますか。
- (20)図書館発行のたより／パンフレット等の紙面掲示(全ページ)が可能ですか。
- (21)例えば新着資料の表紙(背表紙コピー等)を随時表示可能ですか。(種別毎)
- (22)画面コピーが可能ですか。
- (23)使用しないときはデモンストレーション画面(当館仕様)が常時表示されますか。
- (24)利用者が誤って電源を落とした場合にも即画面復興が可能ですか。
- (25)利用者が途中で検索中止をした場合でも一定時間を経過すると自動的にデモ画面に戻ることができますか。
- (26)検索は対話方式ですか。
- (27)利用者端末の作成・変更はSEを介さずに容易に行えますか。
- (28)利用者端末でのヒット件数が多い場合の中断と絞り込みはどのように行われますか。

24. PC-ネット図くん業務

現在当館が使用している機種との接続・活用方法について具体的にご提案下さい。

25. その他

<画面レイアウト>

- (1)液晶画面対応が可能ですか。
- (2)目が疲れなない、または画面上で使いやすい工夫がございましたらご提案下さい。

<文字>

- (1)標準文字の大きさをお知らせ下さい。
- (2)強調文字、細文字、明朝、ゴシックなどの対応が可能ですか。

<色>

- (1)目にやさしい色の工夫がされていますか。
- (2)画面下地の色、文字の色をお知らせ下さい。

<キーボード操作>

- (1)カナ、ローマ字入力の切り替えが容易に行えますか。
- (2)かな／カナ／英小／英大／半角の切り替えが容易に行えますか。
- (3)画面操作はマウス、キーボードどちらでも対応可能ですか。
- (4)キーボードからの発生音をやわらげる工夫がされていますか。

<画面サイズ>

画面サイズをお知らせ下さい。

<スキャナー>

- (1)より高度なバーコード読みとり機があればご提案下さい。(スキャナー以外でも)
- (2)スキャナーからの発生音をやわらげる工夫がされていますか。

<レシート>

- (1)レシート用紙の種類をお知らせ下さい。
- (2)レシートへ自由書き込みができますか。(イメージキャラクター、お知らせ等)

<プリンター>

安価で高速で静音であるプリンターのご提案をお願いします。

<新規業務>

- (1)指定の端末からのインターネット接続が可能ですか。
- (2)インターネット上に当館目録情報を載せることが可能ですか。
- (3)インターネット上の目録情報中の資料に予約をかけることができますか。
- (4)インターネットに書誌情報を載せたとき、資料更新が自動的にできますか。
- (5)レファレンス処理記録画面でレファレンスの管理が可能ですか。
- (6)図書館事務用データベース(館報の内容、図書館案内)の入力・検索が可能ですか。
- (7)カウンター日誌書き込みと検索機能がありますか。
- (8)バーコードの印刷が可能ですか。(利用者用、資料用)
- (9)市内関係機関の資料検索の対応が可能ですか。
例) 教育研究所、国際センター、学校図書館から当館への資料検索、またその逆。
- (10)公文書管理(資料群としての登録・検索)が可能ですか。
- (11)マルチメディア資料の登録や検索はどのように行いますか。ご提案をお願いします。
例) 電子ブック、CD-ROM
- (12)沖縄学研究室で使用している機種との接続は可能ですか。

【サポート体制について】

- (1)SEの即時対応は可能ですか。(土・日または夜間、休日のトラブルやカスタマイズの即応等)
- (2)図書館システム取扱いマニュアルやトラブルシューティングは、内容変更があった場合には、すぐに差し替えできますか。
- (3)図書館システムのカスタマイズに伴うプログラムの変更及びバージョンアップ等については、リース期間中保守契約の一環として無償対応されますか。
- (4)図書館システムリース物品に蓄積された図書館データは、リース契約期間終了に伴って無償で返還・納品されますか。
- (5)図書館システムリース期間中における貴社SEのサポート体制は、どのようになっていますか。サポート人数等詳細にご説明下さい。
- (6)当館とのシステムに関する話し合い、または相談事項に関しては議事の多少に関わらず、議事録または経過・結果処理票を提出できますか。

〔資料Ⅱ〕 機器台数新旧対照表及び台数増加他による改善点一覧

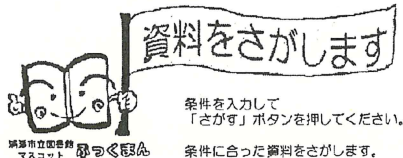
機器等名称	旧	新	増 設 メ リ ッ ト 等
コンピュータ端末 (内デスクトップ) (内ノート型)	8 (8) (0)	15 (11) (4)	*新規台数15台は、職員30名に対し2人に1台で割り出した。 (本庁：当時は2人に1台目安) ○ノート型パソコンにより本館では窓口繁忙時など、臨機応変な業務への対応が可能、BMでは検索等本館に準じたサービス展開が可能となった。 【窓口・奉仕系】 5→9台 ○資料貸出し・返却・利用者検索・利用者登録等各業務への迅速対応が可能となった。 ○資料検索業務への迅速・確実な対応が可能となった。 ○予約・リクエスト業務への迅速対応が可能となった。 ○読書案内・レファレンス業務のグレードアップ。 【事務系】 3→6台 ○図書・雑誌・AVの即時登録・データ修正・除籍が可能となった。 ○新規対応予定の事務系・レファレンス・浦添関係新聞記事等データベース構築等多様化・多角化する資料群の登録・修正業務が随時可能となった。 ○督促業務・利用者修正業務の迅速対応が可能となった。 ○一人1日当たりのパソコン使用時間が増え、資料登録系超過勤務時間が減少した。
ページプリンター	3	7	【窓口・奉仕系】 0→4台 ○検索後資料一覧の職員による手書き対応の簡略化がはかられた。 ○窓口での検索結果を出力したい場合、職員が1階窓口から2階事務所へリストを取りに上がっていたが、これを軽減できた。 ○利用者の望む様々な観点からの資料検索・レファレンス結果のリスト出力・画面コピー提供が可能である。 【事務系】 3→3台 ○各端末で各種帳票・統計が随時出力できる。 ○必要に応じ督促はがき・予約連絡はがき等の出力が可能。
レシートプリンター	3	6	【窓口・奉仕系】 3→6台 ○貸出し・返却その他の業務時に必要なレシートが瞬時にプリントアウトできるようになった。レシートが多機能になった。(予約関連等)
ハンディターミナル	4	1	*BMの通常業務はノート型パソコンで行うので減1台。但し、年1度閉館して行う蔵書点検時にハンディターミナルを利用する場合とBM繁忙時のために3台確保できた。 【窓口・奉仕系】 4→3台
CD-ROMチェンジャー	0	2	【窓口・奉仕系】 【事務系】 0→1台 ○MARCデータ搭載のCD-ROMが常時参照可能になり、書誌データの取り込みが各端末で可能となった。 ○各端末から常時参照可能なことで、カウンターにおける資料検索ツールとして活用できるようになった。 ○特にレファレンスツールに顕著なCD-ROM版辞書・事典類のレファレンス室内での資料(データ)参照が可能。
利用者端末	1	4	【窓口・奉仕系】 1→4台 ○タッチパネル式を1台から3台に増やすことで、コンピュータ検索に不慣れな利用者への資料検索の機会拡充が可能。うち1台は児童室専用として設置することで、児童も一般利用者も双方にきがねなく資料検索ができる。 ○レファレンス室においてキーボード/マウス対応の資料検索をすることで、コンピュータ操作に比較的慣れた利用者が利用者自身で検索を深め、調査・研究に活かす機会が増える。

〔資料Ⅲ〕

浦添市立図書館 蔵書検索サービス

※このページはIE4.0以上、表示文字のサイズ中、SVG4サイズの画面で最適に見えるようレイアウトされています。

浦添市立図書館 蔵書検索サービス



条件を入力して
「さがす」ボタンを押してください。
条件に合った資料をさがします。

さがす対象はどれですか？ ☐ 全部 ☐ 図書 ☐ 雑誌 ☐ AV
何件表示しますか？ ☐ 25 ☐ 50 ☐ 100

※漢字、ひらがな、カタカナ、英数字で入力してください。
※ISBNはハイフン(ー)が必要です。
一致のしかた

項目	検索語
前方	書名/タイトル
かつ	前方
かつ	前方
かつ	書名/タイトル

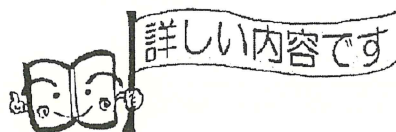
！資料情報は2週間に1度更新しています。！

あなたは062920人目のお客様です。

検索を終了する

<http://www.library.ne.jp/urasoe.okinawa/>

浦添市立図書館 蔵書検索サービス/詳細



検索へ戻る 一覧画面に戻る 検索を終了する
2件
全3件中

項目名	データ
ISBN	4-06-209154-2
書名	五体不満足
著者ヨミ	ゴタイ フマンゾク
著者名	乙武 洋匡 著
著者ヨミ	オトタケ ヒロタダ
本体価格	¥1600
出版者	講談社
出版年	1998.10
大きさ	20cm
ページ数	270p
個人件名	乙武 洋匡
一般件名	乙武 洋匡
一般件名	障害者
抄録	「障害は不便です。だけど、不幸ではありません」感動は求めません。参考にしてほしいのです」両手両足がなくなつて、今日も電動車椅子で走り続ける著者の、「生きる力」とは。

※所蔵状況を表示しています。

浦図＝本館 BM＝としよまる

No	資料番号	所蔵館名	所蔵記号	請求記号	場所区分	貸出区分
1	1600067647	浦図	Y	914. 6/オ	Y-A	貸出可能
2	1600068536	浦図	Y	914. 6/オ	Y-A	貸出可能
3	1600068546	浦図	Y	914. 6/オ	としよまる	貸出可能
4	1600068553	浦図	Y	914. 6/オ	Y-A	貸出可能
5	1600069775	浦図	Y	914. 6/オ	としよまる	貸出可能
6	1600070328	浦図	Y	914. 6/オ	Y-A	貸出可能
7	1600070344	浦図	Y	914. 6/オ	Y-A	貸出可能
8	1600070336	浦図	Y	914. 6/オ	Y-A	貸出可能
9	1600070724	浦図	Y	914. 6/オ	としよまる	貸出可能
10	1600070716	浦図	Y	914. 6/オ	Y-A	貸出可能
11	1600070680	浦図	Y	914. 6/オ	Y-A	貸出可能
12	1600070682	浦図	Y	914. 6/オ	Y-A	貸出可能

2件
全3件中
※貸出中のため、利用できない場合があります。

検索へ戻る 一覧画面に戻る 検索を終了する

浦添市内の学校図書館及び公共図書館からの予約を受付します。
※現在、一般利用者からの予約は受付ておりません。

※浦添市内の学校図書館からの予約受付はこれからです

E-mail: gnetlib@city.urasoe.okinawa.jp

※公共図書館(相互貸借協力館)からの予約受付はこれからです

E-mail: sgolib@city.urasoe.okinawa.jp

http://www.library.ne.jp/urasoe.okinawa/script.../detail?result_set=3267&result_no=

浦添市立図書館 蔵書検索サービス/一覧



検索へ戻る 検索を終了する
1～3件
全3件中

※書名をクリックすると詳しい内容が見られます。

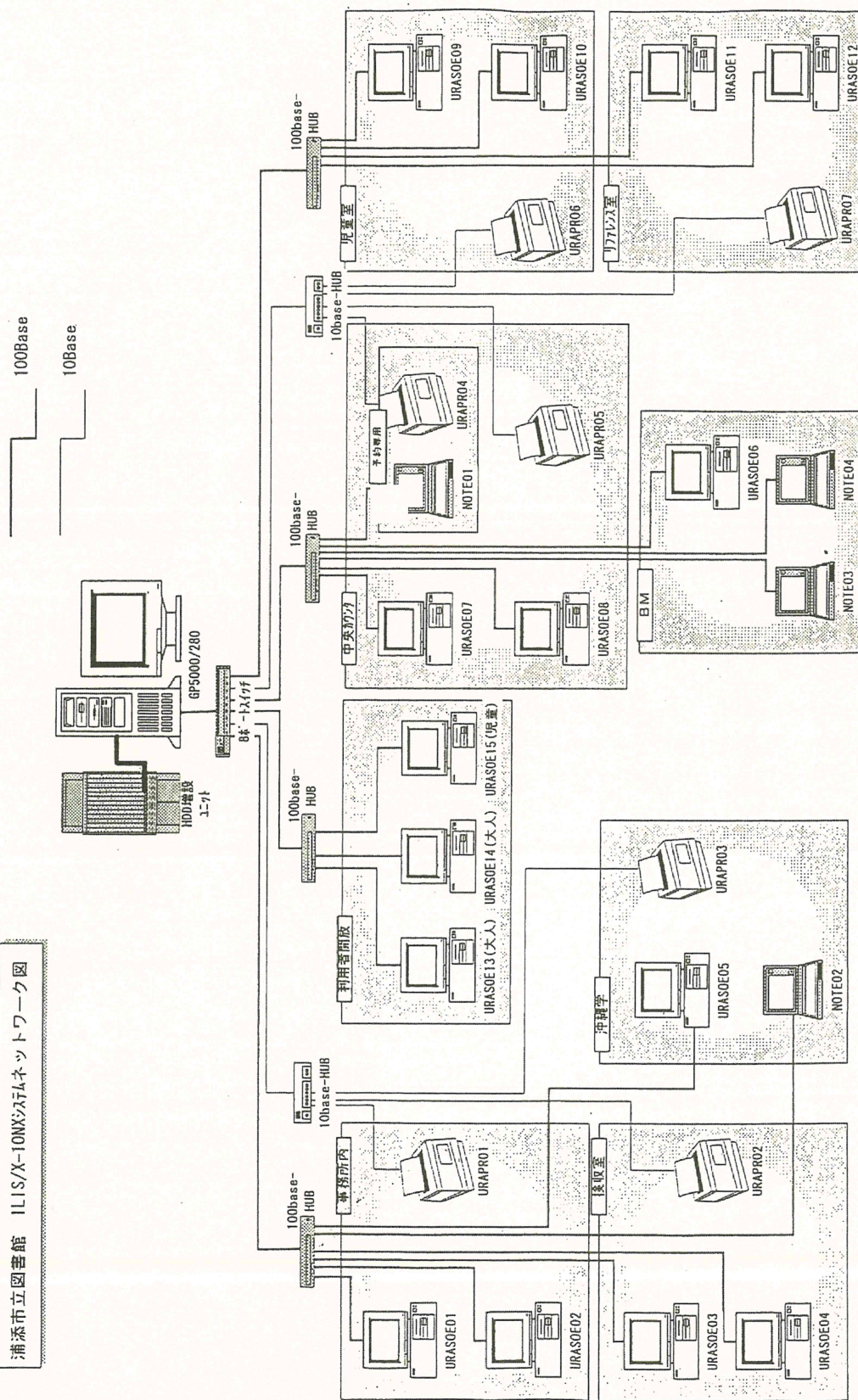
種類	書名	巻次	著者名	出版社
1 図書	笑え！五体不満足		ホーキング 青山 著	フーコー
2 図書	五体不満足		乙武 洋匡 著	講談社
3 AV	五体不満足 CD BOOK(シニ ディーズ)		乙武 洋匡 著	講談社

1～3件
全3件中

検索へ戻る 検索を終了する

<http://www.library.ne.jp/urasoe.okinawa/scripts/urasoebooks.dll/titles>

浦添市立図書館 ILIS/X-10NXシステムネットワーク図



もっと本と親しむために

石川 あきの

はじめに

図書館には様々な奉仕活動があり、年間行事の企画・運営もその中のひとつに含まれています。今回は平成12年度の浦添市立図書館の行事について報告します。

当館の年間行事は大きく4種類に分けられます。

1. 毎月固定した曜日、時間に行うもの（おはなし会）
2. 夏休みのみ特別に行うもの（夏休み企画）
3. 読書月間
4. 時期を定めず行うもの（講演会、人形劇等）

いずれも奉仕係を主として、企画から運営までを行い、行事に関連する資料を揃える（購入、登録、装備）必要がある場合は資料係と連携します。

それでは1～4に沿って今年度の行事の報告をしていきます。（各行事の日程、参加人数等は最後に添付します。）

1. おはなし会

おはなし会は2タイプあります。

① おはなしのへや

おはなしの木の会所属の語り手の方を二人お招きして絵本の読み聞かせ、語り聞かせ、指遊び等を行います。

② 空とぶじゅうたんおはなし会

児童サービス担当を中心に当館職員によるおはなし会のことで、絵本、紙芝居の読み聞かせと、導入としておりがみや工作等を行っています。

今年度の両おはなし会を通して私が強く感

じたことは、例年に比べ常連の参加者が増えたことです。これまでは図書館に本を借りに来たら、たまたまおはなし会をやっているのに参加してみたという利用者がほとんどでしたが、今年度はおはなし会に参加することを目的に図書館へ足を運んでくださる利用者が多くなりました。それは、おはなし会を楽しみにしてくれている子どもたち、読み聞かせを大切と思ってくださる保護者が増えつつあることを現しています。しかし、私たち図書館員はこのことをうれしく思うだけではなく、同時に子どもたちによい本を伝えていく役目を担っていることを認識し、よい本を選ぶための不断の努力を忘れてはいけないことを改めて強く感じました。

2. 夏休み企画

夏休み中の児童向け行事のことです。夏休み企画は、宿題としての自由研究のために参加するという傾向があります。しかし、図書館の「資料の提供」⁽¹⁾という機能を含めて考えると、特に夏休み企画は自由研究そのものではなく、図書館資料の活用を促進するためのものといえます。これはどの行事にもいえることですが、行事を通し図書館と利用者を結びつけ、また図書館資料と利用者を結びつけることを前提に各行事を企画・運営していくことは、その結果、参加者の今後の図書館利用につながることになると思います。このような図書館利用の促進を念頭に、平成12年度は5つの行事を行いました。

報告の前に定員のある行事（後記、(1)～(3)）に関して、申込み方法を紹介します。申

込みは昨年までは先着順（電話可）というかたちを取っていましたが、広報等の不公平が生じたため、今回からは抽選にしました。ある一定の申込み期間に希望者全員の申込みを受け、定員を越えた行事は、後日児童室にて抽選をし、当選者を図書館に張り出し、発表するというかたちです。申込者には抽選をするための整理番号を渡しておかなければならないので電話受付ではなく、直接カウンターに来てからの受付となりましたが、公平さを保つためには今後もこの方法をとることになるでしょう。また、定員のある行事の参加に関しては一人、一行事に限りしました。

(1) 一日図書館員

文字通り、図書館の仕事を一日体験します。参加した子どもたちは、8時30分からの朝のミーティングに始まり、返却本の排架、書架整理、カウンター業務、移動図書館業務、おはなし会を分刻みでこなしていきます。



一日図書館員

一日図書館員は、図書館ならではの企画のためとても人気があります。これまでは定員10名としていましたが、図書館業務の中心であるカウンター業務や移動図書館業務の際、コンピュータでの貸出・返却業務に携われる人数が限られてしまい、決められた時間内に経験できないことがあったため、今回は思いきって人数を6名に減らすことにしました。その結果、これまでと比べて参加者全員が充分に図書館業務の全体に携わることができた

と思います。しかし、一日図書館員は図書館でしかできない行事のうえ、希望者が多いので、次年度は回数を増やすことを検討したいと思っています。また、体験内容が奉仕係の仕事に偏っているので、内容の再調整も必要です。

(2) 手作り教室「^{たからべ}賤部をりがみ」

手作り教室は絵本、紙芝居、しゅくしいシーサーなど毎年内容を変えており、今回はおりがみ教室を行いました。「おりがみ」の本は、児童書の中でもとりわけ人気が高く、ほとんどが貸出し中で書架に残っていない状況です。「おりがみ」の本がよく借りられているなら、興味・関心の高い子が多いだろうということで企画しました。

講師の^{たからべみつおき}賤部光隆氏との打ち合わせで「おりがみ」には易しいものから、高度なものまであることを改めて知り、対象を小学校低学年と高学年に分けることにしました。低学年は親子参加で、作品は金魚、うさぎ、かえるの3点です。



手作り教室 賤部をりがみ

講師の説明を熱心に聞き、一緒に参加しているお母さんにも教えてもらい、和気藹々とした^{あいあい}雰囲気の中で1時間が過ぎました。続いて高学年、作品は当初の予定ではこちらも3点でしたが、時間の都合により1点は作成できず、カブトムシ、ウルトラマンの2点を作成しました。高学年はさすがにおりがみに関心のある子が集まっているだけあって、講師

の説明だけで、ほとんど作り上げていたように思えます。反省点としては折り図を配布せず、その時の説明だけで折ったことです。家に帰ってもう一度作りたかった時に折り図があれば何度でも折ることができたのではないかと思います。また、予定していた作品を設定した時間内に作ることができなかった点も次回は慎重に考えていきたいです。

(3) 自然観察教室「親子で学ぼう琉球列島の鳴く虫たち」



自然観察教室 親子で学ぼう琉球列島の鳴く虫たち

図書館にある資料に近づいて欲しいという思いから、初めての試みである自然観察教室を企画しました。当日は、『琉球列島の鳴く虫たち』②の著者の大城安弘氏を講師にお招きし、資料に沿って琉球列島に生息している鳴く虫の種類（たくさんの種類がいることに驚きました）やオスとメスの違いなどの講話に併せてスライド、カセットテープ、ビデオを使って虫の生態を勉強し、講師にお持ちいただいたコオロギを直接見る時間も設けました。コオロギを飼っている親子からの質問があるなど充実した時間でした。鳴く虫を題材とした本は当館にも何種類かありますが、実際に自分の目で虫を見て、耳でその声を聞く機会を設定することで、その虫や本により近づくことができたのではないかと思います。小学生には少し難しい部分もありましたが、会場の後方に当館所蔵の関連資料を展示した

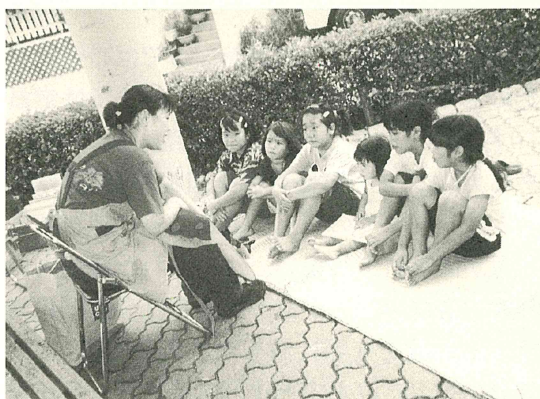
ところ、教室終了後にたくさんの貸出しがありました。

(4) こども映画会

夏休み中の毎週水曜日、午前11時と午後2時の1日2回、日本の昔話と世界の名作絵本を上映しました。当日は映画会の案内にあわせ、その日上映する映画と同じタイトルの本を展示しました。

(5) としょまるおはなし会

移動図書館の全28ステーションで、巡回時間内にエプロンシアターや絵本の読み聞かせをするおはなし会で、移動図書館職員を主に企画・運営しています。図書館から遠い地域の子どもたちは図書館（本館）でのおはなし会に参加することは困難です。そういう子どもたちにおはなし会を見てもらう絶好の場所が移動図書館のステーションなのです。おはなし会に参加することは、おはなしに興味を持つ機会となり、また図書館職員との距離も縮めることになります。その連なりが図書館利用（移動図書館利用）にまでつながっていくことを私たちは願っているのです。今回は2年目なので、前年度の反省点を考慮しながら行いましたが、広報不足など今後の検討事項はまだまだあるようです。しかし、この先長く続けていきたい行事のひとつであることは間違いありません。



としょまる おはなし会

3. 読書月間

読書の季節と言われる秋の1ヵ月間(10月中旬から11月中旬)を当館の読書月間と位置づけ、その年のテーマに沿った本の展示会を開催しています。今回は全国読書週間テーマ「はじまりは1冊の本だった。」を大きなテーマとして掲げ、サブタイトルに「～こんな生き方もある～」を当館のテーマにしました。当館のテーマを決めたきっかけは、近年『五体不満足』(乙武洋匡／著)⁽³⁾や『だから、あなたも生きぬいて』(大平光代／著)⁽⁴⁾などの著者の生き方をテーマとし、読むと元気になれるような本が多数出版されていることからです。そういった本は図書館でも予約・リクエストを含め、多く利用されています。それは様々な人の生き方を知ることによって、その人なりに心が楽になったり、やる気が起きたり、元気になったりという何かを感じる要素が強いからではないかと思います。そういう内容の展示をすることにより何かを感じ、何かのはじまりになる1冊と出会うきっかけになればという思いで今回のテーマは決まりました。決定後は、テーマに沿った本の選書、未所蔵本は資料係への購入依頼、広報、展示する本の一覧リスト作成などの準備を行いました。読書月間が始まると、足を止めて展示を見ている利用者の姿がみられました。展示期間中は多くの利用者に本を見てもらいたいため、展示本は貸出しをしていません。そのために利用者は予約を余儀なくされている状況にあります。今回はその件数も比較的多数ありました。利用者が読みたい時に貸出しできるように複本を揃える必要性も例年感じているのですが、資料費との兼ね合いもあり、今後の検討事項となっています。期間中は読書月間についてのアンケートも実施しましたので、その中から利用者の声を紹介します。「一つのテーマについてほりさげ展示された本は、とても心にしました。広く浅くよりは、テーマをしぼったことがよかったと

思います。」(20代、女性)、「～こんな生き方もある～次回は第二弾、三弾と続けてもいいのでは？著者や年配の方の自伝も…。私自身一人暮らしなので、吉沢久子さんの本など、心の参考になると感じた。非常にいいテーマだと思う。」(20代、女性)、本の展示方法については「もう少し広くスペースをとって、見やすく置いてあると良かった…。」(20代、女性)、「テーマはいいのですが、展示されている本の内容紹介(ストーリー)を加えた方がよかったです。」(30代、男性)。アンケートに寄せられたご意見・ご要望は他の行事も含めて、今後に活かしていきたいと思います。参考となる貴重なご意見をいただき感謝しています。

4. 講演会

平成12年は子ども読書年ということで各地でそれに関した催し物が開かれています。当館では講師に志茂田景樹氏をお招きし、「読み聞かせ&トーク」を行いました。直木賞作家として名を知られている志茂田景樹氏は近年、児童作家として絵本や童話を手掛けています。また、「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、隊長としてご自身の作品などを子どもたちに読み聞かせ、語り聞かせる活動を勢力的に行っています。0歳から母親に読み聞かせをしてもらった体験がいまの活動の原点になっているということで、読み聞かせによる親子のコミュニケーションの大切さを肌で感じている方です。

当日は全国的にとっても有名な方を一目見ようとたくさんの市民が集まりました。志茂田氏は講演の中で、「子供はみんな感受性の畑を持っていて、読み聞かせはその畑を耕すことになる。感受性を豊かにすることが最大の教育であり、そのためにも、0歳からの読み聞かせはとても大切なことである。21世紀は心おこしの時代であり、その大きな味方は、感受性を育てる読み聞かせだ。」とおっしゃ

っていました。また講演の最後には、著書『ひかりの二じゅうまる』(5)の語り聞きかせも行いました。講演を聞いた参加者も志茂田氏の読み聞かせへの情熱から、その大切さを感じ、より一層関心が深まったことと推察いたします。

今回は講演会の際に参加者の希望により、これまではなかった手話通訳を配置しました。事前に手話通訳の必要性に気付かず、社会福祉センターの担当の方のご配慮で手話奉仕員の方を手配していただきました。良い経験をしたと思い、次回に活かしていきたいと思っています。

さいごに

平成12年度の行事の報告をしてきましたが、現在行っている行事は図書館側が全てを決めている状況で、参加者集めに苦悩も絶えません。「図書館の催しは地域の要望に根ざし、その地域の文化・教育の発展を共に願っていくもの」(6)であるために、図書館が単独で企画・運営するのではなく、これからは地域や図書館利用者などから、行事に関する要望や声を聞く機会を設ける必要があると考えています。全ての要望に応えることは困難ですが、今、何が求められているのかを知る

ことはとても大切なことだと思います。また、地域の各種団体と連携をとって行くこともこれからの課題といえます。地域にどのような団体があって、どういった活動をしているのかを把握し、協力しあうことで両者の発展につながり、そしてより地域に密着した催しが実現できることを期待しています。

〔注〕

- (1)『市民の図書館 増補版』日本図書館協会 1970年 10頁。
- (2)『琉球列島の鳴く虫たち』大城安弘著 鳴き虫会 1986年
- (3)『五体不満足』乙武洋匡著 講談社 1998年
- (4)『だから、あなたも生きぬいて』大平光代著 講談社 2000年
- (5)『ひかりの二じゅうまる』志茂田景樹著 Kiba BOOK 1999年
- (6)『図書館の集会・文化活動』ちばおさむ〔ほか〕著 日本図書館協会 1993年 89頁。

〔参考文献〕

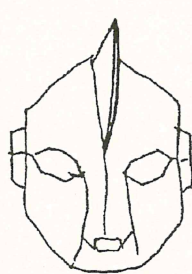
- ・『中小都市における公共図書館の運営』日本図書館協会 1963年



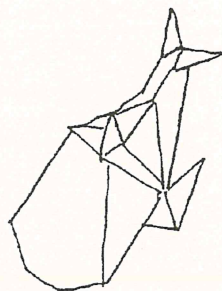
志茂田景樹 読み聞かせ&トーク

行 事 名	日 時 (平成12年)	対 象	講 師	人 数 (延べ)
おはなしのへや	毎月第2土曜日 14:00～	4歳以上	古謝恵 山本理恵子	子供 90名 大人 58名
空とぶじゅうたん おはなし会	毎月第3日曜日 14:00～	特になし	図書館職員	子供 109名 大人 41名
一日図書館員	8月18日(金) 8:30～16:30	小学3年～中学生 6名	図書館職員	子供 6名
手作り教室 「賤部をりがみ」	8月1日(火) 低学年 13:00～14:00 高学年 14:30～15:30	小学低学年 親子15組 小学高学年 15名	賤部光隆	低学年 親子 13組 高学年 子供 12名
自然観察教室 親子で学ぼう 琉球列島の鳴く虫たち	7月26日(水) 14:00～15:00	小学生 親子20組	大城安弘	親子 19組
子ども映画会	8月 毎週水曜日 11:00～11:30 14:00～15:00	幼児～小学生向け		子供 383名 大人 118名
としよまるおはなし会	8月8日(火) ～8月20日(日)	特になし	移動図書館職員	子供 167名
読書月間	10月18日(水) ～11月19日(日)	一般・YA		
講演会	11月11日(土) 17:00～18:30	市民 一般・児童	志茂田景樹	子供 20名 大人 243名

「賤部をりがみ」作品例



ウルトラマン



カブトムシ



ウサギ



かえる



金魚

芸能史研究からの評定所文書へのアプローチ

徳元 剛

はじめに

近世において宮廷芸能が国家運営と深く関わっていたことは周知のことである。冊封使一行が来琉すると、そのもてなしとして各宴で、いわゆる冠船芸能が催された。前もって臨時の踊奉行がわざわざ任命されることからして、宴の座興とはいえ、これは国家のプライドを賭けたものだったのである。江戸上りでも、そのメンバーには必ず、儀衛正を始めとする路次楽スタッフ、楽正を始めとする座楽スタッフが同行した。例えば路次楽については、「儀衛正日記」（天保3年）に見るように、江戸までの要所々々で、綿密な段取りのもとに執り行われていた。薩摩在番らを御茶屋御殿に招いての芸能もあった。

プライベートでの芸能の上演もあった。「伊江親方日々記」⁽¹⁾に数多く見るように、薩摩役人を招いて「去年当村文躍仕組候付、相雇羽をどり之組踊一つ仕させ、懸御目候事。／附、芸人数へは銭貳百貫文、頭兩人へたはく差遣候事」⁽²⁾「当蔵村此間仕組置候をどり狂言、人数召寄芸能させ懸御目、別て御慰に相成候事」⁽³⁾、「宜野湾王子様庭御見物」の時「名護里之子親雲上・宇祢筑登之相頼、うた三味せん琴ひき御座興に相成候事」⁽⁴⁾、「上原按司御家内人数并新里里主夫婦女子、疹御免り之為間切へ御越被成候付、御見送」として「五男前川里之子親雲上・護得久里之子・泊之有銘筑登之在合にて、うた三味線琴などいたさせ、慰に相成候事」⁽⁵⁾、大和旅の餞別として「二才共へ琴三味線ひかせ、座興いたし候事」⁽⁶⁾など、日常的に事あるごとに芸能が催されていた。そして金武良章『御冠船夜

話』に描写されているように、その余韻は明治以後も続いた。

宮廷芸能に対して村踊りがある。芸能の目的はもちろん違うが、厳密にはこの二つは相互に交流していて、単純に区別はできない。組踊を例にいうなら、宮廷芸能としての組踊が、村踊りの中の組踊として、現在まで伝わっている。資料的に確認できる最も古いものは、宜野座村字松田に伝わる1818年の「本部大主」台本である。その他久志、多良間など、いくつか近世末期の組踊台本がある。これらも近世における芸能のありかたを示す重要な資料である。

『琉球王国評定所文書』も注意深く見てみると、その中に意外にも芸能に関する記事を発見することができる。すでに池宮正治氏は京太郎について「評定所文書」を使用しているが⁽⁷⁾、芸能研究においてまだ十分に活用されているとはいえない。確かに膨大な史料群の中で、芸能に関する記事はほんのわずかである。しかも直接芸能に関わる記事ではなく、本題に多少関連する周辺事項として扱われているに過ぎない。しかしこういった断片的な情報も、近世の芸能を考える上で無視してはいけない。断片的な情報を収集し、つなぎ合わせて、これまで認識されてきた近世芸能史に、細かな肉付けをしていくことが大切である。

芸能者たち

玉城朝薫（向受祐、1684～1734）は、康熙58年（1719）冊封使来琉に備え、その前年に踊奉行に任命され、琉球の故事に取材して

「執心鐘入」「二童敵討」「銘苅子」「孝行の巻」「女物狂」の組踊五番を創作し、冊封使歓待に供したことで知られる。

「康熙五十七年戊戌閏八月二十六日、為冊封天使宴席助興事奉 旨為躍奉行、翌年己亥之夏 冊封天使賁臨仲秋宴照例作躍自重陽宴、後奉 命掇取本国往古之故事以備戲席、球国以故事作戲者從此始矣」(8)



〔琉球中山王使者絵図〕ハワイ大学宝玲文庫所蔵
『玉城朝薫生誕三百年記念事業報告集』所収

朝薫は現在、組踊の創始者、劇聖と称され、組踊は朝薫によって創られかつ完成したとまでいわれる。朝薫以後の組踊が仇討ちものと孝行ものに偏り、朝薫ほどに自由なテーマを設定し得なかったからである。

しかし、こういった見方に多少疑問がないわけではない。組踊は、舞台上で踊る立方だけではなく、地謡もまた重要である。「金武節」は道行の場面、「東江節」は生き別れの悲しい場面といったように、立方と地謡、演技と音楽の間に、一種の決まり事、対応関係がある。この場面にこの節は妥当かどうかで、その組踊の出来、不出来をいう人もいるくらいである。それに昔の人は「組踊聞きが行きゆん」、組踊を聞きに行くといっていたらしい。

組踊は見るものというより、どちらかという
と聞くものだったのである。

もしかしたら組踊は、テーマの斬新さとか、そういったもので観客の耳目を引きつける、そんな演劇ではなく、もっぱら舞台全体の調和、演技と音楽の一体を目指した総合芸術だったのかも知れない。それに組踊を始めとする宮廷芸能（ここでは冠船芸能）は、あくまでも冊封使一行を歓待するための座興だった。それとても重要な役割だったとはいえ、いわゆる問題作めいた演劇の上演を期待されていたのではなかったはずである。そう考えると、朝薫を讃えるあまり、テーマの自由性を根拠に、彼以後の組踊を過小評価するのは当たらない。

かなり脱線したが本題に戻って、組踊創作は朝薫の踊奉行としての職務だったが、彼の職歴はそれだけではない。例えば朝薫は雍正元年（1723）6月から9月まで、雍正帝即位の慶賀使の件で薩摩へ派遣されている。

「同年唐御代替并大唐船破損之儀、且当秋慶賀使差渡候儀被仰上候御使者。

尚氏 玉城親雲上朝薫」(9)

「本年（雍正元年癸卯）六月十三日、為稟明 雍正皇帝即位并進貢頭号船覆破事奉命為使者恭蒙 聖上遣使驢賜上布二疋、又從内院遣使賜紬一端焼酎一埵、晦日那覇開船至薩州、事竣恭蒙繼豐公賜鯉節二百塊、九月二十四日帰国仍務本職」(10)

『琉球王国評定所文書』第1巻収録「御条書写」（雍正元～13年）にもこのことが記されている。

「康熙皇帝崩御、御四男即位付て、先例之通、琉球より為慶賀使、紫金官耆人、正議

大夫耄人、其外之役々北京へ差渡申度候間、被成御免被下度由、玉城親雲上を以段々被願越候趣有之候……」「玉城事は、右之御用に付差越、最早御用相済候……」「右之段、玉城より於琉球、摂政・三司官へ相達候様……」「委細は玉城親雲上帰帆之節可申渡候……」(11)

「御条書写」の中で、康熙帝崩御、雍正帝即位の慶賀使派遣にかかる薩摩との事務連絡に活躍する「玉城」あるいは「玉城親雲上」とは、すなわち朝薫のことである。

「家譜」を見ると他に、康熙59年物奉行方吟味役、同年那覇里主（この時期那覇・泉崎に飯店を開き、食物・雑貨を商わせたとして、康熙59年に褒賞）、康熙61年申口方吟味日帳主取、雍正元年北谷王子朝騎の大親職（日帳主取兼務）、雍正2年物奉行方吟味役再任（同年領地玉城間切が年貢が滞らないだけでなく米穀の蓄えもあり、下知が行き届いているとして褒書）、雍正3年物奉行、雍正6年紫冠（親方）になっている。このように朝薫は王府の重要ポストを歴任している。

このことは直接芸能とは関係ないが、あくまでも朝薫は王府役人であり、組踊を作ったのもたまたまそれが役人としての職務のうちだったということは、朝薫を始め組踊作者について考える上で押さえておかなければならない点である。

「御条書写」には他に、当時摂政を務めていた北谷朝騎（尚徹、1703～1739）の名も頻繁に出てくる。彼は「常磐なる松の、変わる事無いさめ、いつも春くれば、色どまさる」(12)という琉歌の詠み人として知られている。

国頭朝斉（向秉乾、1686～1747）の名も、三司官宛の文書に差出人として、琉球館聞役・在番と連名で1件のみ出てくる(13)。朝斉は雍正3年（1725）年頭慶賀使として薩摩に派遣されていた。当時は当間親方と称していた。

「同年（雍正3年）乙巳、年頭御祝使。

向氏 当間親方朝斉」(14)

時代は下って咸豊6年（1856）、楽童子に関する記事が出てくる。

「 覚

楽童子 安室里之子

同 伊舎堂里之子

同 伊志嶺里之子

右来月三日御茶屋へ御奉行御申入之筈にて席書人面付如斯御座候。以上。

辰正月 楽稽古方護得久里之子

同 本部里之子」(15)

「安室里之子」とは、安室朝持（唐名不明、1841～1916）のことである。彼は「琉球古典音楽家。安富祖盛元の高弟で、安富祖流（当流）の後継者。尚敬王第2子読谷山（王子）朝恒の次男」(16)である。「安室里之子や、天の星ごころ、拝まれやすても、自由やならぬ」と詠われるほどの美男子だったという。(17)同治5年（1866）寅の冠船でも「執心鐘入」の座主役を務めた。朝持の晩年については金武良章『御冠船夜話』に詳しい。また良章の父で安富祖流の大家である金武良仁は、朝持から三線を学んでいる（ちなみに仲毛芝居の役者たちに冠船芸能を教えた読谷山朝英も朝持の弟子である）。

「伊舎堂里之子」とは、伊舎堂盛英（翁逢源、1842～1906）のことである。

「咸豊四年甲寅五月三日為慶賀 公方殿下承統統之事遣尚氏伊江王子朝忠赴于江府之時、奉 命為楽童子叙若里之子、雖然因年延蒙准請辞其職」(18)

盛英は伊舎堂盛元（翁宏烈、1776～1842）を祖父に持つ。この祖父も乾隆55年（1790）に楽童子として江戸上りしている。盛英の父は伊舎堂盛喜（翁章錦、1820～？）で、道光30年（1850）に彼は尚泰即位の謝恩に楽正として、玉川王子朝達に随行し江戸上りしている。芸能に深く関わった家柄といえるだろう。盛英は咸豊5年5月（家譜に咸豊4年5月と

あるのは、楽童子に任命された日付をさすの
だろう) 徳川家定後継の慶賀に楽童子として、
伊江王子朝忠に随行し、薩摩に到着、それか
ら江戸上りする予定だったが、安政の江戸大
地震により延期された。

「江戸立之儀、当年之筈候得共、江戸地震
并大火に付、来午年に被召延候旨、被仰渡
候段・・・」(19)

その後慶賀使派遣はついに実現せず、幻の
江戸上りとなった。家譜に「雖然因年延蒙准
請辞其職」とあるのは、そのへんの事情をい
っている。慶賀使派遣の延期で、咸豊6年に
慶賀使一行は薩摩から帰国しているので、上
の記事はその後のものである。

この幻の江戸上りで派遣されるはずだった
慶賀使一行は、次の通りである。上の記事に
出てくる3名の楽童子の名も見える。

「来辰年江戸へ賀慶使被差上筈にて、正使
以下楽正迄如先規人柄見合、去秋伺書差越
候付差出候処、正使伊江王子、副使伊是名
親方、賛議官桃原親雲上、楽正譜久山親雲
上へ被仰付・・・」(20)。

「一掌翰使	山城里之子親雲上
一儀衛正	屋富祖親雲上
一圀師	真喜屋親雲上
一正使使賛	富村親雲上
	義元里之子親雲上
	瀬嵩親雲上
一楽師	安慶名親雲上
	田崎親雲上
	豊見城里之子親雲上
	森山親雲上
	知念筑登之親雲上
一楽童子	安室里之子
	仲田里之子
	座間味里之子
	伊舎堂里之子
	羽地里之子
	伊志嶺里之子
一副使使賛	名嘉山里之子親雲上」(21)

大和歌

雍正11年(1733)朝鮮人たちが慶良間島に
漂着、乾隆7年(1742)唐人たちが奄美大島
に漂着、乾隆59年(1794)朝鮮人たちが国頭
間切安田村に漂着、その時に次のような差図
があった。

「漂着人居候近辺より大和歌など仕せ間敷
事」(22)

「村中にて大和歌仕間敷事」(23)

「村中にて大和歌仕間敷事」(24)

「木屋近辺にて大和歌など仕間敷事」(25)

漂着唐人・朝鮮人に聞かれないように「大
和歌」が禁止されたことはわかるが、ところ
で「大和歌」とは何だろうか。まず上に挙げ
た文書の日付から、正月の門付芸である京太
郎とは考えにくい。京太郎芸能は正月の20日
頃までで、それ以後しばらくは地方を巡回す
ることもあったらしいが、はたして例えば2
月15日頃までやっていただろうか。巡回にい
ささか時間がかかったと考えられなくもない
が、疑問が残る。それに同じく「玉城間切奥
武村へ唐船漂着如泊那覇乗廻本船より致帰帆
候日記」(道光24年)に「漂着唐人滞在中、
大和歌仕間敷事」(26)との文書があるが、こ
れは5月14日付の文書である。ここにいう「大
和歌」は明らかに京太郎ではない。京太郎以
外に、大和めいた芸能が、広い地域であった
ことがわかる。しかしどのような芸能だった
かは、今のところ不明といわざるを得ない。

京太郎

史料的には京太郎の規制は道光26年(1846)、
フランス人神父ル・テュルデュとアドネ、そ
してイギリス人宣教師ベッテルハイムの琉球
滞在から確認される。

「異国人共不断致方々、例年正月之通、御
役屋并脇々へ京たら入候ては差障候付、御
仮屋方御相談之上差留・・・」(27)

逗留異国人が外出する時には、必ず琉球側
の通事が付き添った。異国人らがどこへ行く

のか監視するのと同時に、首里へ登らないように彼らを牽制するためでもあった。外出するたびに通事が顔を出すので、異国人らは王府に対し苦情を訴えるという事態も引き起こした。

「京太郎之儀、異国人共方々致徘徊事にて、万一差懸候儀も難計候間差留候様、谷元十郎殿より去年御沙汰之趣有之、御釣合之上差留置候間、当年も不罷下様被仰渡度・・・」(28)

「異国人共致外出事候付、京太郎那覇へ不罷下様被仰付度旨被申越紙面相達、遂披露取締申渡置候・・・」(29)

京太郎が那覇へ下ることは、その後毎年のように禁止されることになる。「年中各月日記」道光29・30年、咸豊元・2・3・4年の正月中日記目録に「京太郎那覇へ不罷下様被仰渡度・・・」とほぼ同文で記される。しかし咸豊4年以後の「各月日記」には、この禁止については記されていない。これは、咸豊4年の琉米修好条約締結、翌5年の琉仏修好条約締結、それにベッテルハイムが咸豊4年に琉球を去ったことにも関連があるだろう。



〔読谷村長浜の京太郎〕『第1回沖縄市芸能祭～チョンダラー芸能の系譜～』（沖縄市教育委員会発行）所収

花街での放歌

辻・仲島・渡地はいわゆる花街である。辻と仲島について、『琉球国由来記』に次のようにある。

「辻・中島ノ事

辻・中島ハ荒野ニテ、無人家。到于康熙十一年壬子、始賜屋敷、漸次民家集、為里也（那覇津ハ、諸船通融之港地也。按ニ、此両所、多有妓女、待旅人矣）」(30)

辻と仲島は康熙11年(1672)になって開発が始まったことがわかる。それまでは人家もなく、荒野のようだったという。この土地が開けた理由として、那覇港が近くにあり、多くの船が往来したため、旅人を目当てに芸妓が集まり、花街が形成されたという。渡地は通堂にあった小島だが、一角に「遊所」があった。

道光26年(1846)からフランス人神父ル・テュルデュとアドネ、イギリス人宣教師ベッテルハイムが琉球に滞在し、このためこれらの花街にも、それなりの規制が行われるようになった。

「仏・英人逗留に付ては、辻・仲島・渡地において歌うたはす様、此以前度々被仰渡候得共不相守、筑佐事忍廻歌をうたひ候者捕付候付、一往為相止由候処、漸々緩せ相成、頃夜於辻村に道歌いたし候者も有之哉に相聞得・・・就ては毎月兩三度も忍差立、歌をうたひ候者は則々捕付候様無之候ては、往々相止間敷と存申候・・・」(31)。

花街に繰り出した男たちが目当ての芸妓にでも聞かせて呼び出すためだろうか、道中で歌を歌うということがあったらしい。

「評定所文書」中の数多くの異国人滞留日記に見るように、逗留の異国人たちは日頃、那覇中を歩行し、時には宜野湾や南風原辺まで出歩くことがあった。そのたびに通事が同行したり、追行人が追跡したりした。例えばベッテルハイムの行動範囲は以下のように広がった。

「今日五つ頭時分、英人寺立出候付、通事役々附添、西門より上之蔵・石門・辻村中道通にて寺へ罷帰・・・」(32)

「昨日七過時分、英人夫婦歩行之体にて寺

立出候付、通事役々付添罷通候処、西門より久米村中道大門へ出、泉崎村前より仲島前道・壺川之崎・真玉橋缸罷通、石び屋あし前迄参、其所にて暫休息茶多葉粉吞、夫より豊見城間切南風原村へ入、小禄間切垣花村之様罷通、渡舟へ乗通堂へ参、西村御飯屋後之小路より石門へ入、辻村中道通にて入相時分寺へ罷帰・・・」(33)

「英人事、山原之様可差越由にて、今朝宜野湾番所致出立候段申来候付・・・」(34)

「英人事、美里間切より宿通にて、鼓責時分金武番所到着・・・」(35)

彼ら異国人があちこち歩き回るのは、王府にとって迷惑だった。ともすると強引に首里に登ろうと企てたりするので、通事や追行人は気が気でなかった。それに上に挙げたように、辻・仲島・通堂辺へも出掛けているのである。

1921号文書「異国人へ返答之心得」(36)には次のようにある。

「傾城罷居候哉と相尋候は、罷居不申と相答候事」

異国人に対しては、琉球には花街はなく、したがって芸妓などはいないことになっていた。しかし実際にはこれらは存在するわけで、したがって異国人たちがそれに感づいてしまうような、例えば道中で歌を歌うなどすることは、禁止しなければならない。異国人たちが道歌を聞きつけて不思議に思い、あれは何かと尋ねたりすると、返答に困るからだろう。

しかし上のような通達を出し、筑佐事が日に2～3度巡回しても、あまり効果はなかったようである。上の通達からしばらくして、ふたたび同様の通達が、以下のように出されたことで、そのことがわかる。

「昨夜於辻村に道歌高声にうたひつるも慥に相分り、甚可差障段、護国寺詰通事共申出有之候。右一件付ては、先達ても申越置候処、いま取締無之候哉、今以不相止、当分は猶々繁く相成・・・」(37)

王府が異国人逗留に苦慮しているにもかかわらず、庶民のほうはそれをあまり意に介していないように思える。まさに、恩納なべが詠んだとされる「恩納松下に 禁止の碑の立つし 恋忍ぶまでも 禁止やないさめ」(38)という琉歌を、地で行くような有り様だったと思われる。

3月3日の遊日

旧3月3日といえば、浜下りともいって、この日だけは日頃の仕事を離れて、重箱など持って出掛け、楽しく遊ぶ日である。

浜下りは、組踊の場面設定にも多く用いられ、田里朝直「万歳敵討」は、高平良御鎖が家族を引き連れて小湾浜で宴を開き、娘たちの踊りを鑑賞するうち、仇討ちを謀って万歳姿で近づいた謝名子と慶雲に討たれるというあらすじである。

「高平良御鎖／・・・妻や子引列て、小湾かい浜下に行ん。やあ供の達。小湾村行かば、宿よ借よらはん、我が名どん言な。ただ首里方の歴々の宿借んてやり言やうり。仇もちやよる身の用心どやよる」(39)

平敷屋朝敏「手水の縁」でも、山戸と玉津が出会うのは3月3日である。

「山戸／我身や島尻の、波平大主の一人子山戸よ。今日や上下も遊ぶ三月の三日、押



沖縄学講座「古文書を読む会」
(2000年11月 浦添市ハーモニーセンター)

す風もすだしや、砂川山登て、花詠すらに、
花取やい遊ば」

「玉松／今出る我身や知念山口の、森小屋
の一人子玉松どやよる。三月がなれば心浮
かされて、波平玉川に頭洗に」(40)

他に3月3日浜下りを場面設定した組踊に
「高山敵討」「仲村渠真嘉戸」「花城若松」な
どがある。

沖縄芝居の歌劇でも、3月3日が効果的に
用いられる。「泊阿嘉」では第1幕、思鶴が乳
母を連れて赤津浦に出掛ける場面である。

「思鶴／今日や名に立ちゆる三月の三日、
上下も遊ぶ世の中の習慣、乳母連れて、赤
津浦行じ、螺拾て遊ば。いえなあ乳母、り
ちや早くな」

「乳母／とうたり思子、急じみそうれ。親
加那志からの御暇も拝まびたい、今日ど遊
ばれる、晴れ晴れ遊で来やべらや。いえた
り、思子。あさきぬ人、うみかけてんでは、
まこと名に立ちゆる節日の、しるしやいび
んや」

「思鶴／あんやさ、乳母。三月や心も晴れ
晴れ賑やかや。今日ど遊ばれる。晴れ晴れ
遊で戻らや」(41)

ここで阿嘉樽金が登場、天から降りてきた
のか、地から湧き出てきたのかと、思鶴の美
しさに見惚れ、後を追う。思鶴と乳母が赤津
浦に到着、そこで地謡が入る。



歌劇「泊阿嘉」我如古弥栄作
『琉球芸能事典』(那覇出版社)所収

「今日や名に立ちゆる 三月ぬ三日 浜下
りてい互に 螺拾てい遊ば」(42)

故意か否か、釣りをする振りをしている阿
嘉樽金の釣り針が、思鶴の髪に引っかかり、
阿嘉は乳母になじられる。

「薬師堂」も冒頭で、白露とその友2人が、
次のように越の頂節で歌う。その後、白露は
薬師堂の裏で鶴に出会う。

「3人／三月になれば、心浮かされて、り
ちやよ磯端に下りて、遊で戻ら」

「友1／波之上に行きゆめ」

「友2／住吉に行きゆめ」

「白露／なれば薬師堂の裏や、ましやあら
ね」

「3人／夜の入らば夜舟浮けて遊ば」(43)

池宮正治は「平敷屋朝敏とその時代」(44)
で、「水辺の恋」ともいうべき一連の芸能が
あるのだろうと述べているが、なるほどと思
う。しかしそれとは別にもう1つ、「万歳敵
討」にみるような、「水辺の仇討ち」ともい
うべき一連の芸能もあるといえないだろう
か。

それはともかく、異国人の琉球逗留によっ
て、浜下りにまで規制がかかることになった。
特にフランス人神父が滞在していた天久寺
は、浜下りで人気のあった崎樋川と目と鼻の
先である。それに、ベッテルハイムが滞在し
ていた護国寺は波之上にある。

「三月三日は遊日にて、二才共遊興を催、
女童共にも鼓を打相慰候処、仏人逗留付去
々年・去年も御禁止被仰付置候付、おのつ
から其慎可有之候得とも、至当分は天久寺
・護国寺へ仏・英人共滞留、方々徘徊、夜
中にも間々外出有之事にて、別て其慎無之
候て不叶事候間、二才とも波之上并天久寺
近辺・其外野原杯於晴場之遊興、又は女童
共鼓を打候儀、且於家内々々も賑々敷遊候
儀、屹と差留候様、各村々にて嚴重取締
いたし……」(45)

〔注〕

- (1)沖縄県立図書館所蔵。『沖縄県史』資料編7
(1999年、沖縄県教育委員会)所収。
- (2)同上243頁。
- (3)同上261頁。
- (4)同上244頁。
- (5)同上258頁。
- (6)同上277頁。
- (7)池宮正治著『沖縄の遊行芸』(1990年 ひるぎ社)。ただし引用部分は誤り。本稿「京太郎」の項。
- (8)『那覇市史』資料編第1巻7 家譜資料3 首里系(1982年 那覇市企画部市史編集室)、297頁。句読点は筆者。
- (9)沖縄県立図書館東恩納文庫所蔵「大和へ御使者記」。
- (10)前掲『那覇市史』298頁。句読点は筆者。
- (11)「御条書写」、『評定所文書』第1巻142～145頁。
- (12)同上。
- (13)『評定所文書』第1巻161～162頁。
- (14)前掲「大和へ御使者記」。
- (15)「年中各月日記 帳当座」咸豊6年、『評定所文書』第12巻51頁。
- (16)『沖縄大百科事典』(上)沖縄タイムス社、108頁。(右)
- (17)金武良章著『御冠船夜話』(1983年 若夏社)13頁。
- (18)前掲『那覇市史』、105頁。
- (19)「案書」咸豊6年、『評定所文書』第12巻317頁。
- (20)「案書」咸豊4年、『評定所文書』第8巻145頁。
- (21)同上、146頁。
- (22)「朝鮮人拾老人慶良間島漂着馬艦船を以送越候日記」雍正11～12年、『評定所文書』第1巻73頁。
- (23)「大島より送参候漂着唐人滞在中日記」乾隆7年、『評定所文書』第1巻237、251頁。
- (24)「朝鮮人十人国頭間切安田村へ漂着に付送届候日記」乾隆59年、『評定所文書』第1巻304頁。
- (25)同上332頁。
- (26)道光24年、『評定所文書』第1巻577頁。
- (27)「英人来着日記I」道光26～27年、『評定所文書』第3巻156頁。
- (28)「年中各月日記」道光28年1月9日、『評定所文書』第3巻431頁。
- (29)同上。
- (30)外間守善・波照間永吉編『定本 琉球国由来記』(1997年 角川書店)164頁。
- (31)前掲「英人来着日記I」『評定所文書』第3巻166頁。
- (32)同上98頁。
- (33)同上104～105頁。
- (34)同上116頁。
- (35)同上117頁。
- (36)『沖縄県史料』前近代3 ベリー来航関係記録2(1968年 沖縄県教育委員会)、595頁。
- (37)前掲「英人来着日記I」『評定所文書』第3巻168頁。
- (38)島袋盛敏・翁長俊郎著『琉歌全集』(1968年 武蔵野書院)8頁。
- (39)『沖縄県史料』前近代8 芸能I(1995年 沖縄県教育委員会)、173頁。ただし便宜のため句読点その他を多少変更してある。
- (40)同上20頁。
- (41)『沖縄文学全集』第10巻戯曲I(1995年 海風社)、16～17頁。ただし便宜のため句読点その他を多少変更してある。
- (42)同上17頁。
- (43)同上26頁。
- (44)『近世の諸問題シリーズ』第Ⅱ～Ⅳ弾(1984年 浦添市教育委員会)
- (45)前掲「英人来着日記I」『評定所文書』第3巻175頁。

◆2000年度刊行案内

『琉球王国評定所文書』第17巻 2001年3月発行

※口絵グラビア6 p、本文約550 p。 ※価格未定。

□発刊のあいさつ □目次 □凡例

〔巻頭論考〕19世紀初期の首里上流士族の家と女性

— 伊江親方日日記を中心に — 小野 まさ子

- | | |
|--|--|
| 1 英人ヨリ差出置候文之扣御仮屋御届
※1804号 ※解題：西里 喜行 | 6 亜国大火輪船来着書類
※1923号 ※解題：徳元 剛 |
| 2 案書（咸豊5年）
※1805号 ※解題：田里 修 | 7 異国一件館内并御仮屋方往復之書付写
※1924号 ※解題：豊見山 和行 |
| 3 廻文（同治2～3年）
※1806号 ※解題：深澤 秋人 | 8 異国一件書類
※1925号 ※解題：漢那 敬子 |
| 4 諸外国ト琉球ト条約并往復書類
※1807号 ※解題：田名 真之 | 9 英人一件書類
※1926号 ※解題：徳元 剛 |
| 5 異国人へ返答之心得
※1921号 ※解題：高良 倉吉 | □編集委員会及び第17巻執筆担当紹介 |

『琉球王国評定所文書』第18巻 2001年3月発行

※口絵グラビア6 p、本文約550 p。 ※価格未定。

□発刊のあいさつ □目次 □凡例

〔巻頭論考〕近世琉球におけるウコン専売制の起源と展開

— 夫役がささえるウコン経営 — 里井 洋一

- | | |
|---------------------------------------|--|
| 1 仏朗西人ヨリ商売方・・・大意
※1932号 ※解題：上江洲 安亨 | 6 中山ヨリ上表・康熙帝ヨリ勅諭書翰和解
※1938号 ※解題：池宮 正治 |
| 2 亜船一件書類
※1933号 ※解題：栗野 慎一郎 | 7 琉球国中山世鑑
※1950号 ※解題：池宮 正治 |
| 3 仏人一件書類
※1934号 ※解題：島尻 克美 | 8 本琉球置目条目写他、袋入四冊
※1952号 ※解題：仲地 哲夫 |
| 4 仏人一件書類
※1935号 ※解題：上江洲 安亨 | 9 漢文外国一件書類
※丙七号 ※解題：糸数 兼治 |
| 5 亜人一件書類
※1936号 ※解題：恩河 尚 | □編集委員会及び第18巻執筆担当紹介 |

【短信】

平成12年度沖縄学講座「市史を読む会」
基本テーマ：自然・環境と自立

2000年の沖縄は21世紀を迎えるため、様々なイベントが行われた一年でした。7月に沖縄サミットが開催され、今後の沖縄のあり方が問われる中、12月には首里城を中心としたグスク遺跡群が世界遺産に登録されることが決定しました。その反面、長引く経済不況の中で沖縄は深刻な就職難や商業地の衰退を余儀なくされています。幸か不幸か基地が在ったが故に、今まで手つかずに残された自然が、経済の活性化という名目で確固とした議論もなされないままに開発されようとしています。まさに21世紀に何を伝え、残してゆくのか。また、何が失われようとしているのかを問うた一年であったともいえるでしょう。

今回、「市史を読む会」の基本テーマである「自然・環境と自立」は、従来の沖縄学で直接的に取り上げることのなかった分野に注目することによって、沖縄学の視野を広げ、沖縄の現状をより包括的に理解する助けになればという思いから設定しました。

全5回の講座は、下記の内容と順序で開催しました。

第1回 7月29日 安里英子氏

「復帰後、島の風景はどのように変化したか!!
～とりわけ公共事業による自然破壊について～」

第2回 8月26日 都築晶子氏

「蔡温の造林法～風水と環境～」

第3回 9月16日 遊磨正秀氏

「水辺の環境と生態」

第4回 10月28日 崎山正美氏

「沖縄の干潟、その価値と変遷」

第5回 11月25日 土田武信氏

「赤土汚染問題は解決できるのか～ジュゴン保護運動や赤土汚染問題等にかかわり考えること～」

全講座の一つ一つのタイトルで見ると、それぞれ別々の内容のようにも思われますが、全てのテーマに共通していたのは、人間を含めた生態系という考え方であったように思えます。

安里氏は復帰後の乱開発によって、沖縄の風景が如何に変化してきたかということを語るなかで、「豊かさとは何か」という問いを發しました。私たちの感じている豊かさとは何か。そして、これから生きて行く私たちに必要なものは何であるのか。開発がもたらした物質的な豊かさと、競争社会が生み出す効率性は私たちを本当に豊かにしてくれているのか。21世紀にいきる私たちが直面している様々な問題の根源ともいえる問いが提示されたのでした。また、都築氏の「蔡温の造林法」では、琉球王府の三司官として治水、山林政策に着手した蔡温の風水思想を通して、近世期の開発には一定の法則性が在ることを学びました。決して無秩序な開発ではなく、方角や地形、地質などをみて、その土地に合った開発の方法が導き出される。そこでは自然と共存する人間の生活空間が守られていました。

現在の沖縄では戦争と基地建設により分断され、近世期から続いてきた自然景観の継承はあまり感じられない。しかし、地域によっては未だに習慣や年中行事のなかに山や川、海の恵みに感謝しつつ、畏れ尊ぶ意識が残っています。遊磨氏のお話は琵琶湖周辺の自然文化に関する世代間の意識調査、方言名の定着、自然にふれる機会や遊びの変化などが中心でしたが、その方法論は沖縄でも通用するものであると感じました。情けないことにもう今の30代前半の世代は沖縄の動植物についての方言名をほとんど知らない世代だと思います。方言が表す地域の自然観を捉えることができなくなっているのが、今の現状なのではないでしょうか。それは沖縄だけに

限られたことではありません。

その一例として、2000年10月に沖縄市で「国際湿地シンポジウムin沖縄」が開催されました。全国的に天然の姿で残されている干潟は数少なくなってきました。沖縄市泡瀬や名護市辺野古、浦添市でも港川に一部残っています。これらの干潟は基地が存在するために現在まで開発の手から守られてきた最後の干潟なのです。沖縄の干潟は沢山の生命を育んできた場所です。干潟はそれだけで存在しているのではなく、その周辺には海があり、川があり、砂地があり、岩礁があり、藻場があります。そこには有機物を分解する生物が沢山存在し、またその藻場を餌場にする生物が集まってくる。そういったものが全て連鎖してエコトーン(生態系移行帯)を形成しており、人間もまたその中で暮らしているのです。

人は人だけで存在するのではなく、多くの動植物と共存しなければ、存在してゆけません。それと同様に自然もまたそれだけで存在するわけではないのです。ごく当たり前のことなのですが、改めてそのことに気付かされたのが今回の講座でした。赤土問題やジュゴンの保護運動といった活動は、これからの沖縄の未来に大きく影響していきます。今回の講座が何を以て沖縄の豊かな文化を表現してゆくのかを考える契機となればと思っています。

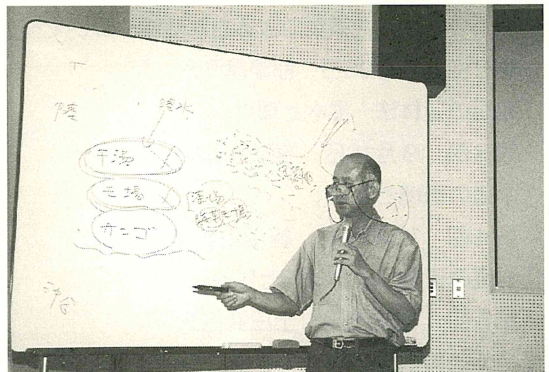
(野原千明)

〔参考文献〕

- (1)『豊かさとは何か』暉峻淑子著 岩波文庫 1989年
- (2)「開発とくらしと女性たちー真の豊かさを求めてー」安里英子著『沖縄県女性史研究』第2号 1998年
- (3)「風水思想と久米村」都築晶子著(池宮正治・小渡清孝・田名真之編『久米村ー歴史と人物』ひるぎ社) 1993年
- (4)「蔡温の造林法についてー風水と技術ー」都築晶子著『東洋史苑』第48・49合併号 龍谷大学東洋史研究会 1997年
- (5)『水辺遊びの生態学ー琵琶湖地域の三世代の語りからー』嘉田由紀子/遊磨正秀共著 農山漁村文化協会 2000年
- (6)『琉球弧』『いゆまち』(沖縄地域ネットワーク社発行)ではジュゴン保護運動や干潟・環境問題についての特集を掲載し、分かりやすく解説しています。

〔参考ホームページ〕

- (1)「赤土流出問題」
<http://www.okinawa-u.ac.jp/~tsuchida/akatsuchi/>
- (2)「Guide to a “Save-Dugong” mailing list」
<http://www.okinawa-u.ac.jp/~tsuchida/Save-Dugong/index.html>
- (3) 京都大学生態学研究センター
<http://ecology.kyoto-u.ac.jp/>



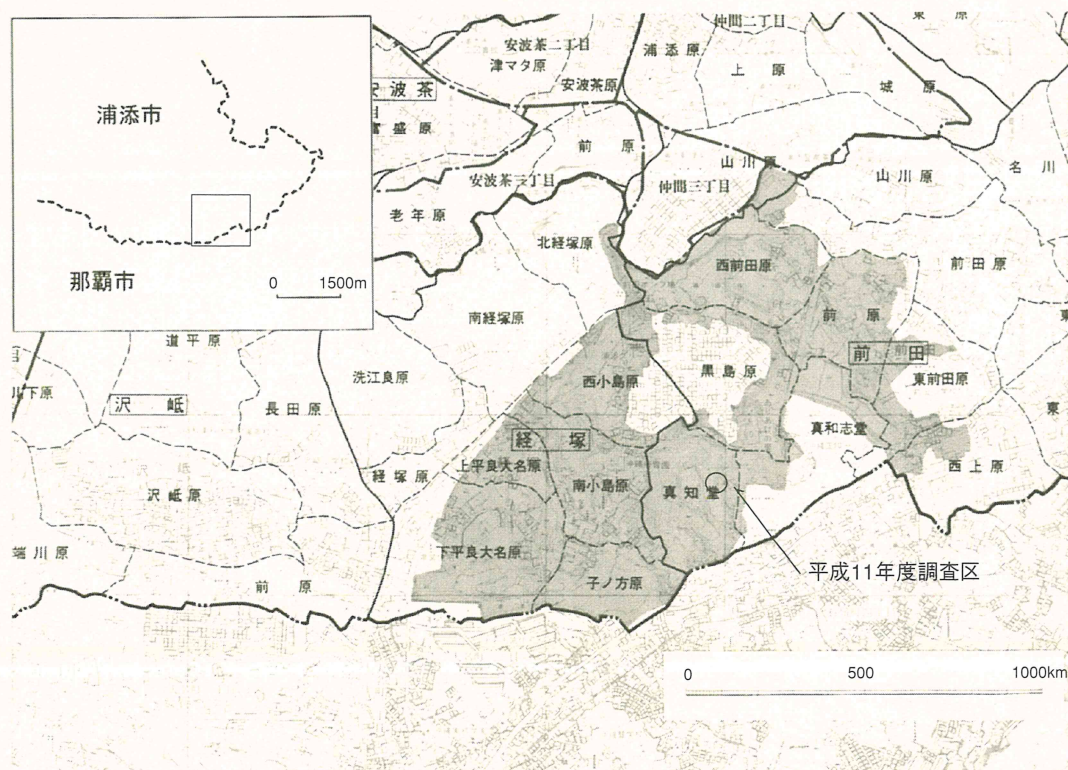
前田・経塚の古墓群調査 — 平成11年度 真知堂地区の成果 —

佐伯 信之・新里 まゆみ
北條 真子・山本 正昭

はじめに

浦添市の南部、那覇市と接する字前田・経塚両地区では市施行による浦添南第一地区土地画整理事業が行われている。事業予定地は82%にもおよぶ広大なものであるが、この付近は豊見城層という砂岩層(ニービ)の丘陵とその間に走る谷地により形成され、現在でもそれらの地形を良好にうかがうことができる。その土地利用の多くは丘陵斜面に横穴を穿った掘込墓(方言でフィンチャー)をはじめとした墓を造成し、また谷地部分は水田

や畠などの耕作地として利用したもので、前田という地名も仲間の前に田が広がっていたことに由来すると言われている(1)。墓は近年造られたものもみられるが、組踊の創始者玉城朝薫の墓をはじめとする琉球王朝時代に造られた墓も多く、それらは現在も使用されている。また、一帯は浦添市では数少なくなった緑地帯であり、小動物の貴重な生息場所として調査報告も行われている(2)。しかし近年は宅地が広がり、耕作地も少なくなり、それらの墓は他所への移転が進められている。



南第一地区位置図

無秩序な開発を防ぐことを旨とした区画整理事業が実施されるにあたり、これらの文化遺産を記録に残すべく浦添市教育委員会文化課では発掘調査を行うこととなり、まず4ヵ年におよぶ試掘調査・現地踏査が行われた。その結果、軟質な砂岩層が崩壊し墓口あるいは墓室が埋まってしまった埋没墓の存在が想定され、それらを含めると推定で約2,000～3,000基という古墓が広範囲にわたって分布することが明らかとなった。また17世紀の水田跡や、近世の地割に則った畠が確認されている。これらをもとに平成9年度には経塚子ノ方原に所在する掘込墓群の発掘調査が行われ、平成11年度には本格的な継続調査の先鞭として前田真知堂と経塚西小島原に所在する古墓群の調査が実施された。

本稿では古墓の調査方法を紹介しながら平成11年度の真知堂での調査成果を述べてみたい。

1. 調査の方法

南第一地区内の古墓は埋蔵文化財であり、その調査では当然発掘が行われる。古墓調査の目的には被葬者の歴史を知る、墓の構造や造成の様子を明らかにすることのほか、古墓群の場合にはその構成要素の解明がある。たとえ空墓であっても調査をすることにより、墓のサイズや形態などから当時の状況の一端をうかがうことができる。しかしそれによって得られる情報は限られており断片的であるため、銘書の判読・人骨の人類学的分析・聞き取り調査・文献調査等、他分野からのアプローチを試みながら相互補完することにより当時の様子や被葬者の情報を得、「群」としての古墓の実態に迫ろうとしている。以下、具体的な調査方法を列記する。

(1) 考古学的調査

発掘を中心とした調査である。墓口が埋没してしまい、その所在すら忘れ去られている

ものの発見のみならず、現在も使用しているものでも、近世に造られたものであればその対象とする（所有者が判明しているものは移転後に行う）。

調査は①周辺の崩壊などにより流入した土砂の除去、②土層を観察しながら造営の様子を探る、③遺物（厨子甕・香炉）などの確認、④実測の手順で進められ、写真撮影は随時行われる。

一方で先述のように南第一地区内の古墓は数千基にのぼるため、群としての位置付けが重要である。そのため複数の墓にまたがるようにトレンチ（試掘溝）を設定し、断面観察から造営順序を推定する。また、出土した遺物からも編年を用い、その墓の使用されていた時期を特定するのだが、古墓の調査では出土数の多い厨子甕の編年が重要になる。



発掘調査風景（真知堂99-11号墓）

(2) 銘書判読

墓調査ではよく用いられる手法である。厨子甕に記された銘書には被葬者の名前・続柄・享年・死亡年月日・洗骨年月日・地名などがみられ、いわば履歴書といえるが、被葬者のみならず葬られていた墓や厨子甕などにとっても大きなデータとなる。この銘書をもとに墓の来歴や厨子甕の時期を語ることが多いが、墓を新築した際に前の墓から厨子甕を移動してきていたり、あるいは追葬や厨子甕の再利用なども行われるため、銘書からの情報の利用には慎重を期する。また浦添、特に

南第一地区ではほとんどの厨子甕に銘書がみられるがなかには無いものもあり、常に適用できる手法ではない。



99-11号墓 6号厨子甕銘書

(3) 人骨分析

人骨が納められた厨子甕が納骨当時のまま発見された場合、人骨の人類学的な分析を行うことにより銘書からは読み取れない被葬者の諸情報（推定死亡年齢・性別・傷病・生活環境・出産歴・身体的特徴など）を得ることができる。それらから銘書が示す親族関係や年齢を裏付けることも可能である。

また、DNAによる鑑定や歯冠計測値⁽³⁾を用いて、被葬者間の血縁関係を推定することも可能である。

(4) 聞き取り調査

発掘調査では、その地域の墓がいつ・誰が・どのように使っていたか、周辺には何があったかなどが大きな手がかりとなる。所有者不明の墓であっても、銘書に“屋号”などの現在につながる情報がある場合には、そこから関係者を割り出し、対象墓に関する情報を得られる可能性がある。また、土地の古老に直接話を聞くことによって、墓以外の土地利用や当時の農作業の様子、戦時中の状況、上の世代から伝え聞いた話など、文献には無い貴重なデータを得ることができる。しかしイ

ンフォーマント（被調査者）の世代によって聞き取れる内容も異なってくるので、できる限り多くの方々から情報収集することが大切である。

(5) 文献調査

聞き取り調査で欠かせないのが文献調査である。特に聞き取り調査をする場合、前もってその事柄に関する情報を持たなければ話の展開が難しいため、その地域に関する文献を収集する。

南第一地区内の調査のため常備しているのは戦前（昭和10年代）の土地利用図で、現在浦添市立図書館沖縄学研究室に保管されている。

これは昭和26年に作成された『土地所有権証明書交付簿』と昭和42年作成の小字集成図をもとに、聞き取りで得た昭和10年代の情報を書き込み復元したものである。このような資料を見ながら話をしてもらいと、当時の記憶が呼び起こされやすいようである。

また、墓所有者が系図などを持っている場合には、銘書との照合が可能で、より詳細な年代や被葬者の生前の活動状況を知ることができる。銘書で士族を特徴づける“氏”や“名乗頭”が判明する場合は『氏集』（那覇市歴史資料室発行）で、家譜資料の残存状況を知ることができる。

(6) その他

南第一地区内に所在する墓の所有者（含旧所有者）をみると、その6割近くが那覇市在住で、さらにその7割が首里、特に石嶺に集中している。その墓は石嶺に隣接する前田真知堂や経塚子ノ方原に多く、逆に前田集落のある西前田原や前原には前田居住者所有の墓が半分以上を占める。このように同じ浦添の前田でありながら⁽⁴⁾場所によって所有形態が異なり、しかも往時の浦添間切外⁽⁵⁾から墓地を求めてきているのである。この点

も南第一地区の古墓群を考える要素の一つである。

区画整理に伴って墓の移転が進められているが、所有者の快諾が得られれば移転の際に厨子甕や銘書の調査を行っている。短時間の限られたものだがいずれ発掘調査を行うことになったとき、あるいは南第一地区内の古墓群を考える際の大きな情報となる。

また、墓の造営の際には風水が大きな影響をもっているといわれるが、実際の遺構から何が導き出せるのかは検討を必要とする。

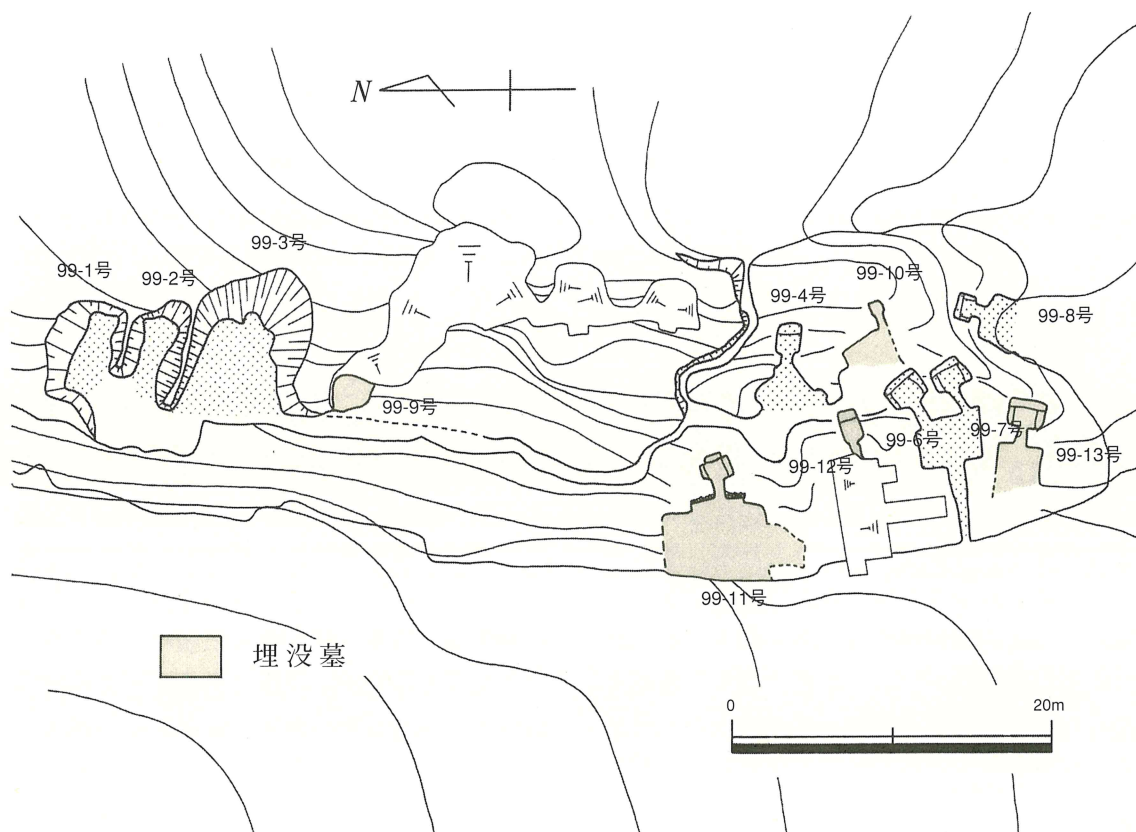
古墓調査において以上の方法が常に援用できるわけではない。移転済みであれば厨子甕や銘書の情報は得られず、逆に埋没墓の場合には所有者がわからず聞き取りは行えないことが多い。

銘書や人骨の遺存状況にも左右される。また発掘調査成果の整理作業や分析などは現在継続中であり、かつ本格的な調査は今回が初めてということもありデータ量も充分とはいえない。今後の調査の進展による資料の増加を待ちたい。

2. 平成11年度の調査成果

<真知堂>

真知堂は別名をオウジマーシともいい、前田の南西隅に位置し宅地はほとんどみられない。昭和10年代の土地利用状況図を見ても田畠や山林・原野、墓地が大半で、特に墓地が集中していたという(6)。今回の調査区は真知堂の北東端にあたり、調査前の踏査で掘込墓8基が確認されていた。



平成11年度調査区（真知堂）古墓分布

調査はまず聞き取りから始まった。当初の調査対象墓の内、旧所有者が判明したのは99-1～3号墓のみであった。この3基は石嶺出身の同一人の旧所有になり、99-3号墓を「イーデー」（年代が上の意）、99-2号墓は「ナカデー」（中の代の意）と呼び99-1号墓が一番新しく、旧所有者の父親達が葬られていた。また、地元の古老からの聞き取りでは、那覇は土地が少ないため、首里・那覇の人たちがやってきて埋葬していたという話もうかがえた。周辺の畠ではサトウキビやイモを作っており、水田は戦後まであったが30年程前にはもうなかったという。



99-1～3号墓

発掘調査では一帯の伐採が行われ、その地形の様子から何ヵ所かに墓が埋没していると推測できたため、それらにトレンチを設け確認を行った。最終的に埋没墓は5基確認でき、調査区内には13基の掘込墓が存在していることが判明した。この数量は予想以上のものであり今回の調査では対応できないため、99-1～3号墓と、埋没墓で厨子甕が納められていた99-9号墓の4基は次年度以降に調査を持ち越すこととなった。墓の位置関係は図に示した通りだが、このうち発掘調査により発見された埋没墓は99-9～13号墓である。すでに存在の確認されていた99-4号墓から99-8号墓（当初99-5号墓としていたものは99-4号墓の袖墓と判明）まではすべて既に移転が行われた空

墓であり、埋没墓のうち99-12・13号墓は墓室で厨子甕が見つからなかった。残る99-9・10・11号墓は墓室で厨子甕が見つかっており、使用当時のままの状況をうかがうことができた。



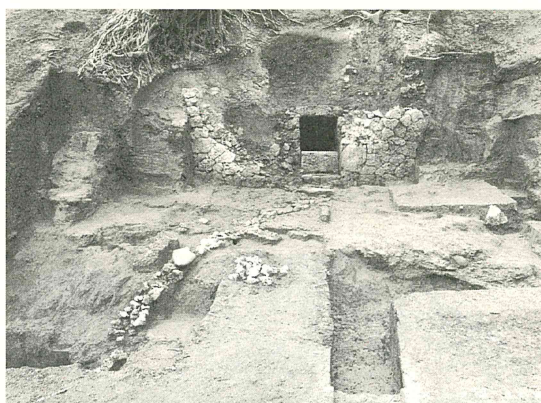
平成11年度調査区（真知堂）全景



99-10号墓

＜99-11号墓＞

今回の調査で最も多くの成果を得ることができたのは埋没墓の99-11号墓である。主な成果としては周辺には数少ない切石積みを用いた掘込墓であったこと、墓庭・墓室共に排水機能が完備されていること、墓室には計10基の厨子甕が安置されていたこと、厨子甕から多くの人骨と銘書が確認されたことなどがあげられる。墓室は天井が崩落し、墓口南側の石積みも土圧と上部からの土の流れ込みにより一部崩壊していた。墓庭では地山を掘り込んで細粒砂岩や石灰岩で蓋をした全長約3



99-11号墓全景



99-11号墓厨子甕出土状況

竈の暗渠が確認でき、墓室の排水のための複数の素掘りの溝と繋がっていた。墓室は正面奥と左右に地山削り出しのタナをそれぞれ一段ずつ有し、安置されていた厨子甕がほぼ完全な形で出土した。全ての厨子甕の蓋裏などに銘書が確認でき（別表）、甕内には人骨が遺存していた。

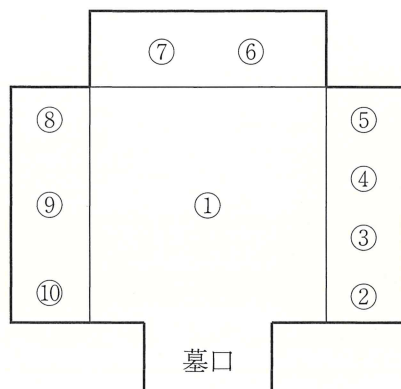
厨子甕の銘書から本墓は「鄒姓糸洲家」の墓であることがわかり、名乗頭は「章」であった。『氏集』には「四番 458 大宗鄒基照屋筑登之親雲上章房 鄒氏糸洲筑登之親雲上」とみえる。関係者を捜すため県内の電話帳で「糸洲」「糸洲」姓に「章」の名乗頭がつく名前を検索したが確認できなかった。

人骨については人類学的な分析を琉球大学医学部に依頼しており、この結果により近世庶民の形質の特徴などのほか、特に豊富な銘書資料と照合させることにより家族の復元が期待できる (7)。

その他に特徴ある墓として99-13号墓があげられる。埋没墓であったが、墓室埋土から人骨と不発手榴弾、薬瓶などが出土し、墓庭埋土からは大量の厨子甕片と木箱に入っていたと思われる手榴弾が見つかった。聞き取り調査において戦時中に墓に避難していた話が得られているが、本墓もそれと同じような墓以外の利用の様子がうかがえる。



99-11号墓5・6・7・8号厨子甕（右から）



99-11号墓厨子甕配置略図

＜造営順序＞

さて、群としての視点として各墓の造営時期の前後関係であるが、地形的にトレンチを設定できなかったり攪乱などで大きく破壊さ

99-11号墓 銘書一覧

番号	銘 書		西暦年	備 考
	部 位	内 容		
1	蓋の裏面 (縦書き)	同治八年己巳六月三日糸洌筑登之親雲上章 輔娘洗骨	1869	
		大清嘉慶糸洲章彌女子思亀廿二年丑九月二 日夭亡	1817	
		道光元年己巳七月九日洗骨昭和八年癸酉旧七 月九日合葬ス	1821 1933	
		大正拾五年旧二月廿八日死去章香四女真蒲 戸	1926	
		[...] 旧□月九日洗骨合□ [葬]		
2	蓋の裏面 (縦書き)	光緒二十年甲午八月八日洗骨糸洌章香嫡子 小樽	1894	
	蓋の縁 (縦書き)	光緒二十年糸洌章香嫡子小樽	1894	
3	蓋の裏面 (縦書き)	糸洌筑登之 鄒文 [煥] 章□ 室真鶴	1897 1899 1905	放射状に書 かれている。 そのうち6 行は消され ている
		光緒廿三年 酉五月十一日死		
		同三十五年己 亥十一月三日洗 骨 光緒三十 一年己八月 廿九日洗骨 糸洌章 □ノ種子 □□□糸洌 □□		
4	蓋の裏面 (縦書き)	大正拾四年旧五月廿四日死去	1925	
		同拾五年旧二月廿八日洗骨 糸洲章香 糸洲章香	1926	

	蓋の縁 (縦書き)	□□□廿十一日死□十五年□□□□		
5	蓋の裏面 (縦書き)	道光二十二年壬寅八月四日嫡子糸洌筑登之 章祚洗骨同人妻合	1842	
6	蓋の裏面 (縦書き)	大清道光八年戊子十一月七日卒同十三年己 巳三月十七日洗骨三男糸洌筑登之親雲上章 彌娘真鍋 大清道光二年壬午八月二十五日卒同六年丙 戌六月廿九日洗骨糸洌筑登之親雲上章盈妻	1828 1833 1822 1826	道光13年は 実際は「癸 巳」
	身の正面 (縦書き)	大清道光二年 壬午八 […] 五日 […] 同六年丙六月廿九 洗骨□□筑登之親雲 章 […]	1822 1826	
7	蓋の裏面 (縦書き)	大清咸豐二年壬子二月廿八日三男糸洲筑登 之親雲上章彌洗骨 同八年戊午八月卅日同人妻洗骨	1852 1858	
	蓋の縁 (縦書き)	三 […] 筑登之親雲上章□□□		朱書き
8	蓋の裏面 (縦書き)	光緒拾三年丁亥四月四日糸洌筑登之親雲上 章輔洗骨同人妻合		
9	蓋の裏面 (縦書き)	道光二十八年戊申十二… [洗] 骨三男糸洌 子章榮	1848	
10	蓋の裏面 (縦書き)	大正七年戊午旧四月五日死去章香三男童名 武太章茂 同拾三年旧五月廿四日洗骨	1918 1924	
	蓋の縁 (縦書き)	…旧四月五日死去章香三男 [武] …		

れているものもあり、すべての墓において明らかにすることはできなかった。確認できたものでいえば墓庭・墓道を共有している99-6・7号墓の墓室はほぼ同時期の造営であった。さらにその両隣の99-12・13号墓の方が古く、それに規制されたために99-6・7号墓は墓口と墓庭の向きをずらして造営せざるを得なかったようである。いいかえれば99-6・7号墓はそれだけ墓口の向きを意識していたことになろうか。また、先述のように99-1~3号墓は聞き取りでそれぞれの墓の呼称が確認されており、造営時期を反映しているものと考えられる。さらに尾根頂部から99-1~3号墓に至る道の真下で99-9号墓が発見されており、99-1~3号墓造営よりさらに時期が遡るものとみられる。



99-6・7号墓

<古文書>

一方、南第一地区に関わる資料を探していくなかで古文書の複写資料を確認することができた(8)。

証 拠

山野六坪四分八リ

代銭壺万七千六百貫文 印

右扇子まし原ニ有之候佐久田親方地頭地
山野之内墓敷壺敷代銭ノ礎ニ請取申候尤
別紙間付之通佐久田親方御証拠書取添
差上候儀相違無御座候以上

佐久川里之子親雲上 印

同治九年午

正月

嘉味田筑登之親雲上

同治九年午九月十四日骨移仕置申候

これによると、扇子まし原にある佐久田親方⁽⁹⁾の地頭地である山野を、佐久川里之子親雲上が墓の造営のため購入している(代金は6坪4分8厘で17,600貫文)。その代金を支払い、別紙の間付(設計図のようなもの)のとおり佐久田親方の証拠書を取りそろえて嘉味田筑登之親雲上に差し出した文書(提出した佐久川里之子親雲上の控え)で、同治9(1870)年9月14日に骨を移したことも追記されている。

本文の「押印」の有無で、土地を購入したのは佐久川里之子親雲上と判断したが、その証拠書の提出先である嘉味田筑登之親雲上は、おそらく田畠を管理する田地方・田方奉行・給地方の役人とみられる。

この古文書にみえる「扇子まし原」(オウジマシバル)は真知堂の別称である。この墓がどれか特定できたわけではないが、南第一地区において当時は山野が墓の敷地として売買の対象となっていたことがわかり、また金額(いわば地価)も明記されており貴重な資料である。

また、本文末には、嘉味田筑登之親雲上に証拠書を提出して9ヵ月後に骨を移動させたとある。この記述は墓の移転をあらわしており、銘書の年代がかならずしも墓造営の年代を反映しているとは限らないということがわかる一行である。

おわりに

以上概要を述べてきた。現在整理作業を行っており、詳しいことは今後刊行していく予定の報告書に譲るが、今回の調査では過去の踏査において想定されていた埋没墓の存在が

明確となり、かつ予想以上のデータを内包しているものも確認できた。今後も99-11号墓と同様の資料の増加も考えられるため、古墓群の全容解明に大きく近づくものと思われる。今回の調査区は南第一地区全体のほんの一部であり端緒でもあるため、群としての把握・検討はこれからの課題である。また水田跡の発掘調査も平成12年度から始まり、往時の前田・経塚周辺の様子が徐々に明らかになっていくことであろう。

最後に、インフォーマントの紹介や聞き取りがスムーズにいくよう取りはからってくださった前田・経塚両自治会長、前田真知堂について貴重な情報を快く提供して下さいました前田・経塚自治会の諸先輩方、那覇市在住の旧墓所有者の方々に心から感謝し、お礼を申し上げます。

〔注〕

- (1) 『浦添市史』第四巻 資料編3 浦添の民俗 (1983) 36頁。
- (2) 『浦添南第一土地区画整理事業内小動物調査報告書—浦添南第一土地区画整理事業内に残された緑地帯の小動物について—』浦添市文化財調査研究報告書第27集 (浦添市教育委員会 1997)
- (3) 歯の口腔内に現れているエナメル質に覆われた部分を歯冠という。上・下顎の中切歯から第2大臼歯まで、それぞれの歯冠の近遠心径・頬舌径を計測した値が歯冠計測値である。歯の形は遺伝性が強く形成後の変化も少ないため、計測値を相対的な値に変換することにより性・年齢に関係なく類縁関係を推定できる。
- (4) 大正5 (1916) 年に安波茶・沢岬・前田の各字の一部を分割して字経塚が成立しており、子ノ方原は前田からの編入である。『浦添市史』第六巻 資料編5 自然・考古・産業・歌謡 (1986) 294頁。
- (5) 石嶺は近世には西原間切に属し、明治41 (1908) 年から大正9 (1920) 年までは西原村、その

後首里区となっている。『角川日本地名大辞典』47 沖縄県 (角川書店 1986) 152頁。

- (6) 前掲『浦添市史』298、329、333頁参照。
- (7) その手法は『伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者—近世墓の考古学的調査による家族復元—』浦添市文化財調査研究報告書第25集 (浦添市教育委員会 1997) に詳しい。
- (8) 資料は『楊姓家譜小宗・仕次・証文』(複写製本資料) の一部。また、解釈には浦添市立図書館沖縄学研究室の長間安彦氏のご教示を頂いた。
- (9) 『琉球藩雜記』(1873年) によると、佐久田親方は、浦添間切前田村の地頭であった。この墓敷地も領地に含まれていた。

沖縄学研究室寄贈受付図書資料一覧

【1998年度後半～99年度前半】

※但し、雑誌・市勢要覧・宣伝小冊子などは除外した。

書名	編著者	発行者	発行年月
いじゅん川 Ⅲ号 食をたずねて	ゆらおう会	ゆらおう会	1998・04
喜界島 いま未来潮流 (喜界町町制施行四〇周年記念誌)	(有)浜田太写真事務所	喜界町役場	1997・02
広報 きかい 縮刷版 第1巻	喜界町役場企画観光課	"	1991・03
空から見るわがまち(喜界島航空写真集)	"	"	1992・01
沖縄県史だより 第8号	沖縄県公文書館史料編集室	沖縄県公文書館史料編集室	1998・08
新沖縄県史だより 第7号	"	"	1996・11
南海日日新聞五十年史	南海日日新聞五十年史編纂委員会	南海日日新聞	1997・11
沖縄大学地域研究所所報 No.17	沖縄大学地域研究所	沖縄大学地域研究所	1998・09
敬天愛人 第16号	(財)西郷南洲顕彰会	(財)西郷南洲顕彰会	1998・09
琉球アジア社会文化研究 創刊号	琉球アジア社会文化研究会	琉球アジア社会文化研究会	1998・10
久米島具志川村の文化財	具志川村教育委員会	具志川村教育委員会	1992・03
久米島仲里村の文化財	仲里村教育委員会	仲里村教育委員会	1998・03
薩琉文化 第63号	鹿児島短期大学付属南日本文化研究所	鹿児島短期大学付属南日本文化研究所	1998・07
南日本文化－1997年度調査報告者－第31号	"	"	1998・08
御手形写拔書〈石垣市史叢書11〉	石垣市総務部市史編集室	石垣市役所	1998・08
大波之時各村之形行書・大波寄揚候次第(石垣市史叢書12)	"	"	1998・09
石垣島村むら探訪－野底・伊原間・開拓の村むら・梓海・安良－	"	"	1998・09
柳河藩立花家分限帳〈柳川歴史資料集成第3集〉			
柳川歴史資料集成第3集付図 近世後期柳川城下屋敷割図(仮題)	柳川市史編集委員会	柳川市役所	1998・03
民俗学研究所ニュース No.42	松崎 憲三	成城大学民俗学研究所	1998・10
広島県立文書館だより 第12号	広島県立文書館	広島県立文書館	1998・09
民俗文化 第419号	菅沼 晃次郎	滋賀民俗学会	1998・08
民俗文化 第420号	"	"	1998・09
民俗文化 第421号	"	"	1998・10
100万分の1 琉球諸島とその周辺	(有)南西マイクロ	(有)南西マイクロ	1998・06
読谷村立歴史民俗資料館紀要 第22号	読谷村立歴史民俗資料館	読谷村立歴史民俗資料館	1998・03
読谷村立歴史民俗資料館年報 第23号	"	"	1998・08
読谷村立歴史民俗資料館だより No.31	"	"	1998・03
ふるさとの歩み－市町村字史誌関係資料展－展示目録	沖縄県立図書館	沖縄県立図書館	1998・10
竹富町史だより 第14号	竹富町史編集室	竹富町史編集室	1998・09
琉球大学附属図書館報 びぶりお Vol.31 No.4	琉球大学附属図書館	琉球大学附属図書館	1998・10
歴代宝案 訳注本第二冊 (第1集巻22～43)	沖縄県公文書館史料編集室	沖縄県公文書館史料編集室	1997・03
那覇市史 資料編第1巻9 近世那覇関係資料	那覇市経済文化部歴史資料室	那覇市経済文化部歴史資料室	1998・10
那覇市史 資料編第1巻9 琉球資料漢文編	"	"	1998・10

書名	編著者	発行者	発行年月
首里城正殿之鐘と墨絵「光と影の世界」 石垣島周辺海域サンゴ礁学術調査報告書	小島瓊禮・金城美智子	(有)沖縄総合図書	1991・12
昭和59年度石垣市委託水産業基本計画査定基礎調査 1985	太平洋資源開発研究所	石垣市役所	1985・09
沖縄県女性史研究 第2号	沖縄県公文書館史料編集室	沖縄県教育委員会	1998・09
沖縄戦研究 I	"	"	1998・10
福岡県地域史研究 No.11	(財)西日本文化協会福岡県地域史研究所	(財)西日本文化協会福岡県地域史研究所	1993・03
福岡県地域史研究 No.12	"	"	1993・11
福岡県地域史研究 No.13	"	"	1995・01
福岡県地域史研究 No.14	"	"	1996・03
福岡県地域史研究 No.15	"	"	1997・03
福岡県地域史研究 No.16	"	"	1998・03
史料保存シンポジウム記録集			
地域社会と史料保存－公文書等の保存と地域の連携を求めて－	群馬県立文書館	群馬県立文書館	1996・07
大分県公文書館だより 第2号	大分県公文書館	大分県公文書館	1996・03
大分県公文書館だより 第3号	"	"	1997・04
大分県公文書館だより 第4号	"	"	1998・02
大分県公文書館だより 第5号	"	"	1998・10
奄美博物館資料集(1)			
津島家文書『明治四年未二月 御廻文留写』	名瀬市立奄美博物館	名瀬市立奄美博物館	1998・03
大分県公文書館第1回企画展			
明治初期の大分県－「豊後国地誌提要」の世界	大分県公文書館	大分県公文書館	1996・02
大分県公文書館第2回企画展			
明治期大分県の風水害－県下の被害状況と行政の対応－	"	"	1996・08
大分県公文書館第3回企画展			
近代大分県の観光－県下の観光地と鉄道網－	"	"	1997・08
大分県公文書館第4回企画展-近代大分県の物産-	"	"	1998・08
人間科学 第2号(琉球大学法文学部人間科学科紀要)	琉球大学法文学部	琉球大学法文学部	1998・09
言語文化研究紀要 第7号	琉球大学法文学部国際言語文化学科	琉球大学法文学部国際言語文化学科	1998・10
琉球大学経済研究 第56号 仲宗根勇教授退官記念号	琉球大学法文学部	琉球大学法文学部	1998・09
ちいさな種 第2回南風原町子ども平和学習交流報告書 1995年度	南風原文化センター	南風原文化センター	1996・05
ひと風吹いて 第3回南風原町子ども平和学習交流報告書 1996年度	"	"	1997・03
青葉のいぶき 第4回南風原町子ども平和学習交流報告書 1997年度	"	"	1998・03
第2回戦争遺跡保存全国シンポジウム報告書	南風原文化センター・沖縄平和ネットワーク 南風町・沖縄平和ネットワーク		1998・10
南風の杜 第2号(南風原文化センター紀要)	南風原文化センター	南風原文化センター	1996・03
南風の杜 第3号(南風原文化センター紀要)	"	"	1997・03
南風の杜 第4号(南風原文化センター紀要)	"	"	1998・03
漆工史 第21号	漆工史学会	漆工史学会	1998・11
文化協会的年代〈台中市珍貴古老照片專輯2〉	林 柏維	台中市立文化中心	1996・06

書名	編著者	発行者	発行年月
沖縄県史 資料編5 染色関係近代新聞資料 技術1 那覇市旧跡・歴史的地名地図	沖縄県公文書館史料編集室	沖縄県教育委員会	1997・03
那覇・首里・真和志・小緑地区(4葉)	那覇市文化局歴史資料室	那覇市文化局歴史資料室	1998・03
沖縄関係学研究論集 第5号	沖縄関係学研究会	沖縄関係学研究会	1998・04
命ど宝〈ひめゆり同窓会講演集〉	株式会社銀河	埼玉県生活福祉部	1994・11
神奈川大学評論 31 特集=政治・行政・組織の現在	神奈川大学評論編集専門委員会	神奈川大学広報委員会	1998・11
徳島県立博物館研究紀要 第8号	徳島県立博物館	徳島県立博物館	1998・11
〔創立50周年記念誌〕城間うないのあしあと	記念事業実行委員会記念誌部	〔浦添市〕城間婦人会	1998・06
平成9年度古文書資料目録3	福岡市総合図書館	福岡市総合図書館	1998・03
公文書資料目録 第2集	〃	〃	1998・03
ひめゆり平和祈念資料館資料館だより第22号	ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館	1998・11
汲古 第36号	古典研究会	汲古書院	1999・01
沖縄女子短期大学紀要 第15号	沖縄女子短期大学	沖縄女子短期大学	1998・02
糸満市史 資料編 戦時資料・下巻-戦災記録・体験談-			
付図:糸満市域の壕・ガマ位置図、字糸満の屋号地図	糸満市史編集委員会	糸満市役所	1998・11
泉州目連傀儡にもとづく日中文化の諸相			
〈泉州目連傀儡〉関連状況調査研究会論文集	細井尚子・山本宏子	日本「目連傀儡」研究会	1997・12
泉州傀儡芸術概述	黄 少龍	中国戯劇出版社	1998・10
作家筆下の泉州	洪 輝煌	鷺江出版社	1998・10
沖永良部島の言語文化	先田 光演	先田 光演	1998・10
首里城正殿の建築に付随する彫刻の意匠としての解明	西村 貞雄	西村 貞雄	1998・03
伊礼伊森原遺跡・嘉手納(7)貯油施設建設工事に伴う文化財発掘調査報告-			
〈北谷町文化財調査報告書第18集〉	北谷町教育委員会	北谷町教育委員会	1998・03
大里城跡-都市公園計画に係わる緊急確認発掘調査報告書(1)-	大里村教育委員会	大里村教育委員会	1998・03
民族と宗教 第31号(キリスト教文化研究所研究年報)	宮城学院女子大学	宮城学院女子大学	1998・03
民俗文化 第422号	菅沼 晃次郎	滋賀民俗学会	1998・11
民俗文化 第423号	〃	〃	1998・12
民俗文化 第424号	〃	〃	1999・01
鹿児島県史料 旧記録録拾遺 伊知地季安著作史料集二	鹿児島県歴史資料センター黎明館	鹿児島県	1999・01
名桜大学紀要 第4号(平成10年度)	名桜大学	名桜大学	1998・12
伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者			
-近世墓の考古学的調査による家族復元-〈浦添市文化財調査研究報告書第25集〉	浦添市教育委員会	浦添市教育委員会	1997・03
美濟姓家譜系図・支流 六世濱川親雲上智包(写)			
父母記(咸豊四年記)			1854
父母記・七世濱川夫地頭上江洲智宗			1932
年忌御焼香日記・七世濱川夫地頭上江洲智宗			
大史氏家譜系図・支流 八世仲村渠親雲上道元			1953・01
勲功書(五代目)〈別題「勤書上江洲掟儀間筑登之」〉			

書名	編著者	発行者	発行年月
勲功書 八世儀間仁屋道宏			
文書にみる文明開化ー平成10年度第2回収蔵文書展ー	埼玉県立文書館	埼玉県立文書館	1999・02
30周年記念誌 かりまた	在沖狩俣郷友会30周年記念事業期成会	在沖狩俣郷友会30周年記念事業期成会	1999・01
沖縄戦研究Ⅱ	沖縄県公文書館史料編集室	沖縄県教育委員会	1999・02
沖縄大学図書館館報 南十字星	沖縄大学図書館	沖縄大学図書館	1998・12
青空教室からの出発ー戦後校舎のうつり変わり			
〈沖縄県史ビジュアル版3 戦後2〉	沖縄県公文書館史料編集室	沖縄県教育委員会	1999・01
琉球大学附属図書館報 びぶりお Vol.28 No.2	琉球大学附属図書館	琉球大学附属図書館	1995・04
琉球大学附属図書館報 びぶりお Vol.32 No.1	〃	〃	1999・01
旧琉球王国首里王城祭祀・久高島祭祀の祭場			
についての空間論的研究	伊従 勉	伊従 勉	1999・01
石垣市史叢書1 八重山島年来記	石垣市総務部市史編集室	石垣市役所	1999・02
豊見城村史だより 第4号	豊見城村史編さん室	豊見城村教育委員会	1999・01
具志川市史だより 第13号	具志川市史編さん室	具志川市教育委員会	1998・03
一般疎開 安村静日記ー一字天願から宮崎へー			
〈具志川市史編集資料11〉	〃	〃	1998・03
知られざる栄光ー渡慶次区民スポーツ史概論ー			
渡慶次区民運動会30周年を記念して	渡慶次体育振興会	渡慶次公民館	1999・02
沖縄から芸術を考える〈芸術文化学叢書1〉	沖縄県立芸術大学大学院芸術文化学		
	研究科	沖縄県立芸術大学	1998・03
安謝西原古墓群〈埋蔵文化財発掘調査ニュースNo.7〉	那覇市教育委員会	那覇市教育委員会	1998・03
銘苅古墓群(Ⅰ)ー那覇市新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘			
調査報告Vー〈那覇市文化財調査報告書第39集〉	〃	〃	1998・03
第5回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム(要旨集)	沖縄県公文書館	沖縄県教育委員会	1999・03
浦添市立図書館紀要 第10号	浦添市立図書館	浦添市教育委員会	1999・03
光緒十七年佐敷間切二あか元祖由来記写・城間			
村元祖由来記より写 (複写)	崎山筑登之親雲上嗣職	崎山筑登之親雲上嗣職	1891・09
上江洲家文書 俚約令写 (複写)	上江洲家	上江洲家	
第4回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム			
論文集	沖縄県公文書館史料編集室	沖縄県教育委員会	1999・03
歴史民俗資料学研究 第4号	神奈川大学大学院歴史民俗資料学	神奈川大学大学院歴史民俗資料学	
	研究科	研究科	1999・02
稚内市 第二巻	稚内市史編さん室	稚内市役所	1999・01
日本植民下の台湾と沖縄〈台湾文史叢書62〉	又吉盛清著・魏廷朝訳	前衛出版社	1997・12
地域総合研究 第26巻第2号	鹿児島経済大学地域総合研究所	鹿児島経済大学地域総合研究所	1999・03
沖縄毎日新聞見出集(上)ー1909年(明治42)			
2月～1910年(明治43)12月ー〈沖縄県史研究叢書5〉	沖縄県公文書館史料編集室	沖縄県教育委員会	1999・02
くがにんぐわ〜てだこのまちの子育て支援〜	浦添市民生委員・児童委員連絡協議会	浦添市民生委員・児童委員連絡協議会	1998・12

書名	編著者	発行者	発行年月
神山文庫目録〈沖縄県史研究叢書4〉	沖縄県公文書館史料編集室	沖縄県教育委員会	1999・03
沖縄の米軍及び自衛隊基地(統計資料集)	沖縄県総務部知事公室基地対策室	沖縄県総務部知事公室基地対策室	1999・03
沖縄国際大学日本語日本文学研究 第3巻第1号	沖縄国際大学文学部	沖縄国際大学文学部	1999・03
沖縄国際大学外国語研究 第3巻第1号	沖縄国際大学外国語学会	沖縄国際大学外国語学会	1998・06
川内市《城上町》の地域研究ー言語・文化・看護の視点からー	望月 通子	鹿児島純心女子大学	1998・05
日本のおとずれ神ー仮面来訪のしくみと意味ー(「知覧文化」第35号)	下野 敏見	知覧町立図書館	1998・03
薩摩内侍の源流を語る(「国際言語文化研究」第3号別刷)	〃	鹿児島純心女子大学	1997・02
屋久島「岳参り」の研究(「国際言語文化研究」第4号別刷)	〃	〃	1998・01
日本の森山信仰の研究(「国際言語文化研究」第5号別刷)	〃	〃	1999・01
沖縄大学図書館館報 南十字星 第22号	沖縄大学図書館	沖縄大学図書館	1996・04
きよらさ No.18〈浦添市美術館ニュース〉	浦添市美術館	浦添市美術館	1998・04
水道事業統計年報(平成7年度)	浦添市水道局	浦添市水道局	1996・03
名護・やんばるの酒(第15回企画展)	名護博物館	名護博物館	1998・10
名護博物館所蔵資料目録 歴史民俗資料(1)	〃	〃	1998・03
ぶりでい10号〈名護博物館年報・平成5年度〉	〃	〃	1995・01
ぶりでい11号〈名護博物館年報・平成6年度〉	〃	〃	1996・03
ぶりでい14号〈名護博物館年報・平成9年度〉	〃	〃	1998・09
新星沖縄百科シリーズ1 八重山小百科 石垣島	太平洋資源開発研究所	新星図書	1978・02
金武町海岸植物調査報告書	金武町教育委員会	金武町教育委員会	1996・03
統計うらそえ 第28号(平成7年度)	浦添市役所企画部広報公聴課	浦添市役所	1996・03
沖大法学 第17号	沖縄大学法学会	沖縄大学法学会	1996・03
沖縄法学 第28号 福里盛雄教授退職記念号	徳永 賢治	沖縄国際大学法学会	1999・03
沖大経済論叢 第18巻第2号(通巻45号)	沖縄大学経済学会	沖縄大学経済学会	1996・02
沖縄の農林業発展の条件ー21世紀への展望ー			
〈琉球大学放送公開講座16〉(テレビ講座)	琉球大学公開講座委員会	琉球大学学生部学生課	1993・09
復帰20年、沖縄はどう変わったか			
〈琉球大学放送公開講座17〉(ラジオ講座)	〃	〃	1993・09
沖縄芸術の科学 第8号〈沖縄県立芸術大学附属研究所紀要〉	沖縄県立芸術大学附属研究所	沖縄県立芸術大学附属研究所	1995・03
沖縄毎日新聞見出し集(中)ー1911年(明治44)1月～			
1912年(大正元)12月ー〈沖縄県史研究叢書6〉	沖縄県公文書館史料編集室	沖縄県教育委員会	1999・03
民俗文化 第426号	菅沼 晃次郎	滋賀民俗学会	1999・03
ゑけ大にし〈読谷村史だより第2号〉	読谷村史編集室	読谷村史編集室	1999・03
奄美の読書施設(平成10年度)	鹿児島県立図書館奄美分館	鹿児島県立図書館奄美分館	1999・02
ぶりでい子ども博物館(平成10年度)	名護市博物館	名護市博物館	1999・03
川内市歴史資料館年報(平成8年度)	川内市歴史資料館	川内市歴史資料館	1998・03
龍谷大学大宮図書館和漢古典籍分類目録(哲学・芸能之部)	龍谷大学大宮図書館	龍谷大学	1998・03
第6期ムラ・シマ講座 山原のムラ・シマを描く調査・記録ノート(平成10年度)	今帰仁村歴史文化センター	今帰仁村教育委員会	1999・02
沖大法学 第21号	沖縄大学法学会	沖縄大学法学会	1999・03

書 名	編 著 者	発 行 者	発行年月
沖大経済論叢 第21巻第1号 (通巻48号)	沖縄大学経済学会	沖縄大学経済学会	1999・03
鹿児島県史料 玉里島津家 史料八	鹿児島県歴史資料センター黎明館	鹿児島県	1999・01
沖縄近代文化年表ー1866～1945ー (琉文手帖4号)	新城 栄徳	琉文庵 (R A)	1999・05
沖縄県史 資料編8 自由移民名簿 近代2	沖縄県公文書館史料編集室	沖縄県教育委員会	1999・02
台湾今昔之旅 [台北篇] (台湾文史叢書55)	又吉盛清著・魏廷朝訳	前衛出版社	1997・09
神奈川大学評論 32	神奈川大学評論編集委員会	神奈川大学広報委員会	1999・03
沖縄大学図書館館報 南十字星 第28号	沖縄大学図書館	沖縄大学図書館	1999・04
琉球大学附属図書館報 びぶりお Vol.32 No.2	琉球大学附属図書館	琉球大学附属図書館	1999・04
法政大学沖縄文化研究所所報 第47号	法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所	1999・03
琉球の方言 23 (1998年度)	"	"	1999・03
沖縄文化研究 25	"	"	1999・03
上勢頭誌 下巻 長寿・人物編	上勢頭誌編集委員会	旧字上勢頭郷友会	1998・09
沖縄大学地域研究所所報 No.18	沖縄大学地域研究所	沖縄大学地域研究所	1999・03
沖縄大学地域研究所年報 No.12 (1998年度)	"	"	1999・03
歴代宝案研究 第10号	沖縄県公文書館史料編集室	沖縄県教育委員会	1999・03
歴代寶案 校訂本 第8冊 (第2集巻90～104)	"	"	1999・03
ベリーがやってきた～19世紀にやってきた異国人たち～ (沖縄県史ビジュアル版4 近世①)	"	"	1999・03
城間の昔ばなし (むかし城間シリーズ2)	城間字誌編集委員会	城間自治会	1999・03
沖縄医療史ー近世・近代編ー	稲福 盛輝	若夏社	1998・12
嶋袋全幸資料目録	名護市立中央図書館	名護市立中央図書館	1999・03
〔伝統的建築技法・技能継承事業〕 沖縄の伝統的な木造住宅調査報告書	沖縄県土木建築部	沖縄県土木建築部	1997・03
統計うらそえ 第31号 (平成10年度)	浦添市役所企画部企画課	浦添市役所	1999・03
自然環境の保全に関する指針 [八重山編]	沖縄県環境保健部自然保護課	沖縄県環境保健部自然保護課	1998・03
浦添市立図書館報 第15号	浦添市立図書館	浦添市立図書館	1999・02
沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館年報 1998	沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館	沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館	1999・03
われら千島・南樺太を放棄せず (国民会館叢書23)	渡邊 明	社団法人国民会館	1998・10
最近の教科書問題についてー教科書三十年裁判と最高裁判決ー (国民会館叢書22)	時野谷 滋	"	1998・09
「慰安婦」関係文獻目録	財団法人女性のためのアジア平和国民基金	(株)ぎょうせい	1997・09
名桜大学付属図書館報 ひろば No.8	名桜大学付属図書館	名桜大学付属図書館	1999・03
琉球大学経済研究 第57号	琉球大学法学部	琉球大学法学部	1999・03
千葉市稲毛区長沼町島田家文書仮目録	千葉県文書館	千葉県文書館	1999・03
台湾総督府 (台湾文史叢書27)	黄昭堂著・黄英哲訳	前衛出版社	1996・10
奄美の歴史とシマの民俗	先田 光演	図書出版まろうど社	1999・05
諸国叢書 第15輯	成城大学民俗学研究所	成城大学民俗学研究所	1999・02
民俗学研究所紀要 第23集	"	"	1999・03

書名	編著者	発行者	発行年月
民俗学研究所ニュース No.43	成城大学民俗学研究所	成城大学民俗学研究所	1999・01
民俗学研究所ニュース No.44	〃	〃	1999・04
真境名安興著「沖縄県土木史」〈沖縄県史研究叢書7〉	沖縄県公文書館史料編集室	沖縄県教育委員会	1999・03
平和の礎 軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦VI	平和祈念事業特別基金	平和祈念事業特別基金	1996・03
平和の礎 海外引揚者が語り継ぐ労苦VI	〃	〃	1996・03
平和の礎 シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦VI	〃	〃	1996・03
平和の礎 軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦VII	〃	〃	1997・03
平和の礎 海外引揚者が語り継ぐ労苦VII	〃	〃	1997・03
平和の礎 シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦VII	〃	〃	1997・03
平和の礎 軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦IX	〃	〃	1999・03
平和の礎 海外引揚者が語り継ぐ労苦IX	〃	〃	1999・03
平和の礎 シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦IX	〃	〃	1999・03
日本語の世界 9 沖縄の言葉	外間 守善	中央公論社	1981・06
沖縄県立博物館紀要 第25号	沖縄県立博物館	沖縄県立博物館	1999・03
法政大学沖縄文化研究所所報 第47号	法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所	1999・03
きよらさ No.22 〈浦添市美術館ニュース〉	浦添市美術館	浦添市美術館	1999・04
浦添市美術館紀要 第8号	〃	〃	1999・03
沖縄県史 資料編7 伊江親方日々記 近世1	沖縄県公文書館史料編集室	沖縄県教育委員会	1999・02
戦後の議会会議録集(1948年ー1958年) 第1集	西原町議会事務局	西原町議会	1993・03
戦後の議会会議録集(1959年ー1962年) 第2集	〃	〃	1997・03
戦後の議会会議録集(1963年ー1965年) 第3集	〃	〃	1999・01
西原町遺族会創立40周年記念誌(40年のあゆみ)	記念誌編集委員会	西原町遺族会	1995・06
人間科学 第3号〈琉球大学法文学部人間科学科紀要〉	琉球大学法文学部	琉球大学法文学部	1999・03
茅ヶ崎市史研究 23	茅ヶ崎市史編集委員会	茅ヶ崎市	1999・03
東風平町議会戦後五十年史 資料編	東風平町議会	東風平町議会	1996・03
史料編集室紀要 第24号	沖縄県公文書館史料編集室	沖縄県教育委員会	1999・03
うらそえ文芸 第4号	浦添市文化協会文芸部会編集委員会	星 雅彦	1996・04
村が語る沖縄の歴史ー歴博フォーラム			
「再発見・八重山の村」の記録ー	国立歴史民俗博物館	新人物往来社	1999・03
戦後沖縄県人三里塚開拓関係資料(複写製本)	浦添市立図書館	浦添市立図書館	1999・05
南洋情報 満五周年記念南洋群島特別号(複写製本)	〃	〃	1999・05
南洋情報特輯号「ダバオ」(複写)	鈴木 信弘	南洋通信社	1936・09
南風原町史 第2巻 自然・地理資料編	南風原町史編集委員会	南風原町	1997・12
南風の杜 第5号〈南風原文化センター紀要〉	南風原文化センター	南風原文化センター	1999・03
『戦時資料』関連座談会集(糸満市史研究資料8)	糸満市教育委員会総務部文化課	糸満市教育委員会総務部文化課	1999・05
具志川市史だより 第14号	具志川市史編さん室	具志川市史編さん室	1999・03
西原町の文化財	西原町教育委員会	西原町教育委員会	1998・03
竹富町史だより 第15号	竹富町史編集室	竹富町史編集室	1999・03

書 名	編 著 者	発 行 者	発行年月
つたの葉ー生活改善グループ40周年記念誌ー	中部地区農漁村生活研究会	中部地区農漁村生活研究会	1999・05
平良市総合博物館紀要 第6号	平良市総合博物館	平良市総合博物館	1999・03
沖縄・奄美の説話と伝承	東 喜望	株おうふう	1999・04
生活文化研究所年報 第12輯	ノートルダム清心女子大学生活文化研究所	ノートルダム清心女子大学生活文化研究所	1999・03
沖縄研究ノート8《共同研究》南島における民族と宗教	《共同研究》南島における民族と宗教	宮城学院女子大学キリスト教文化研究所	1999・03
沖縄キリスト教短期大学紀要 第27号	沖縄キリスト教短期大学	沖縄キリスト教短期大学	1998・12
大田沖縄県知事 1年のあゆみ	大田昌秀政経文化研究会	大田昌秀政経文化研究会	1991・12
竹富町の文化財	竹富町教育委員会	竹富町教育委員会	1998・03
琉球大学教官の講座・講演テーマデータベース	琉球大学生涯学習教育研究センター	琉球大学生涯学習教育研究センター	1999・03
Southern Review No.13	沖縄外国文学会	沖縄外国文学会	1998・12
民族と宗教 第32号(キリスト教文化研究所研究年報)	宮城学院女子大学キリスト教文化研究所	宮城学院女子大学キリスト教文化研究所	1999・03
神奈川県立公文書館紀要 第2号	神奈川県立公文書館	神奈川県立公文書館	1999・03
沖縄からの告発ーうないとして、人間としてー	桑江 テル子	ゆい出版	1999・05
沖縄の歴史情報 第1巻(CD-ROM版 10枚組)	岩崎 宏之	「沖縄の歴史情報研究」領域代表	1998
沖縄の歴史情報 第2巻(CD-ROM版 10枚組)	〃	〃	1998
沖縄の歴史情報 第3巻(CD-ROM版 10枚組)	〃	〃	1998
沖縄の歴史情報 第4巻(CD-ROM版 10枚組)	〃	〃	1998
沖縄の歴史情報 第5巻(CD-ROM版 10枚組)	〃	〃	1998
沖縄の歴史情報 第6巻(CD-ROM版 10枚組)	〃	〃	1998
沖縄の歴史情報 第7巻(CD-ROM版 10枚組)	〃	〃	1998
沖縄の歴史情報 第8巻(CD-ROM版 10枚組)	〃	〃	1998
沖縄の歴史情報 第9巻(CD-ROM版 10枚組)	〃	〃	1998
沖縄の歴史情報 第10巻(CD-ROM版 10枚組)	〃	〃	1998
沖縄県立農林学校同窓会会誌 第3号	沖縄県立農林学校同窓会	沖縄県立農林学校同窓会	1998・02
鹿児島県大島郡字検村倉木崎海底遺跡発掘調査 調査書〈字検村文化財調査調査書第2集〉	字検村教育委員会	字検村教育委員会	1999・03
平良市総合博物館年報 No.9	平良市総合博物館	平良市総合博物館	1999・03
鶯歌集〈柳川文化資料集成第1集〉	柳川市史編集委員会	柳川市	1998・03
沖縄歴史の見方について	高良 倉吉	宮古新報社	1999・02
沖縄の歴史ものがたり	沖教組同編集委員会	株日本標準	1980・02
捕虜になるまでー先生のとっておきの話3ー	沖縄・子どもと教師の文学の会	ポプラ社	1975・10
沖縄県立図書館蔵 宮古島旧記(複写製本)	浦添市立図書館	浦添市立図書館	1999・05
宮古島旧記 在番奉行筆者明有文長良(複写製本)	〃	〃	1999・05
II 沖縄県における文化施設の現状と課題	(財)南西地域産業活性化センター	(財)南西地域産業活性化センター	1999・03
首里城跡ー御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告ー 〈沖縄県文化財調査報告書第133集〉	沖縄県教育委員会	沖縄県教育委員会	1998・03
首里城跡ー南殿・北殿跡の遺構調査報告ー 〈沖縄県文化財調査報告書第120集〉	〃	〃	1995・03

書名	編著者	発行者	発行年月
民俗文化 第427号	菅沼 晃次郎	滋賀民俗学会	1999・04
民俗文化 第428号	〃	〃	1999・05
民俗文化 第429号	〃	〃	1999・06
兵庫のしおり 1	兵庫県県政資料室	兵庫県	1999・03
シマの見る夢ーおきなわ民俗学散歩ー	赤嶺 政信	(有)ボーダーインク	1998・04
シマー琉球大学民俗学実習調査報告書ー第1号			
沖縄県宮古郡多良間村仲筋・塩川地区	琉球大学法文学部人間科学科民俗研究室	琉球大学法文学部人間科学科民俗研究室	1999・03
児童福祉法制定50周年記念 戦後沖縄児童福祉史	沖縄県生活福祉部	沖縄県生活福祉部	1998・03
沖縄県史だより 第9号	沖縄県公文書館史料編集室	沖縄県公文書館史料編集室	1999・03
豊見城村の文化財	豊見城村教育委員会	豊見城村教育委員会	1999・03
久米島具志川村役所日記(写)・内間仁宏日記(写)(複写製本)	浦添市立図書館	浦添市立図書館	1999・05
我が国における農地相続慣行の地域性と重層性			
一鹿児島・沖縄からの視角ー(複写)	仲地 宗俊		1999・04
〈仮題〉伊禮正輝兵役日記(複写)	伊禮 正輝	伊禮 正輝	1942・02
思氏一門系統記(複写)	玉那覇 常盛	玉那覇 常盛	1947・07
感想文集 ひめゆり 第10号	ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館	1999・06
米国統治下の沖縄農地制度資料 第1巻	沖縄県農地制度資料集成編集委員会	沖縄県農林水産部	1994・03
復帰後の沖縄農地制度資料	〃	〃	1999・06
楊姓五世長堂家系図(簡易製本)	長堂 昌宏	長堂 昌宏	1956・11
楊姓六世長堂家系図(簡易製本)	長堂 昌宏	長堂 昌宏	1956・11
沖縄県立博物館年報 No.32	沖縄県立博物館	沖縄県立博物館	1999・07
ひめゆり平和祈念資料館 館報 第10号	ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館	1999・05
ひめゆり平和祈念資料館資料館だより 第23号	〃	〃	1999・05
浦添の歴史散歩	浦添市教育委員会	浦添市教育委員会	1998・07
東風平町史 戦争体験記	東風平町史編集委員会	東風平町役場	1999・03
東風平町史 戦争関係資料	〃	〃	1999・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第1号	滋賀大学経済学部附属史料館	滋賀大学経済学部附属史料館	1968・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第2号	〃	〃	1969・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第3号	〃	〃	1970・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第4号	〃	〃	1971・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第5号	〃	〃	1972・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第6号	〃	〃	1972・11
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第7号	〃	〃	1973・12
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第8号	〃	〃	1975・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第9号	〃	〃	1976・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第10号	〃	〃	1977・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第12号	〃	〃	1979・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第13号	〃	〃	1980・03

書 名	編 著 者	発 行 者	発行年月
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第14号	滋賀大学経済学部附属史料館	滋賀大学経済学部附属史料館	1981・02
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第15号	〃	〃	1982・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第16号	〃	〃	1983・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第17号	〃	〃	1984・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第19号	〃	〃	1986・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第20号	〃	〃	1987・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第21号	〃	〃	1988・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第22号	〃	〃	1988・09
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第23号	〃	〃	1989・09
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第24号	〃	〃	1990・12
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第25号	〃	〃	1992・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第26号	〃	〃	1993・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第27号	〃	〃	1994・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第28号	〃	〃	1995・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第29号	〃	〃	1996・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第30号	〃	〃	1997・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第31号	〃	〃	1998・03
滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 第32号	〃	〃	1999・03
大嶋神社・奥津嶋神社文書	〃	〃	1986・03
史料館概要	〃	〃	1998・10
滋賀県における鉄道の発展と地域社会 (図録)	〃	〃	1997・09
中世の村人たちの祈り (平成10年度企画展図録)	〃	〃	1998・10
琉球貿易図屏風 (解説パンフレット)	〃	〃	1999・05
文部省国文学研究資料館 (平成4年度)	国文学研究資料館	国文学研究資料館	1992
『国文学とコンピュータ』シンポジウム	〃	〃	1992・12
データベース利用の手引き	〃	〃	1992・01
よみがえる江戸時代絵巻 大名行列	徳島県立博物館	徳島県立博物館	1999・04
徳島県立博物館研究報告 第9号	〃	〃	1999・03
徳島県立博物館年報 第8号 (平成10年度)	〃	〃	1999・06
大多喜町下大多喜清水(友)家文書目録(上) (収蔵文書目録第11集)	千葉県文書館	千葉県文書館	1998・03
大多喜町下大多喜清水(友)家文書目録(下) (収蔵文書目録第12集)	〃	〃	1999・03
「日本」の国号と「日の丸」「君が代」について			
一国旗・国歌の法制化にむけて (国民会館叢書27)	田中 卓	社団法人国民会館	1999・07
省庁作成地図目録 I (収蔵地図目録第4集)	埼玉県立文書館	埼玉県立文書館	1999・03
榎本家・八塩家・勝音寺文書目録 (収蔵文書目録第38集)	埼玉県立文書館	埼玉県立文書館	1999・03
〔埼玉県立文書館〕要覧 第17号	〃	〃	1999・06
広島県立文書館だより 第13号	広島県立文書館	広島県立文書館	1999・03
民俗文化 第430号	菅沼 晃次郎	滋賀民俗学会	1999・07

書名	編著者	発行者	発行年月
文書館紀要 第12号	埼玉県立文書館	埼玉県立文書館	1999・03
神奈川大学評論 33	神奈川大学評論編集専門委員会	神奈川大学広報委員会	1999・07
特別展 三線のひろがり可能性展	沖縄県立博物館	沖縄県立博物館	1999・08
嘉陽誌	嘉陽誌編纂委員会	嘉陽区事務所	1999・04
久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究	横山 俊夫	京都大学人文科学研究所	1999・03
那覇女性史（近代編）なは・女のあしあと	那覇市総務部女性室	ドメス出版	1998・09
豊見城村の井泉及び御嶽・殿分布図	豊見城村教育委員会	豊見城村教育委員会	1987・11
沖縄国際大学日本語日本文学研究 第5号	沖縄国際大学文学部	沖縄国際大学文学部	1999・03
沖縄国際大学外国語研究 第3巻第2号	沖縄国際大学外国語学会	沖縄国際大学外国語学会	1999・03
琉亜医交流協会会報 第11号	琉球・アジア太平洋医学交流協会	琉球・アジア太平洋医学交流協会	1999・04
屋久久護家文書（名護市史資料編5・文献資料集別冊1）	名護市史編さん室	名護市教育委員会	1999・03
名護博物館紀要・6 あじまあ	名護博物館	名護博物館	1992・03
名護博物館紀要・7 あじまあ	〃	〃	1996・03
はくぶつかん（名護博物館だより29号）	〃	〃	1996・02
史料紹介・A.H.フット著下田・函館訪問記（『洋学史研究』第16号別刷）	長田 和之		1999・04
地域文化論叢 第2号	沖縄国際大学大学院地域文化研究科	沖縄国際大学大学院地域文化研究科	1999・03
総合学術研究紀要 第3巻第1号	沖縄国際大学総合学術学会	沖縄国際大学総合学術学会	1999・03
宿道 Vol.13 特集：沖縄芝居	沖縄建設弘済会	沖縄建設弘済会	1999・03
琉球藩尚泰の上京の意義 （『書陵部紀要』第50号抜刷）	川畑 恵	宮内庁書陵部	1999・03
近世初期における琉球王国の対薩摩外交 ―尚寧・尚温政権移行期をめぐって―（『琉球大学教育学部紀要』54集抜刷）	豊見山和行	琉球大学教育学部	1999・03
市史編さんだより 都城地域史研究 第5号	都城市立図書館市史編さん係	宮崎県都城市	1999・03
研究余滴 第5集（琉陽研究会発行）（複写製本）	浦添市立図書館	浦添市立図書館	1999・08
羽地家家之傳物語（複写製本）	〃	〃	1999・08
沖縄法政研究所 第2号	沖縄国際大学沖縄法政研究所	沖縄国際大学沖縄法政研究所	1998・10

【寄贈者名一覧（団体・個人）】（順不同）

喜界町図書館 沖縄県公文書館史料編集室 沖縄大学地域研究所 西郷南洲顕彰会 仲里村教育委員会
琉球アジア社会文化研究会 具志川村教育委員会 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所 滋賀民族学会
石垣市総務部市史編集室 柳川市史編集委員会 成城大学民俗研究所 沖縄県総務部知事公室基地対策室
読谷村立歴史民俗資料館 沖縄県立図書館 竹富町史編集室 琉球大学附属図書館 浦添市役所企画部
那覇市経済文化歴史資料室 石垣市役所（財）西日本文化協会福岡県地域史研究所 金武町教育委員会
大分県公文書館 琉球大学法文学部人間科学科 琉球大学法文学部国際文化学科 名桜大学企画・広報室

琉球大学法文学部 沖縄関係学研究会 ひめゆり平和祈念資料館 徳島県立博物館 福岡市総合図書館
 神奈川大学評論編集委員会 沖縄女子短期大学 北谷町教育委員会 泉州市木偶劇団 埼玉県立文書館
 中国泉州市友好訪日団 糸満市史編集委員会 名桜大学 大里村教育委員会 浦添市教育委員会文化課
 在沖狩俣郷友会30周年記念事業期成会 汲古書店 鹿児島県歴史資料センター黎明館 那覇市教育委員会
 豊見城村史編さん室 具志川市史編さん室 沖縄県公文書館 稚内市史編さん委員会 広島県立文書館
 浦添市民生委員・児童委員連絡協議会 宮城学院女子大学キリスト教文化研究所 沖縄国際大学外国語学会
 南風原文化センター 浦添市立図書館 沖縄県立芸術大学芸術文化学研究所 今帰仁村歴史文化センター
 沖縄国際大学沖縄法政研究所 鹿児島経済大学地域総合研究所 渡慶次公民館 琉球大学公開講座委員会
 沖縄大学法学会 沖縄国際大学法学会 沖縄大学経済学会 川内市歴史資料館 平和記念事業特別基金
 群馬県立文書館 太平洋資源開発研究所 沖縄県立芸術大学附属研究所 名護博物館 読谷村史編集室
 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所 浦添市役所水道部 浦添市美術館 沖縄県立芸術大学附属図書館
 法政大学沖縄文化研究所 旧字上勢頭郷友会 浦添市城間自治会 名護市立中央図書館 ㈱ぎょうせい
 沖縄県土木建築部住宅科 社団法人国民会館 千葉県文書館 名桜大学附属図書館 南風原町史編集室
 沖縄県環境保健部自然保護課 中央公論社 西原町議会 西原町遺族会 都城市立図書館市史編さん係
 沖縄県立博物館 茅ヶ崎市史編集委員会 北谷町史編集室 東風平町議会 中部地区農漁村生活研究会
 西原町教育委員会 国立歴史民俗博物館 糸満市教育委員会総務部文化課 「沖縄の歴史情報」領域代表
 平良市総合博物館 ノートルダム清心女子大学生生活文化研究所 国文学研究資料館 名護市嘉陽区事務所
 沖縄国際大学大学院地域文化研究科 沖縄キリスト教短期大学 竹富町教育委員会 神奈川県立公文書館
 社団法人南西地域産業活性化センター 兵庫県県政資料館 沖縄県生活福祉部 社団法人沖縄建設弘済会
 沖縄県地割制度資料集成編集委員会・沖縄県農林水産部 那覇市総務部女性室 沖縄国際大学総合学会
 沖縄外国文学会 琉球大学法文学部人間科学科民俗研究室 宇検村教育委員会 大田昌秀政経文化研究会
 琉球・アジア太平洋医学交流協会 埼玉県立文書館 滋賀大学経済学部附属史料館 沖縄国際大学文学部
 京都大学人文科学研究所 琉球大学生涯学習教育研究センター 沖縄国際大学外国語学会 糸満市役所
 東風平町史編集委員会
 川畑恵 福岡且洋 小島瓊禮 金城聡子 岩崎宏之 先田光演 西村貞雄 玉木順彦 吉浜巖
 島尻克美 下野敏見 都築晶子 新城栄徳 神谷明德 稲福盛輝 星雅彦 東喜望 比嘉広司
 岡本恵昭 阿波根直孝 桑江テル子 玉那覇常盛 津嘉山輝一 野原千明 又吉盛清 長間安彦
 安里進 謝敷真起子 栗野慎一郎

軍用地と軍作業から見る戦後初期の沖縄社会 ～1940年代後半の「基地問題」～

鳥山 淳

はじめに

米国統治下の沖縄社会の特徴を考える時、そこで最も大きな比重を占めることになるのが、米軍基地と住民との関係であろう。沖縄戦の渦中から、米軍は住民を収容所に隔離して基地建設を進め、戦後も土地の占拠を続けた。1950年代になると、軍用地問題をめぐる「島ぐるみ闘争」が高揚し、その一方で米軍基地を中心とした新しい社会構造が強化されていく。そしてベトナム戦争、施政権返還を経て現在に至るまで、米軍基地は沖縄社会の有りようを根底で規定し続けている。

しかし、米軍基地と住民との関係の起点となる、沖縄戦の後の数年間については、これまでの研究で十分に言及されているとはいえない。代表的な例として、新崎盛暉『沖縄戦後史』、琉球銀行調査部編『戦後沖縄経済史』を挙げると、両書ともに軍用地問題の「発生」過程を1950年前後から記述している⁽¹⁾。問題が政治的争点として浮上する過程を描くという点では、そのアプローチは誤りではないであろう。しかしそれ以前から、住民たちにとっての軍用地問題は歴然と存在していたのであり、すでに戦後の沖縄社会は、米軍基地を中心とした構造を余儀なくされていたのである。1950年代から争点となっていく様々な問題を検討するためにも、その基本的な構造を形作った戦後の数年間を捨象することは出来ない。その時期から積み重ねられた軍事占領の不条理を拒絶するために、やがて様々な運動がわき起こってくるのである。

もとより、1940年代後半の沖縄社会を描

き出すことは容易ではない。本稿で提示できる内容は、それには程遠いものである。ただ俯瞰的な展望を示したにすぎず、各地域の具体的な様相にはほとんど踏み込めていないことを予めお断りしておきたい。

なお本稿では、当時の社会状況を知るための一つの手がかりとして、米軍政府などが作成した統計資料を多数引用している。しかしその内容についての批判的な検討は、今後の課題とせざるを得ない。本稿がそのための叩き台となれば幸いである。

1. 基地建設と住民の隔離

1944年3月に創設された沖縄守備軍の指揮の下、沖縄では「全島要塞化」に向けた飛行場・陣地の建設、住民の動員と疎開が進んだ。沖縄本島には7つの飛行場が建設され（県内全域で計15ヶ所）、多数の住民が守備軍の末端に配置されるなかで、沖縄戦を迎える⁽²⁾。そして地上戦のなかで、戦前の沖縄社会は、物理的にも崩壊していった。

その結果、上陸した米軍は、すぐさま膨大な数の戦場難民に遭遇することになった。米軍による保護住民数は、4月末時点で11万人、首里が陥落した5月末には14万人であったが、日本軍の組織的抵抗が崩壊した6月末には28万人へと倍増し、7月末には32万人に達した⁽³⁾。

沖縄戦が開始された当初から、米軍は占領地域の住民を集団作業へと動員した。4月1日の上陸直後に占領された本島中部では、4月上旬から住民が、米兵の戦死体埋葬、物資

荷揚げ作業、嘉手納飛行場周辺集落での衛生対策（マラリア対策としての水たまり除去）などの作業に動員された⁽⁴⁾。5月には1日あたり600人から1,700人の住民が動員されたと報告されている⁽⁵⁾。住民動員数は6月一ヶ月間の延べ人数で7万6千人となり、その数は7月には15万5千人へと倍増した⁽⁶⁾。その際に米軍が設定した住民動員の優先順位は、飛行場建設、疫病予防、荷卸・貯蔵作業、医療業務、道路などの建設作業の順であった⁽⁷⁾。そのことが示しているように、日本本土侵攻作戦に向けて、本島中南部では大規模な基地建設工事が進められていた。

「沖縄におけるあらゆる建築物の徹底的な破壊は、基地建設計画によって加速された。高速道路網、B29を含む全ての飛行機に対応できる多数の飛行場、物資と弾薬の貯蔵区、そして野営地と軍事施設は、全ての村落の破壊を必要とした。（略）道路および軍事施設用地を整地するために、ブルドーザーは日本人の家並を文字通り駆け抜けて、長い年月をかけて作られた家々をほんの数秒で破壊してしまった。」⁽⁸⁾

基地建設工事を進めるために、米軍は住民を北部の収容所へと移動させた。

表1 1945年7月の人口分布の比較⁽⁹⁾

＜中南部の収容所＞	7/11	7/31
玉城・新里	36,000	24,000
野嵩・安谷屋・喜舎場	22,000	12,500
コザ・島袋	16,000	11,500
桃原・具志川	41,500	42,000
計	115,500	90,000
＜石川以北の収容所＞	7/11	7/31
石川	23,500	24,500
田井等	36,000	64,500
宜野座	83,500	117,700
計	143,000	206,700

その結果、日本軍の組織的抵抗が終了して以降も、中南部の収容所の人口は減少していき、逆に石川以北では大幅に増加した（表1）。

戦場での彷徨の後に、収容所へと送られる人々の目に映った故郷の光景は、どのようなものだったのであろうか。仲宗根政善は、本島最南部から野嵩の収容所へと移動した時の様子を、次のように語っている。

「そこへ行く途中、はじめて那覇の廃墟から首里の惨状を見たんです。それこそ、本当に驚きました。まっ白になって、まるで雪山のようなんです。それに丘も低くなってしまって、地形もすっかり変わって、全く見当がつきませんでした。その惨状を見て、沖縄戦はいかに悲惨な戦争であったかを、つくづく実感しました……。それから、ずっと大きな道ができておりましてね、どこに向かっているのか見当がつきませんでした。やがて松並木の枯れているのが見えまして、普天間だなと気がついたんです。」⁽¹⁰⁾

住民たちは、生活物資を米軍から配給される一方で、軍監督下での共同作業に従事していた。「予め可動者の調査を行い之れを登録し各人に登録カードを交付しておく。軍及び各部からの要求の人員を割当てる（略）物資の荷揚、電気、病院、道路の開墾修理、水道の敷設、公舎家屋の新築、茅葺用茅の集荷等労務の提供によらないものはない」⁽¹¹⁾というように、労務は多岐にわたった。「地区隊長よりの指示に基づき、農耕作業班が編成され（略）日がな一日戦禍で荒廃した田畑の開拓に没頭するようになった」⁽¹²⁾という地区もあれば、比較的軍事施設に近かった石川の収容所では、軍部隊への労働力の供給が重要な任務となり、「朝になると警察署前の広場には軍作業員が何千人となく集合し、各種の車が、ポスト前からはいつてきて、作業員を乗せて部隊に運んでいった」⁽¹³⁾という光景が繰り返された。

やがて米軍は、住民統治機構として、沖縄諮詢会を設立する。石川の民間人収容所において第1回仮沖縄諮詢会が開かれたのは、奇しくも8月15日であった。その際に発表された軍政府の声明文は、「戦争遂行上の必要は本島の面積の大部分を農産面より撤去し、少なくとも戦時中は多数の住民を従来人口の希薄にして住民を収容するには狭隘にして、肥沃ならず、且つ充分なる居住施設なき区域に移転することを余儀なくした。この事態に関連して起こる問題こそ軍政府及び住民の今後直面する問題の主要なるものである」と述べている⁽¹⁴⁾。当初から恒久的な軍政地域として割り当てられたのは、沖縄本島の10%にすぎず⁽¹⁵⁾、日本の降伏後も、その状況は容易には変化しなかった。住民は依然として収容所での集住を強いられており、10月10日時点で、当時の沖縄本島の人口約32万人の78%にあたる約25万人は、石川以北の収容所で生活していた（表2）。前掲の7月末の統計（表1）と比較すると、中南部の人口は2万人以上減少し、石川以北の人口は4万人以上増加した。

表2 1945年10月の人口分布⁽¹⁶⁾

中南部		石川以北	
知念市	17,914	石川市	23,033
古謝市	10,286	漢那市	27,661
前原市	40,183	宜野座市	37,036
		古知屋市	19,194
		久志市	29,027
		瀬嵩市	28,680
		田井等市	55,266
		辺土名市	29,497
計	68,383	計	249,394

2. 帰郷と軍用地

ようやく収容所からの帰郷が開始されたのは、10月下旬であった。当初の計画では、移動後の石川以北の北部人口は11万、それ

に対して中南部は20万人であり⁽¹⁷⁾、先に示した10月10日時点での人口分布と比較すれば、約13万5千人が中南部に流入するはずであった。しかし米軍は本島中南部において、住民が帰郷するはずの土地の多くを占拠したままであった。「陸軍・海軍ともに恒久的な軍事施設用地として広大な土地を確保し、隣接地域でさえも、帰郷する住民に開放することを渋って」おり⁽¹⁸⁾、軍用道路6号線（東恩納～仲泊）以南の地域で当初から再定住に開放されたのは、28,500エーカーのみであった⁽¹⁹⁾。日本降伏後に作成された基地建設プランでは、陸軍が本島の7つの飛行場（ボロ・普天間・嘉手納・牧港・本部・那覇・読谷）と伊江島飛行場、海軍が3つの飛行場（泡瀬・与那原・金武）を確保する計画であり⁽²⁰⁾、さらに「恒久部隊のための戦後計画」に沿って住宅・道路・倉庫などの建設が始まっていく⁽²¹⁾。

その結果、「翌年1月1日までには元の家かその集落に戻れるだろう」⁽²²⁾という見通しの下で開始された再定住は捗らず、翌46年1月になっても、出身地村がある軍政地区への移動を果たせないでいる住民は、12万人以上にのぼった⁽²³⁾。米軍の統計によって、46年1月時点での各軍政地区の人口を戦前と比較すると、那覇を含む糸満地区と、北谷・読谷を含むコザ地区の人口が大幅に減少したままであることが分かる（表3）。

表3 地区別人口の戦前・戦後の比較⁽²⁴⁾

軍政地区	1940	1946.1
知念	55,298	34,677
糸満	144,218	17,433
コザ	89,599	17,755
前原	34,628	48,690
石川	21,532	32,939
宜野座	12,395	83,471
田井等	78,011	98,686
計	435,681	333,651

そして、移動を待つ12万人のうちの大半は、糸満地区とコザ地区の出身者であり、(表4)のように各地の収容所で生活していた。

軍事施設に指定された地域への再定住は、その後も難航した。46年3月の時点で、出身地がある軍政地区に戻れない住民は8万人弱になったが、その過半数を那覇出身の1万9千人・北谷出身の1万人・読谷出身の1万2千人が占め、「定住地のない人々」として、(表5)のように各地の収容所に留まっていた。

表4 糸満・コザ地区出身者の離散状況 (25)

軍政地区	糸満地区出身者	コザ地区出身者
知念	3,892	3,420
糸満	-	0
コザ	3,603	-
前原	2,431	10,129
石川	6,000	7,225
宜野座	24,338	30,139
田井等	13,286	4,145
計	53,550	55,058

表5 那覇・北谷・読谷出身者の離散状況 (26)

軍政地区	那覇出身者	北谷出身者	読谷出身者
知念	729	93	18
コザ	759	-	-
前原	2,180	1,391	293
石川	3,678	1,800	7,181
宜野座	6,577	6,244	3,824
田井等	4,961	1,016	827
計	18,984	10,544	12,153

しかも8万人弱という数字には、出身集落に隣接する開放地で仮の定住生活を送っている人々は、含まれていない。46年4月の軍政報告書は、戦前の居住地に戻れない住民は13万人、そのうちの6万人は出身村に戻ることさえも出来ていないとしている(27)。さらに、同年7月の報告にも、次のように記されている。

「10月31日から5月31日までの間の再定住の動きを見ると、13万8000人の住民が、出身集落がある地区に帰っている。しかしこのことは、かれらが出身集落に帰ったことを意味するわけではない。多くの場合、集落は姿を消し、米軍用地として使用されたままである。(略) いまなお元来の居住地から締め出されている人々は12万5000人にのぼっており、そこには那覇の2万2000人、読谷の1万3000人、北谷の1万2000人が含まれている。」(28)

3. 基地労働力への編入

中南部への再定住の遅れは、部隊要員の減少を住民の労働力によって補わなければならない米軍にとっても、不都合なものであった。1945年8月に25万人を超えた沖縄の米軍は、1年後の46年8月には2万人に減少し、48年8月には1万人にまで落ち込んでいく(29)。したがって、軍事施設が密集する地域に住民を再定住させることは、労働力を必要とする米軍の要請でもあった。当初から軍政府は、「陸軍が緊急に労働力を必要としていることが、陸軍管轄地域への再定住を妨害する方針を打破するための、決定的な要因になるであろう」という見通しを持っていた(30)。46年5月には、沖縄民政府に対して軍政官が次のように語っている。

「陸軍が北谷、読谷山が必要と云へば軍政府としても如何とすることは出来ない。

二つの都合のよい条件があった。

一、米国よりの輸入を減ずる必要がある。

それには住民に耕地を与へる。

一、軍としては労務者が必要である。それには住民部落がなければならない。」(31)

しかし住民の再定住が完了するまでは、大量の労働力供給は期待できず、当面米軍が労働力として頼ったのは日本軍捕虜であった。軍政報告書は次のように述べている。

「健全な男性労働力の割合は、全人口のわ

ずか9%にすぎない。(略) 1946年1月1日以降、住民の再定住は可能なかぎり迅速に進められたにもかかわらず、雇用先の部隊に徒歩で通える距離に住むようになった労働者は、ほとんどいなかった。(略) 最低限の技術を身につけた健全な男性労働力を十分に供給することが不可能だったため、戦闘が終結した当初から、しかるべき場所で約1万2000人の日本軍捕虜を使わなければならなかった。」(32)

駐留軍施設の工事が進められるなかで、「日本軍捕虜の労働を最大限に活用する」ことによって、工兵隊は要員の減少を補っており(33)、46年5月には、(表6)のような配置で日本軍捕虜の動員が行われていた。

表6 日本軍捕虜の作業配置 (34)

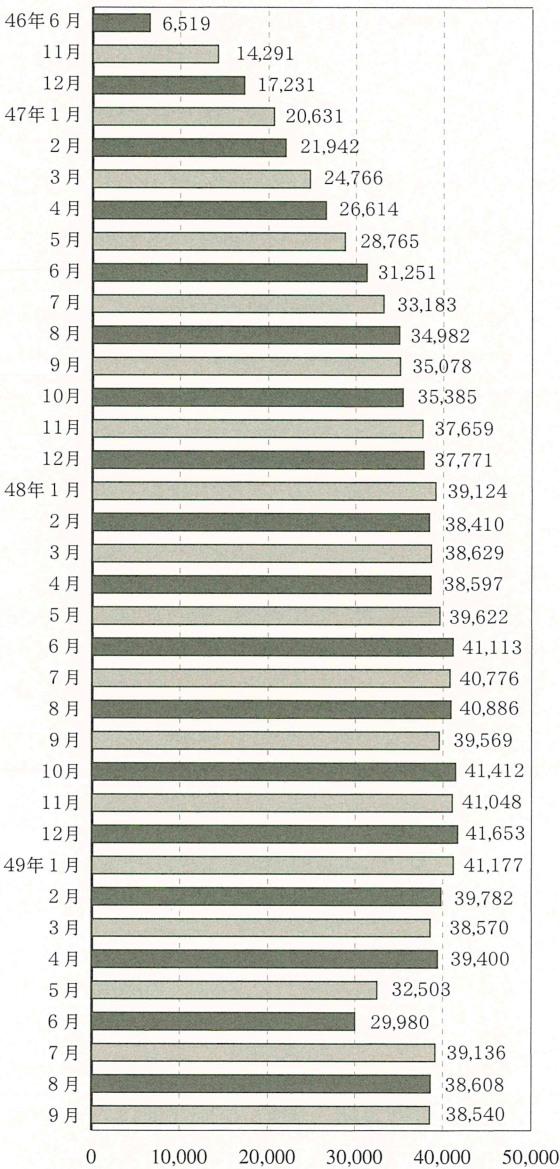
牧港	3,531
嘉手納	2,874
楚辺	2,075
奥武山	1,560
那覇飛行場 (小禄)	1,459
屋嘉	287
計 12,691 (入院139を含む)	

その結果、1946年7月に予定されていた日本軍捕虜の送還は延期され(35)、同月に軍作業に就いていた沖縄住民が6千人余りだったのに対し、日本軍捕虜は依然として1万2千人が使用されていた(36)。そのため捕虜の中には、「帰国遅延に対する不満」から「サボタージュ的態度」に出る者もいた(37)。

日本軍捕虜の動員が終了するのは、46年8月に日本本土からの沖縄住民の引き揚げが開始されて以降であった。同年末までに11万人が沖縄群島に引き上げて来るなかで(38)、日本軍捕虜にかわって沖縄住民が軍作業の主力になっていく。同年9月、最初の「現地人労務部隊」が発足し、泡瀬で米軍住宅の建築作業を開始した(39)。そして10月からは、日本軍捕

虜の復員が始まる(40)。それ以降、住民の軍作業への就業は増加を続け、1948年からは、一時期を除いて4万人前後で推移するようになる (グラフ1)。

グラフ1 軍作業員数の推移 (41)



4. 金武湾・みなと村と港湾作業隊

基地労働力としての再定住という関係が顕著に現れた例として、那覇市と北谷村の動きを見てみたい。

戦前商業・行政の中心地だった那覇は、那

覇港を中心に米軍の物資集積地帯となったため、旧市街地の開放は進まなかった。陶器生産の再開を目的に壺屋一帯が開放され、46年1月から移動が行われたが、「東は旧鉄道線路（元与儀停留場東北方）、西は元新県道を境界として延長五町に過ぎず、南北は米軍部隊（俗称、黒人屋敷）を背にして通行区域は僅かに四十間で（中略）四面悉く軍部隊が占め、占領軍が自由に部落附近を往行する」という状態で⁽⁴²⁾、多くの住民は北部での避難生活の継続を余儀なくされていた。その那覇出身者を中心にして形成されたのが、金武湾集落（現具志川市）である。

金武湾には、海軍棧橋のホワイト・ビーチや食糧倉庫に近いこともあって、1945年の末から港湾作業労働者が集められており、その中心は、戦前に那覇港で作業経験がある人々であった⁽⁴³⁾。1944年10月の空襲で那覇から焼け出された後、北部での生活を余儀なくされていた人々の中には、「金武湾に行ったらどうにか食べるのがあるじゃないかなと思って、金武湾への移動に飛びついた」というように⁽⁴⁴⁾、さしあたっての配給物資を求めて移動するものがいた。米軍にとってもそれは貴重な労働力であり、軍政報告書も「海軍の物資倉庫では依然として荷役労働者が不足しているが、前原地区金武湾からの荷役労働者によって幾分か緩和されている」と記している⁽⁴⁵⁾。

しかし金武湾に移ったのは、那覇出身者の一部でしかなかった。戦前の生業から切り離された人々の生活は逼迫し、軍政府に対して「軍作業地域を遠く離れた北方地区に在住して居る為労銀収入の途がない」那覇市民を「適当な軍作業へ就労せしむる様御願ひ致したい」とする請願もなされている⁽⁴⁶⁾。

その要望は、46年12月に那覇港湾作業隊が設置されたことによって、一部が実現することになる。同年11月下旬に軍政府から、「近く日本人捕虜の送還も完了する筈だから、

その補充として那覇港員の埠頭作業隊には沖縄人労務者をあてることに決めたから（略）凡そ三千乃至四千人で来春早々から活動出来るよう」要請がなされ⁽⁴⁷⁾、作業隊の編成が開始された。

港湾作業隊の創設によって、那覇出身者の移動も本格化する。当時の新聞は「一月六日迄に二一六人の隊員を編成して送り出し（略）家族二千余も本年三月頃までには那覇移動が約束されて」いるという明るい見通しを伝えている⁽⁴⁸⁾。そして47年5月には、作業隊とその家族の集住地域として、みなと村が発足した。みなと村は「那覇港作業の労務管理を円滑にし琉球軍司令部の企図する作業能率を増進すると共に併せて沖縄復興への促進を図る為軍政府の絶大なる御援助の下に誕生した特別なる村」⁽⁴⁹⁾とされ、48年3月の調査では、就業人口の85%にあたる約2,500人が軍作業員であった⁽⁵⁰⁾。そして村の人口の70%以上を那覇市出身者が占めていた⁽⁵¹⁾。

しかし、みなと村への移動が実現したといっても、それは那覇の復活には程遠いものであった。あくまでも住民たちは軍作業の労働力にすぎず、そこでの主人公は、圧倒的な物量をもった米軍であった。

「夜ともなると暗闇の中に各家にともるランプの灯がわびしかった。それにくらべて、楚辺の高台から見える那覇軍港のこうこうとした明るさがまぶしかった。うらやましいというよりも幻想的な光景として映った。」⁽⁵²⁾

一方、壺屋・牧志地区の住民たちの間でも、46年2月の「洗濯婦六名の求人」を皮切りに、「爾後QM、PX、那覇エンジニアと相次ぐ近在部隊からの募集毎に民作業を抛って軍作業に駛る者が殖え」たという⁽⁵³⁾。那覇には多くの部隊が駐屯しており（表7）、民間の経済活動が復活してくるまでの間、軍作業は大きな比率を占めていた（表8）。

表7 市町村別の駐留部隊数(1948年11月) (54)

那覇	24	北谷	6
宜野湾	9	浦添	5
具志川	9	勝連	4
読谷	7	嘉手納	4
越来	7	(以下略)	
		計	94

表8 那覇市の民作業・軍作業の推移 (55)

	民作業	軍作業	(人)
1946年末	396	60	
1947年末	665	1,032	
1948年末	2,201	1,190	
1949年末	3,276	545	
1950年末	*4,355	*1,591	*みなと村合併後

旧市街地の開放は遅れ、戦後5年が経過しても、旧那覇市面積141万坪（河川・港湾を含む）のうち73万坪は依然として軍用地であった(56)。その結果、開南から牧志にかけての闇市を中心に、新しい那覇の街が形成されることになったのである。

そして経済力や労働力に乏しい家庭は、依然として石川以北の地域にとどまっていた。1949年11月になっても、石川市に約4千名、宜野座村に約1千名など、計5,490名の「旧那覇人」が北部に残ったままであった(57)。

5. 北谷村民の帰郷

戦前肥沃な農耕地帯だった北谷村は、嘉手納飛行場をはじめとする軍事施設が集中し、帰郷は延期されたままであった。それに対して46年4月に軍政府に提出された陳情書は、甘藷・米の植え付け時期が迫っていることを訴え、「軍に使用されていない桑江・屋良には多くの林、畑、農地、水田がある」として、帰郷の許可を求めている(58)。村民が求めているのは、あくまでも農業の再開であった。

しかし、村民の帰郷が始まる以前に、北谷村を中心とする一帯は基地建設工事の舞台と

なっていく。同年10月に「北谷桑江の前一帯に永久的軍事基地建設」という計画が報じられ(59)、11月には瑞慶覧地区で工兵隊による建設作業が開始された(60)。

それとともに北谷一帯は軍作業の舞台となり、工事を請け負っていた建設会社A・J (Atkinson and Jones)カンパニーは、9月末の25人から12月末の2,327人へと急速に軍作業員を増やした(61)。

同地域での軍作業員の需要はその後も増加し、1947年1月の新聞では「瑞慶覧方面の軍事施設建設要員として沖縄人労務者千名を要求(略)コザ、泡瀬、嘉手納の住民が振向けられるが隊組織によらず通勤制になる模様」と伝えられている(62)。

基地建設工事の進展によって、かろうじて戦火を免れていた家屋・農地も破壊されていた。「テントの兵舎からコンセントに作り変えられたため、中勢頭原上勢頭原の農耕地、屋敷及び立木などは全部敷きならされ(略)戦災からまぬがれた十数軒の建物が米軍の手によって取りこわされた」(1946年)、「字玉上仲山原一帯の家屋は米軍人が沖縄人の作業人と共に焼きはらい(略)同時に果樹・立木等が焼かれた」(1947年1月)という作業が進んでいくのである(63)。

その一方で、ようやく村民の帰郷が開始されたのは、1947年2月であった。帰郷した住民が目当たりしたのは、「山野は敷均されて兵舎が建つし、新設の道路は四道八達する、電柱は林立する、といった調子で、山容も改り、村民が謝苅桃原に移動を許されて帰村する頃には、遠い外国にでも迷い込んだような錯覚を起す程、変り果てていた」(64)という故郷の光景であり、住民の居住が許されたのは、「戦前ならめったに足も踏み込まない山間地帯」(65)であった。

さらに、帰郷した住民たちの眼前でも、旧村落の破壊は続けられた。47年3月の新聞には、「近く桑江に聳えるビル 去る八日工事

着工」と報じられている(66)。そして、同年5月の時点では「家屋、畜舎、屋敷の立木、石垣、井戸、墓等全部落被害なし（略）畑の農作物の内甘藷は残っていた」という旧字桑江（桑村）の集落は、6月になると「米軍宿舎又は軍事施設の為、家・畜舎・立木・井戸・石垣・墓等を逐次取り除き又は解体」されていった(67)。

米軍施設の拡張によって、ついに北谷村は二分されることになった。1948年5月から、「嘉手納飛行場への立ち入りが全面禁止され、嘉手納区から桃原在の役場への通り道として利用していた道路が、遮断される形となった」ため、嘉手納から村役場までは「桑江、謝苅廻りで約十キロ、越來廻りになると四、五時間も要し(略)むしろ分村して独自の立場で村運営をすべきだ」という住民の世論が起きた結果、同年12月4日に旧北谷村は北谷村・嘉手納村へと分かれた(68)。

広大な軍用地は、村民の生活にも決定的な影響を与えた。帰郷した当初、一部の軍用地では農耕が許可され、「米軍が使っていない所は勝手に耕している」者もいたという(69)。しかし、「農作物を一回収穫したかどうかの時」に米軍に再接収され、耕地面積が戦前の14分の1程度にまで縮小されたなかでは、「せいぜい自活をわずかに潤す程度」にしかならなかった(70)。

農地を奪われた住民が現金収入を得る途は、まずもって軍作業であった。「はじめの頃は、米軍キャンプ内、北谷には家族部隊とか婦人部隊などもあって、そこでハウスポイやメイドなどの仕事を中心だった」(71)という。そして米軍物資の恩恵に与ることが出来る運転手や炊事職は羨望的となり、「子供たちに将来の希望を問いますと、“軍の炊事”が一番でしたね。その次が運転手で、兎に角、軍作業こそ選ぶべき職業」(72)という時代が到来したのである。

そして軍用地の開放が絶望的になるととも

に、軍作業に依存した生活が継続されることになる。1951年の北谷村と嘉手納村の職業構成は、(表9)のように報告されている。

表9 北谷村・嘉手納村の軍作業員数・農業従事者数（1951年）(73)

	軍作業員	農業従事者
北谷村	1,747	455
嘉手納村	1,121	410

6. 荒廃した耕地

北谷村に限らず、ほとんどの地域社会にとって最も重要な目標は、地上戦によって中断されていた農業の復興であった。宜野湾村長の桃原亀郎は、1948年3月の第1回村議会の冒頭で、次のように宣言している。

「真白く焼けた不毛の原野に、ツルハシを以て一鍬一鍬打ち下した村民の努力は報ひられて、今日では殆んど未開墾地解消の域に迄進んで参り、真白い村は此処に緑の農村に変わって来たのであります。」(74)

地上戦の後の「真白く焼けた不毛の原野」から、「緑の農村」へ。物質的・精神的痛手を背負った中で、その営みはいかなるものであったのだろうか。

米軍施設の存在は、「緑の農村」への道のりを各地で阻むことになる。米軍の見積もりによれば、戦前の沖縄本島の耕地9万2千a（エーカー）のうち6万5千aは軍用6号線（東恩納～仲泊）以南の中南部にあったが、その6万5千aの約61%にあたる4万aは、軍用地として占拠されたままであった(75)。その後軍用地の開放は徐々に進むものの、広大な耕地が占拠された状態は続いていく。47年9月の統計によれば（表10）、沖縄本島で再定住を許可された開放地は約26万5千aであり、残りの約4万3千aは、依然として軍用地であった（そのうちの6千aは農耕のみ許可）。

表10 軍用地の開放状況（1947年9月）(76)

沖縄本島総面積	307,648 a
再定住および農耕許可地	264,948 a
軍用地	42,700 a
{ そのうち農耕のみ許可地	6,485 a
{ " 一時的な再定住地	1,768 a

軍政府の統計をまとめると(77)、1947年中には計8,194aが開放され（農耕のみ許可地を含む）、再接収地は618aであった。48年は、開放地が計3,455a、再接収地が300aとなっている。しかし49年1～9月には、開放地が519aにとどまったのに対して、金武村で5,125aが再接収され、再接収地は計5,189aとなった。

一方、ようやく耕地が開放され、農業を再開した人々にとっても、耕地を復活させることは容易なことではなかった。まず人々が直面したのは、地上戦によって変わり果てた故郷の姿であった。

「沢峠の地に戻ってきた人々の驚きは、荒れた地肌と樹木のないこと、あれ程に松や雑木の茂っていた山も禿げた岩肌を出して、真夏の太陽に焼きつかれていた。沢峠の前原に転がった数台の米軍戦車の残骸。(略)眼下に広がる天久台地・銘苅平原にも数台の米軍戦車の残骸。兼元原から現在の神森中学校正門前から天願又を結ぶ米軍戦車の通過の跡にも戦車の残骸。

上沢峠山の北側台地にも、同様な戦車の残骸と荒らされた畑中に残る戦車の軌跡。遠く伊祖・浦添城跡この方、目に入る所すべて剥出しの地肌。ただ、あちこちに伸び放題のススキや茅などが、僅かに緑を示してくれていた。」(78)

1946年末の調査は、(表11)のように集計されている。耕地面積の激減ぶりとともに、激戦地となった中南部の「荒廃地」の多さを読み取ることが出来る。

表11 地域別耕地面積（1946年12月）(79)

	1940年耕地面積	現耕地面積	荒廃地面積
北部	108,628	47,982	8,319
中部	149,476	44,607	17,436
南部	108,021	47,339	25,928
計	366,125	139,928	51,683 (反)

ようやく農地に戻ることが出来た住民たちは、地上戦の残骸のなかで「荒廃地」を再生させていかなければならなかった。

「戦争中米軍の撃ち込んだ砲弾の破片や上陸後につかった葉きょう・戦車・大砲・トラック・飛行機の残骸は、宜野湾以南の至る所に放置され、住民が耕作をはじめには、これらのものを取り除かなければならなかった。比較的軽い葉きょうや砲弾の破片をまず取り除いて、畑の周囲や耕作に不適な山野などに山のように積み重ねてあった。しかし、重量の大きいものはどうすることもできず、戦車・ブルドーザーなどは畑のなかに放置されて、これらの残骸の周囲を耕作する状態であった。」(80)

「昔の宇座原の耕作が許され、昔の自分の畑を耕すのだが、戦車によって踏み荒され、畑が石みたいに固くなっていて、ツルハシでなければ耕せない状態で、『荒地アキーン』と云って、その姿には生き残った人々の逞しい『生』への息吹きがみなぎっていた。」(81)

そして戦後の農耕は、爆発物の危険と隣り合わせでもあった。農作業中に、「附近に在った器物を爆発物と知らずして鍬の修理に使用」して爆死、「埋没してある日本軍の地雷をあやまって鍬で打って爆発即死」といった事故も起こっている(82)。警察の統計で把握されている範囲でも、1946年に22万個、47年に23万個の爆発物が「発見」された(83)。

さらに、帰郷に際して、住民が弾薬撤去作業に動員された地域もあった。東風平村では、「米軍の南部戦線への兵站地として村内諸所

に、弾薬、戦車が集積されていたため、住民がそれぞれの部落に移動する先決要件として、先づ弾薬荒しの監視、弾薬撤去」を果たさなければならず、47年3月から1年以上にわたり、「生命の危険を賭して港川の海に、或は上原の爆破現場に、或は中頭方面への運搬、時には夜間作業を強行して、その撤去作業に従事」することになった(84)。米軍政府から「弾薬の片付に東風平は協力しないから注意を促されたい」と警告が発せられたこともあり(85)、「男子は自分の畑作業もしなければいけない事から、女性が弾薬撤去作業に参加する家庭もあった」という(86)。

隣接する高嶺村（現糸満市）でも、「全村的に米軍の弾薬集積所になっていたため、立入禁止となり」、46年7月から翌年11月まで弾薬撤去作業に従事している(87)。

1947年3月によりやく帰島が開始された伊江島では、48年8月に不発弾処理作業中の軍弾薬処理船が港で爆発して連絡船の乗客を巻き込み、村民60名を含む103名が死亡する事故が起きた(88)。

7. 演習と再接収

帰郷を果たした後も、一部の地域では米軍施設建設や演習などの理由で、再接収や住民立ち退きが行われた。

最後の激戦地となった真壁・摩文仁・喜屋武の三村は、戦闘の渦中で住民の45%が死亡し、村運営を維持するのが困難となったため、46年4月に共同で三和村を発足させ、戦後の歩みを始めた(89)。しかしそれから間もない46年8月には、「喜屋武の全部、摩文仁の一部は射的場になるから移転せよ」との命令が出されている(90)。そして住民が移動した後には、「米軍、特にフィリッピン人が中心になって、鉄帽と野戦軍服で身をかため、片手に小銃をもって米須前原、国道南側の屋敷内を歩きながら、演習していた」(91)という。この地域での演習は数ヶ月で終わり、

47年6月に「三和村は全地域へ帰還することが許された」のである(92)。

しかし、戦闘終了から約2年後によりやく始まった「戦後」の光景は、戦場の傷跡そのものであった。

「わたしが元のシマへ戻れたのは、二年もあとですよ。畑はみんな戦車で敷き均して、セメントみたいに固まった土に草がぼうぼうと生えてた。それを、ツルッパシで起こしたんですけどね、怖かったですよ。人間がいっぱい埋められていますでしょう。男も女も手榴弾持ってますからね。信管を引っかけたら爆発するんです。」(93)

三和村での演習終了とともに、今度は金武村での演習が問題となる。6月14日から「金武飛行場を中心に其附近一帯の農耕地並山林原野を米軍の練兵場及射的場に供する目的」で調査が始まり、危機感を抱いた住民からは、「農耕地は金武飛行場設置されし為め極度に激減せられたる上更に飛行場残存農耕不能の場合は全農耕地を失ひ金武、並里、喜瀬武原住民は到底生計維持困難」という訴えがなされている(94)。しかし軍政府の回答は、「軍が金武でなければならないと云ふことになると軍政府でも其以上は出来ない。喜屋武よりも人口は少ないのである」というもので(95)、8月1日には、「金武の演習は十日以後に開始す。収穫を早くさせられたい（略）演習期間中は絶対に人の立入を禁止す」として、演習の開始が宣告された(96)。

津堅島は爆撃演習の目標とされて上陸者には警告が発せられ(97)、48年11月には「土・日曜を除く外毎日」に「低空爆撃」の演習場となった(98)。

爆撃演習は残波岬周辺でも活発に行われ、「高射砲の演習や、ジェット機での実弾射撃演習は農耕を続けながらも生命の危険すら感じさせるもので、特にジェット機からの演習では岬に壊れた戦車やトラック等が標的に使われ、ボーロー飛行場から急降下し、宇座の

農耕地では耕作者の頭上から通過、標的めがけて投下される爆弾はものすごい爆音と震動であり、四キロ離れた高志保の住民地域まで響き窓ガラスが割れる程ひどかった」(99)という。

軍事施設に隣接した地域では、耕地の再接収や住民の立ち退きが発生した。那覇飛行場に農地の大半を接収されていた小禄村（現那覇市）では、更に47年11月になって耕地の一部に対して「金網に依る隔離、絶対立入禁止」の措置が取られ、「同耕地内の甘藷は十一月十日迄に全部堀取りを命ぜられ、石油タンク敷地の如きは僅々午前中で堀取れと命ぜられましたが、到底堀取れるものでなく、只々米軍のトラクターに依る地均しの迅速さを怨めしげに傍観するのみ」であった(100)。

読谷村の渡慶次・儀間地区では、47年によく帰郷を果たしたにもかかわらず、翌48年5月に立ち退き命令が出され、建築したばかりの住居を取りこわして移動しなければならなかった(101)。

本部飛行場の周辺では、集落に戻れない人々が「バラック小屋」を建てて生活していたが、48年12月になって弾薬集積のために飛行場周辺が立入禁止となり、「もはや農業で生きることが不可能となり、多くの人が安住と再生の道を求めて、次々と故郷を去って行った」という(102)。

多発する立ち退き命令に対して、同年末には沖縄民政府から軍政府に向けて、「陸空軍の使用地が未決定のため、屢々居住及耕作地の立退きがあって住民は困って居る。可及的速かに軍用地を明示して貰いたい」という要望が伝えられている(103)。しかし翌年6月に軍が発表した措置は、軍事施設から1マイル以内では一切の建築作業を厳禁するというものであった(104)。

故郷から引き離された人々の想いを先延ばしにしたまま、やがて沖縄は「太平洋の要石」へと変貌していくのである。

「なつかしき黄金の森は昔のごと吾を招けど今はオフリミツ」(105)

8. 「抵抗」の形態

かろうじて「鉄の暴風」を生き延びた住民たちにとって、占領者である米軍の権力は、圧倒的なものであっただろう。地上戦からの復興もままならない中で、その米軍に対する異議申し立ては、ほとんど絶望的であったに違いない。しかし人々は、ただ占領統治を黙認するだけの受動的な存在だったわけではない。米軍に翻弄され続けながら人々が行った「日常型の抵抗」(106)は、様々な形でその痕跡を残している。

当時の沖縄社会を語るうえで欠かせないのが、いわゆる「戦果」である。後に「忘れられた島」とまで呼ばれた劣悪な軍政の下で、「戦果」の獲得は住民が生き延びていくために必要不可欠であった。そこからは、最も原初的な「日常型の抵抗」のありようを読み取ることが出来る。

前述の金武湾にまつわる回想の中では、以下のような体験が語られている(107)。

「ライトをパチパチさせて『来るよ』って合図するんですよ。そしたら五、六名ぐらいが待機していて、エンジンを止めてパッと電気消して、すぐ具志川の畑の方にポンポン投げ降ろして（略）それでこれは各お家に配給するんですよ。」

「箱はローソクを塗られて真空パックみたいになっているから（略）海に流したら泡瀬か中城湾の辺りに流れ着くんですね。あの辺りの人達は、珍しく思ったはずよ、こんなのが流れ着くから。こういうのをいたずらぽっくやるんですね。誰かが必ず拾うはずと。」

「戦果」の恩恵を受けるのは、集落であったり、さらには不特定多数の「誰か」であったりする。そこでは、占領者と対峙する「われわれ」が、暗黙のうちに前提とされていた

のである(108)。

さらに、収容所からの移動後も米軍施設によって帰郷を果たせないでいた人々にとって、「戦果」の獲得は、より明白に米軍占領の不条理に対する抗いであった。農地の多くを軍事施設に占拠されていた小禄村では、金網によって農地から排除された住民たちが、その軍事施設から物資を持ち出していた。その営みは、次のように語られている。

「金網は米軍が張りましたが、ジープ一台やるかわりに、君が責任を持って、『戦果』されないように見張れと命ぜられました。私は米軍物資の集積所が、どこにあるかを知っているの、米兵がいない時を知らせて、みんなに『戦果』をあげさせました。物のない時代ですから、食料品だったらウィスキー、ビールなどはとらないで、食油、缶詰、米などをとりなさいと言い、ハシゴまでかけてやっつくくらいです。」(109)

その当時、まだ軍用地問題は政治的争点として登場していなかった。しかし、自分たちの農地や宅地を米軍に接収されていた人々は、その状態をただ黙認していたわけではない。当時の行政文書のなかには、執念深く土地を取り戻そうとする人々の営みの痕跡が、記されている。

「普天間飛行場は現在使用してなかったためか住民中には禁止地域内に立入するばかりでなく居住乃至農耕して居る者があり、或は滑走路や誘導路を使用したり又は一部破壊している者をよく機上より見受けるとの事で軍に於てはこれからこれらを監視し取締るとのことである。」(110)

米軍が使っていないと見るや滑走路であろうと使用し、さらにはそれを破壊して、その下にあるはずの自分たちの土地を蘇らせようとする営みが、そこでは開始されていた。1950年代後半の「島ぐるみ闘争」の源流は、すでに湧き出しはじめていたのである(111)。

1950年代へ まとめにかえて

米国の沖縄統治政策は、1948～49年にかけて、恒久基地建設・排他的保有に確定する。それは、「忘れられた島」から「太平洋の要石」への大規模な変容を意味した。それを受けて、停滞していた復興政策はようやく本格化し、那覇では旧市街地の開放が始まっていく。そしてその一方で、本島中部を中心に恒久的な軍事施設の建設が始まった。1950年6月末の『桃原亀郎日記』には、次のように記されている。

「中部一帯＝戦災の跡と言ふよりは、戦争
未だ終らずの感深く、戦前の
姿は此の地区では見られない
様だ。」(112)

大規模な基地建設工事が進むなかで、「戦前の姿」を回復することは、ますます絶望的となっていた。しかも土地を奪われた地主たちに対する補償は貧弱で、そのうえに伊江島・伊佐浜に代表される強権的な新規接収が強行されていくなか、ついに1956年6月から「島ぐるみ闘争」がわき起こるのである。

伊江島や伊佐浜での住民の執拗な抵抗は、「島ぐるみ闘争」の起爆剤となった。それまで蓄積されてきた米軍統治の不条理に対する怒りは、その起爆剤によって一気に噴出したのである。「プライス勧告」によって沖縄住民の要望が圧殺されたとき、新聞は次のような声を伝えている。

「これまでは軍用地になっている土地が自分のもとに返されるという幾分かの望みはあったが、もうこれでこのような望みは全くもてない。(略)私の頼りとするのはたゞこの土地だけで、一日も早く開放になるのを待ちわびていた。(略)一日も早く戦前のように自分の土地で農耕できるようにして下さい。」(113)

沖縄戦から10年以上にわたり底流として流れ続けていた土地への想いは、ついに表面に姿を現したのである。そこに至るまでの過

程を抜きにしては、以後の激動に迫ることは出来ないであろう。

〔注〕

はじめに

(1)新崎盛暉『沖縄戦後史』（日本評論社 1976年）
第3章、琉球銀行調査部編『戦後沖縄経済史』（琉球銀行 1984年）第VI章を参照。なお、聞き取りを中心として戦後初期の社会相を描いたものとして、石原昌家『大密貿易の時代』（晩聲社 1982年）、同『戦後沖縄の社会史』（ひるぎ社 1995年）がある。

1. 基地建設と住民の隔離

- (2)概要については、『沖縄戦研究II』（沖縄県教育委員会 1999年）所収の諸論文を参照。
- (3)上原正稔訳編『沖縄戦アメリカ軍戦時記録』（三一書房 1986年）407頁。
- (4)前掲『戦後沖縄の社会史』75～77頁。
- (5)Rehabilitation: Economic, p.69.（『沖縄戦後初期占領資料 PAPERS OF JAMES T. WATKINS IV』緑林堂書店 1994年、第87巻 278頁）
- (6)History of Military Government Operations on Okinawa, 1 July to 31 July 1945, p.14.（前掲『沖縄戦後初期占領資料』第11巻 14頁）
- (7)同上。
- (8)同第38巻 64頁。
- (9)Civilian Population Data.（同『沖縄戦後初期占領資料』第11巻 21頁）
当時の軍政文書では、軍用道路6号線（東恩納～仲泊）を境界として北部と南部を区別する統計が繰り返し現れるため、本稿もそれに従った。
- (10)新崎盛暉編『沖縄現代史への証言（下）』（沖縄タイムス社 1982年）179頁。
- (11)『地方自治七周年記念誌』（沖縄市町村長会 1955年）35頁。
- (12)同 25頁。
- (13)同 43頁。
- (14)『沖縄県史料 戦後1 沖縄諮詢会記録』（沖縄県教育委員会 1986年）13頁。

(15)Resettlement Program, Report on, 17 August 1945, p.2.（前掲『沖縄戦後初期占領資料』第38巻 91頁）

(16)仲宗根源和『沖縄から琉球へ』（月刊沖縄社 1973年）311頁。

2. 帰郷と軍用地

- (17)「ウルマ新報」1945年11月7日掲載の「市域と人口」より概算。
- (18)Report of Military Government Activities for Period from 1 April 1945 to 1 July 1946, p.7.（前掲『沖縄戦後初期占領資料』第12巻 124頁）
- (19)Report of Military Government Activities for December 1945, p.4.（同第11巻 112頁）
- (20)Okinawa Base Command Historical Report, 21 March 1946, pp.48-50.（沖縄県公文書館所蔵複写史料U00002099B「A-153 General, Okinawa Base Command Historical Report」）
- (21)Historical Record, Okinawa Base Command, December 1945, pp.6-8.（琉球大学附属図書館所蔵複写史料『占領初期米軍統治関係資料3 Okinawa Base Command (2)』）
- (22)Report of Military Government Activities for October 1945, p.4.（前掲『沖縄戦後初期占領資料』第11巻 84頁）
- (23)District Populations and Resettlement Progress, as of 1 January.（同38巻 123頁）
- (24)同上。
- (25)同上。なおこの統計には、同じ軍政地区内の仮の居住地で帰郷を待っている住民の数は含まれていない。（表5）についても同様。
- (26)Non-Resident Population, by Districts, 9 March 1946.（同第38巻 135頁）
- (27)Report of Military Government Activities for April 1946, p.7.（同第12巻 87頁）
- (28)Report of Military Government Activities for Period from 1 April 1945 to 1 July 1946, p.8.（同第12巻 125頁）

3. 基地労働力への編入

- (29) Arnold G. Fisch, Jr., "Military Government in the Ryukyu Islands, 1945-1950," Center of Military History, United States Army, Washington, D.C., 1988, p.74.
- (30) Report of Military Government Activities for January 1946, p.7. (前掲『沖縄戦後初期占領資料』第12巻 7頁)
- (31) 『沖縄県史料 戦後2 沖縄民政府記録1』(沖縄県教育委員会 1988年) 54頁。
- (32) Report of Military Government Activities for Period from 1 April 1945 to 1 July 1946, p.32. (前掲『沖縄戦後初期占領資料』第12巻 150頁)
- (33) Historical Record, Okinawa Base Command, January 1946, p.5. (前掲『占領初期米軍統治関係資料3』)
- (34) 「沖縄新聞」(捕虜収容所内発行) 1946年5月11日。
- (35) Rehabilitation: Economic, p.59. (前掲『沖縄戦後初期占領資料』第87巻 268頁)
- (36) Historical Record, Ryukyu Command, July 1946, p.11. (前掲『占領初期米軍統治関係資料3』)
- (37) 「沖縄新聞」1946年5月4日。
- (38) 『沖縄民政要覧 1946年』(沖縄民政府総務部調査課) 13頁。
- (39) Semi-Annual History, Okinawa Engineer District, 1 July through 31 December 1946, p.10. (沖縄県公文書館所蔵複写史料 U90005701B 「314.7, History 1946」)
- (40) 「沖縄新聞」1946年10月4日。
- (41) 1946年7月～1948年8月の数値は、Summation of United States Army Military Government Activities in the Ryukyu Island, No.1～No.12 (『沖縄県史資料編 9 現代1 (原文編) MILITARY GOVERNMENT ACTIVITIES REPORTS』沖縄県教育委員会 2000年に収録) より抜粋。1948年9月から1949年9月までの数値は、Summation, United States Army Military Government Activities in the Ryukyus, No.23 - No.35 (沖縄県公文書館所蔵マイクロフィルム U00000020B 「Administration of

the Ryukyu Islands (USCAR) Legal Department 227-01, publication recordset. -Washington. (R.No. 9)より抜粋。そのうちNo.32および No.33は欠落していたため、国立国会図書館憲政資料室所蔵マイクロフィルム「United States Administration of the Ryukyu Islands, 1946-1972」ARI-1 Reel.No.1によって補った。

4. 金武湾・みなと村と港湾作業隊

- (42) 『那覇市概観 1952年版』(那覇市役所 1952年) 54頁。
- (43) 「懐かしの金武湾時代を語る」『具志川市史だより第14号』(具志川市史編さん室 1999年) 68頁。
- (44) 同 62頁。
- (45) Report of Military Government Activities for January 1946, p.10. (前掲『沖縄戦後初期占領資料』第12巻10頁)
- (46) 「宜野座地区在住の那覇市民救済に関する請願書」(沖縄県公文書館所蔵琉球政府文書 R00000 456B 「諮詢委員会から沖縄民政府までの文書及メモ 5-1 No.1 1946年」)
- (47) 「うるま新報」1946年11月22日。
- (48) 同1947年2月7日。
- (49) 盛根良一編『みなと村の歩み<資料編>』(1982年) 3頁。
- (50) 同 15頁の「業態一覧表」より算出。
- (51) 同 12頁の「各市町村出身別人口比較表」より算出。なお、みなと村は、1950年8月1日付で那覇市と合併した。
- (52) 『消えた学校』(みなと・城岳中等学校同窓会1998年) 156～157頁。
- (53) 前掲『那覇市概観 1952年版』55頁。
- (54) 「軍部隊所在地地図」『琉球史料 第5集』(琉球政府文教局 1959年) 146～147頁より作成。
- (55) 前掲『那覇市概観 1952年版』55～56頁より作成。
- (56) 同 82～87頁。
- (57) 「被救済者の移動に就て」(沖縄県公文書館所蔵琉球政府文書R00000439B 「沖縄民政府当時の

軍指令及一般文書 5-5 No.5 1949年」)

5. 北谷村民の帰郷

- (58)Resettlement to Chatan-son - A Petition for, April 20,1946. (沖縄県公文書館所蔵琉球政府文書 R00165446B「対米国民政府往復文書(受領文書) 1946年」)
- (59)「うるま新報」1946年10月18日。
- (60)前掲 Semi-Annual History, Okinawa Engineer District, 1 July through 31 December 1946, p.11.
- (61)同 p.13.
- (62)「うるま新報」1947年1月3日。
- (63)『基地と北谷町』(北谷町役場企画室 1984年) 10、12頁。
- (64)前掲『地方自治七周年記念誌』488頁。
- (65)『北谷町史 第6巻 資料編5 北谷の戦後』(北谷町役場 1988年) 257頁。
- (66)「うるま新報」1947年3月14日。
- (67)前掲『基地と北谷町』11頁。
- (68)前掲『北谷町史 第6巻』41～42頁。
- (69)『上勢頭誌 中巻 通史編 (II)』(旧字上勢頭郷友会 1993年) 693頁。
- (70)前掲『北谷町史 第6巻』236～237頁。
- (71)同 259頁。
- (72)前掲『上勢頭誌 中巻 通史編 (II)』695頁。
- (73)沖縄県公文書館史料編集室所蔵複写史料「一九五一年 チャップマン大佐各市町村の行政視察に関する書類綴」より抜粋。

6. 荒廃した耕地

- (74)『宜野湾市史別冊 戦後初期の宜野湾 桃原亀郎日記』(宜野湾市教育委員会文化課 1997年) 79頁。
- (75)Land and Population on Okinawa -- A Staff Study, 16 May 1946, p.1. (前掲『沖縄戦後初期占領資料』第38巻 141頁)
- (76)Summation of United States Army Military Government Activities in the Ryukyu Island No.7, September-October 1947, p.61 (前掲『沖縄県史料編 9 現代1 (原文編)』429頁) の統計を基

礎に作成。本島総面積は、Land and Population on Okinawa -- A Staff Study, 16 May 1946, p.1 (前掲『沖縄戦後初期占領資料』第38巻 141頁) による。

- (77)依拠した史料は注(41)と同様。
- (78)『字誌たくし』(沢岬字誌編集委員会 1996年) 284～285頁。
- (79)前掲『沖縄民政要覧』57～58頁より抜粋して集計。ただし那覇市・首里市の面積は判読困難なため含まれていない。
- (80)『ぎのわん 字宜野湾郷友会誌』(字宜野湾郷友会 1988年) 682頁。
- (81)『残波の里 字座誌』(字座区公民館 1974年) 333頁。
- (82)「ウルマ新報」1946年3月6日、および「うるま新報」1947年6月20日。
- (83)前掲『琉球史料 第5集』103頁。
- (84)前掲『地方自治七周年記念誌』401頁。
- (85)前掲『沖縄県史料 戦後2 沖縄民政府記録1』475頁。
- (86)『東風平町史 -戦争体験記-』(東風平町 1999年) 772頁。
- (87)『沖縄風土記全集 第2巻 糸満町編』(沖縄風土記刊行会 1967年) 34～35頁。
- (88)「うるま新報」1948年8月27日。『伊江島の戦中・戦後体験記録』(伊江村教育委員会 1999年) も参照。

7. 演習と再接収

- (89)前掲『沖縄風土記全集 第2巻 糸満町編』35頁。
- (90)前掲『沖縄県史料 戦後2 沖縄民政府記録1』175頁。
- (91)『米須字誌』(字米須 1992年) 510頁。
- (92)前掲『沖縄県史料 戦後2 沖縄民政府記録1』367頁。
- (93)真尾悦子『いくさ世を生きて』(ちくま文庫 1986年) 218頁。
- (94)「米軍練兵場設置中止方に関する件」(沖縄県公文書館所蔵琉球政府文書R00000490B「陳情書 1 1946年10月～1949年5月 知事官房秘書

課)」

- (95)前掲『沖縄県史料 戦後2 沖縄民政府記録1』
373頁。
- (96)同 411頁。
- (97)「うるま新報」1948年8月27日。
- (98)『沖縄県史料 戦後3 沖縄民政府記録2』（沖縄県教育委員会 1990年）93頁。
津堅島が開放されたのは、同年12月である（「うるま新報」12月17日）。
- (99)前掲『残波の里 宇座誌』58頁。
- (100)「食糧増配方に関する件」（前掲「陳情書1」）
- (101)『平和の炎 Vol.1』（読谷村役場 1988年）
23、74頁。
- (102)『結成20周年記念誌 恋し本部』（那覇市近郊在住本部町郷友会 1995年）117～118、136頁。
- (103)前掲『沖縄県史料 戦後3 沖縄民政府記録2』
123頁。
- (104)「うるま新報」1949年6月27日。
なお同年末には、その規制を近く大幅に緩和することが発表された（同12月15日）。
- (105)「心音」（「うるま新報」1949年1月24日。）

8.「抵抗」の形態

- (106)ジェームズ・C・スコット（藤原帰一訳）
「日常型の抵抗」坂本義和編『世界政治の構造
変動3発展』（岩波書店 1994年）。
- スコットは、「公に宣言することなく、こっそり隠れて、毎日続けられている下層階級による自発的抵抗の形態」として「日常型の抵抗」を定義し、その具体的な形態として「ただただ仕事、うそつき、面従腹背、空とぼけ、逃散、こそ泥、密猟、放火、金棒引き、さぼり、暴行や殺し、匿名の脅しなど」を挙げている（同150、152頁）。以下の例が示すように、1940年代後半の沖縄における米軍と住民の関係を考察する際に、その視点は有効であると思われる。
- (107)前掲「懐かしの金武湾時代を語る」65、66頁。
- (108)ただし、その「われわれ」の内部にも、抑

圧的な関係は存在する。「わしらみたいに、女や年寄りばかりで戦果をあげられない者は、みじめなもんでしたよ」（前掲『いくさ世を生きて』170頁）という戦後体験が忘却されてはならない。

- (109)「小禄の戦時・戦後体験座談会」『那覇市史資料編第3巻8 市民の戦時・戦後体験記2』（那覇市企画部市史編集室 1981年）154～155頁。
- (110)「飛行場内住民立入禁止について」（沖縄県公文書館所蔵琉球政府文書R00020584B「禁止命令（1947年～1948年12月）住民立退」）
- (111)若林千代は、この時期に行われている陳情・請願活動を、軍用地問題をめぐる「闘争以前の闘争」として提示し、そこから「日常的な抵抗」を想像しなければならないと論じている（若林千代『『オフ・リミッツ』の島』『現代思想』1999年3月号、28頁）。筆者はその指摘に同意しつつ、それに加えて、スコットが「日常型の抵抗」として提示したような、意志表示を伴わない「抵抗」を視野に入れる必要があると考えている。

1950年代へ まとめにかえて

- (112)前掲『宜野湾市史別冊 戦後初期の宜野湾 桃原亀郎日記』155頁。
- (113)「琉球新報」1956年6月16日。

引揚げと収容所からの出発

伊 敷 勝 美

はじめに

雄飛、避難、疎開、そして引き揚げの中から

日本の最南端にあって、北の日本本土、南の東南アジア、西の中国大陸、そして東の太平洋を結ぶ十字路の結節点に位置する沖縄県は、古くから人と物資が活発に往来する場となり、じつに数多くの県民が海外へ雄飛、あるいは流出していった。15世紀から16世紀には明朝の海禁政策に乗じて壮大な交易ルートを形成し、また第一次世界大戦後の世界恐慌による経済的貧困は、日本本土へ労働出稼者を輩出した。さらに日本の移民全体の約11%をしめる程の大量の人口流出をもたらし、国内でも有数の移民県であったことは改めていうまでもなかろう。加えて、戦時中には、軍人・軍属としてアジア各地、日本本土へ旅立った若者が多かったことも記憶に新しいところである。

このことは、同時に県内外や国外でいろいろな苦難の道と県民が遭遇することも意味していた。渡唐役として大陸へ渡り異郷の土と化した人たち、移民先で略奪・暴行・苦役等あらゆる困難と出くわした人々。そして戦時下の沖縄では、身の安全を求めて食糧難やマラリアの待ち受ける北部の山間部等への避難を余儀なくされた住民たち、政府命令により九州や台湾などへ渡った疎開学童や一般疎開者の中には、敵艦の犠牲になった方々もいた。また、数ヵ月にも及ぶ「鉄の暴風」にさらされた沖縄では、十数万人の県民の生命が失われ、約42万人の難民は各収容所などに収容されて軍政下の戦後生活をスタートした。そし

て、県民がそれぞれの収容所から解放されて焦土と化した郷里に帰れるようになったのは1945年10月のことであった。

交易、移民、疎開、避難等々、沖縄県民はいろいろな面で、いろいろな理由から県外、そして海外へと飛び立っていった歴史を有するが、今回は、その中から戦後引き揚げと収容所生活、そして帰村にともなう未曾有の人口移動を駆け足でみることにしたい。

1. 戦後引き揚げ

(1) 民族大移動

敗戦後、海外から引き揚げてきた日本人は、軍人・軍属及び民間人を含め660万人以上いたという。敗戦当時の日本の人口は約7,200万人とされるから、廃虚と化した日本本土に人口の10%に近い人々が帰還したことになり、これは日本の歴史にとってかつて経験したことのない未曾有の民族大移動であったに違いない。

これらの引揚者は、旧植民地（台湾、朝鮮、サハリン、南洋群島、満州など）、占領地（中国大陸、フィリピン、シンガポール、インドシナ半島、マレー半島、南太平洋地域など）、ソ連軍占領下の千島列島など、広範囲に及ぶ地域から強制送還された人たちである。

海外からの邦人引き揚げは、1946年末までに実に500万人余にのぼり、50年までには627万人余が引き揚げている。その引き揚げも50年4月（前期集団引き揚げの終了）にほぼ終わったことになっているが、その一方でソ連や中国に残留する戦犯関係者や留用者（技術提

供など、何らかの理由で現地に残されていた者)、そして抑留された者たちがその後も断続的に引き揚げてきた。

引揚者は、戦争で肉親を失い、外地で築いた資産も放棄させられ、収容所生活の中から持てるだけの荷物を背負い、日本へ送還されたのである。

ちなみに、日本軍の復員についてポツダム宣言(1945年7月26日)は第9項で「日本軍の武装解除と復員」を明記しており、これには「日本国軍隊は完全に武装を解除せられたるのち、各自の家庭に復帰し、平和的かつ生産的の生活を営むの機会を得しめらるべし」とある。それにより、同年9月2日、それぞれの地域を退去し、日本に帰還することとなる(指令第一号「陸海軍の武装解除、降伏等に関する一般命令」)(1)。

一方、一般邦人の引き揚げについては、ポツダム宣言第8項に抽象的なながら触れられているが、それ以外に規定するような命令はなかった。当初、居留民はできる限り現地に定住させる方針であったようだ。しかし、10月25日、GHQ(連合国軍最高司令官総司令部)の指令によって日本政府の外交機能が停止され、外地の一般邦人は、各地の連合国軍及び当該国官憲の強制命令や、終戦に伴って発生した現地の混乱による生活手段の喪失などの理由から、日本に引き揚げざるを得ないこととなった(2)。

前述したように、1946年までに500万人余の膨大な数の人々が引き揚げているが、終戦からわずか1年余で大変な受入業務であったであろうことは容易に推察される。そして、52年までには日本への引揚者の95%にも達する約630万人が引き揚げているのである。しかし、これらの数字は「引揚げ手続きを行ったもの」に限られており、正規の手続きをとらずに、いわば脱出して密入国のような形で帰国した者、または九州や台湾に強制疎開させられた沖縄県民の沖縄への引き揚げなど

特殊な引揚者は含まれていないという(3)。

海外からの引揚者の輸送は、GHQの立案する引き揚げ計画やソ連政府からGHQあての通告に基づいた輸送計画に従って実施されていた。引き揚げは、軍人・軍属の復員と緊急を要する地域の邦人を優先し、一般在留邦人については、各国との協定によって順次、帰還させる方針がとられたが、ソ連や満州、北朝鮮など引き揚げに困難を極めた地域もあった(4)。

さて、ここで、わが沖縄に目を転じてみよう。あたかも1945年10月ごろから始まった帰村に呼応するかのように、県外や国外からの住民移動が開始された。いわゆる戦後引き揚げである。沖縄本島での引き揚げ業務はインヌミ(現沖縄市)と久場崎(中城村)の両引揚民収容所において行なわれたが、終戦直後、沖縄本島には32万余の人々がいたとされ、そこに海外や県外から17万人余の人口移動が行なわれたのである。

もちろん、彼らは兵隊のみではなかった。すでに述べたように、移民のために海外に渡り日本の敗戦によって強制送還された人、出稼ぎのために県外に渡った人、あるいは戦時中の学童疎開者、一般疎開者、徴用工など、じつに多様であった。これらの人々が、非公式にはあるが1945年10月から46年にかけて集中的に沖縄へ引き揚げてきたのである。当時の沖縄の混乱状態が容易に推察される。

ところで、南西諸島への引き揚げは、1946年1月から日本在留の人たちの送還で始まったという。しかし、たまたま帰還者の中に天然痘が発生し、3月18日から8月までは日本からの引き揚げが停止となった(5)。その後、GHQの指示により帰還希望者を佐世保他3港(鹿児島、名古屋、宇品)から送り出す計画が立てられ、8月15日から送還が開始された。以後、作業は順調に進んでいったようだ。10月に入って、南西諸島への帰還希望者の再調査を行なった結果、2月に行なった調査(6)よ

り大幅に増え、12万8千余人にも上った。そのため、最終輸送は12月26日に延期されることとなった。しかし、『鹿児島引揚援護局史』によると沖縄・奄美大島への送還業務は、12月26日に予定されていた最終船が帰還者の乗船トラブルにより28日に変更となり、同日115人を乗せた海防艦が沖縄へ向け出航した。ここに南西諸島への計画送還は終了し、その後は個別引き揚げとして、もう暫らく継続されることになる。この間に日本本土から沖縄に送還された人々は14万2千余人であった⁽⁷⁾。一方、米軍資料には、8月から12月31日までに14万8千余人々が、日本や台湾、サイパンから引き揚げ、郷里・沖縄の地を踏んだと記している⁽⁸⁾。

(2)地方引揚援護局一たどりついた引揚者

敗戦に伴って、海外からの引揚者の受入業務を担当したのが引揚援護局だった。各帰港地に置かれた引揚援護局では、検疫などの他、帰還援護業務を担当した。1945年9月28日から10月にかけて小樽、浦賀、新潟、広島、清水、横須賀、呉、佐世保、舞鶴、大阪などに陸軍の上陸地支局や海軍収容部が開設された。その後、これらの施設はGHQの上陸地指定に応じて、業務を開始することになる。

1945年10月15日、受入事務所が地方引揚援護局と改称され、11月24日には地方引揚援護局の官制を公布(勅令651号)して、浦賀、舞鶴、呉、下関、博多、佐世保、鹿児島等の7カ所の指定港に援護局を、また横浜、仙崎、門司に各出張所を開設した。

表 1

引 揚 者 の 受 入 機 関

引揚援護局・出張所	開局年月日	閉局年月日	引 揚 者 の 出 発 地
①呉(広島県)	1945・11・24	1945・12・14	*大陸・南方
②門司(福岡県)	1945・11・24	1946・1・23	*大陸から
③下関(山口県)	1945・11・24	1946・10・1	?外地引揚なし(機雷のため)朝鮮への送出港
④仙崎(山口県)	1945・11・24	1946・12・16	*朝鮮・中国(41万)朝鮮への送出港
⑤鹿児島(鹿児島県)	1945・11・24	1947・2・1	*南方・台湾・満州(36万)沖縄への送出港
⑥大竹(広島県)	1945・12・14	1947・2・21	*台湾・南方・フィリピン(41万)沖縄への送出港
⑦浦賀(神奈川県)	1945・11・24	1947・5・1	*南洋・フィリピン・南方(56万)沖縄県人が多い
⑧博多(福岡県)	1945・11・24	1947・5・1	*満州・中国・朝鮮(139万)
⑨宇品(広島県)	1945・12・14	1947・12・31	*南方・台湾・中国(17万)沖縄への送出港
⑩函館(北海道)	1945・12・14	1950・1・1	*千島・サハリン・シベリア
⑪佐世保(長崎県)	1945・11・24	1950・5・5	*南方・台湾・中国(138万)沖縄への送出港
⑫戸畑(福岡県)	1946・1・23	1946・10・1	*大陸
⑬別府(大分県)	1946・2・21	1946・3・26	*大陸・南方
⑭田辺(和歌山県)	1946・2・21	1946・10・1	*マレー・シンガポール・台湾(23万)
⑮唐津(佐賀県)	1946・2・21	1946・10・1	?外地引揚なし 引揚船の給油
⑯名古屋(愛知県)	1945・3・26	1947・2・1	*南方・台湾・中国(30万)沖縄へり送出港
⑰横浜(神奈川県)	1945・11・24	1945・12・14	*南方から
	1947・5・1	1955・7・11	*南方から
⑱舞鶴(京都府)	1945・11・24	1958・11・15	*シベリア・南方

※ 『引揚援護の記録』『続・引揚援護の記録』『続々・引揚援護の記録』『引揚げと援護三十年の歩み』より作成。

※ 閉局年月日については『局史』と一部違いがある。

地方引揚援護局は、その後に設置されたものを加えて15ヵ所⁽⁹⁾となり、これに援護所、出張所、連絡所と呼ばれたものが7ヵ所⁽¹⁰⁾設置された。が、1950年5月までに舞鶴と横浜を除いた残りの施設は閉局し、舞鶴と横浜はソ連からの組織的引き揚げの終了とともに58年までに閉局⁽¹¹⁾されたようだ(表1)。

つまり、占領下の引き揚げ業務は GHQの〈引揚に関する基本指令〉(1946年3月)に基づいて、その指揮監督の下に日本政府が守るべきものとして実施されてきたのである。

ところで、沖縄への引き揚げと深い関わりをもつ引揚援護局に、浦賀、名古屋、佐世保、鹿児島、大竹、宇品がある。そこは海外からの受け入れと沖縄への送出港に指定され、多くの沖縄県人を送り出している(表2)。

表2 沖縄に関わる地方引揚援護局 (人)

地方引揚援護局	海外からの受入数	沖縄への送出数
浦 賀	564,625	2,367
名古屋	259,589	28,241
大 竹	410,783	394
佐世保	1,391,646	60,457
鹿児島	360,924	46,062
宇 品	169,386	23,419

※『引揚援護の記録』『局史』より作成。

※ 送出数は一部、奄美などを含む。

(3)本土からの引き揚げ

海外から日本本土へ引き揚げてきた沖縄県人は、各地の引揚港で降ろされ、そこから列車で広島や佐世保、鹿児島へ向かい、旧日本軍の艦船、アメリカ軍のLST(揚陸艦)やリバティ型引揚船などで故郷へ引き揚げてきた。

その際、驚くべきことに奄美と沖縄出身者は「非日本人」⁽¹²⁾として取り扱われたのである。同様に、海外からの引き揚げの場合も、日本人と非日本人(沖縄・奄美出身者)は峻別されたという。

鹿児島引揚援護局の記録によれば、1946年

3月18日にGHQの命令で「沖縄奄美大島等南西諸島民の送還」業務が一時中断され、「非日本人登録」が行われたという。同年4月3日の新聞には、「沖縄への帰還当分の間停止」という見出しで18日付、連合軍総司令部の指示に基づき、日本本土より琉球列島、奄美大島の諸島、南西諸島への帰還は当分の間停止することになったので、帰還希望者は居住地から移動しない様にと引揚援護局からの発表を報じている⁽¹³⁾。

九州から沖縄への送還業務は鹿児島引揚援護局と佐世保引揚援護局が担当し、開局中は10万人以上の人々が沖縄へ送り出された(表2を参照)。ちなみに、鹿児島引揚援護局では、1946年1月から12月までに約4万6千人を沖縄へ送出し、送還業務の再開した8月15日以降は毎週1,000人前後を送り出したという。また佐世保引揚援護局は10月中旬まで週1,000人、その後は週3,000人の割合で帰還させる計画をたて、閉局までに6万余人を送出した⁽¹⁴⁾。

表3 日本からの引揚者の受入数

1946年12月31日現在

	沖縄本島	奄美大島	宮古島	琉球諸島総計
8月	6,159	2,162		8,321
9月	19,298	6,011	3,868	29,177
10月	30,394	7,247	1,474	39,115
11月	33,346	8,712	1,029	43,087
12月	14,873	4,670	293	19,836
計	104,070	28,802	6,664	139,536

※『琉球人引揚げ計画の最終報告書』より作成。

米軍の報告によると、海外や日本からの沖縄への引揚者は、1946年10月頃から週に8,000人、10月後半になると週に9,000人規模で増えていった。上記の表から見ると、8月から12月までの5ヵ月間に約10万4千人が沖縄本島に到着しており、相当な人口流入があったことになる。また、輸送中に32人が出生し、17人が亡くなっており、船中ではいろいろな人

生ドラマも展開されていた (15)。

佐世保や鹿児島から引揚者たちを乗せ出港した旧日本軍の艦船やアメリカ艦船は、久場崎や那覇などに入港した。上陸に際して彼らは米軍の検疫をうけ、完璧な防疫が施された後、当初、病人は胡屋の米陸軍病院（野戦病院）へ運ばれ、他の人たちはインヌミや久場崎の引揚民収容所に移動させられた。

沖縄への引き揚げは、1945年10月ごろ、南洋群島や朝鮮から始まり、久場崎港を中心に勝連半島のホワイトビーチや那覇港などが受入港となった。同年11月の「ウルマ新報」は、朝鮮からの引揚者105人が石川で仮生活をしており、CIC（米軍防諜部隊）の取り調べが済み次第帰すと伝えている（11月21日付）。1945年から46年にかけての久場崎港の利用率は県全体の70%を占めていた。しかし、48年の台風によって久場崎港は破壊され、受入港はホワイトビーチが主になっていくが、翌年、インヌミ収容所の知念地区への移転に伴い比較的近距離にある那覇港が主要港になっていたようだ。

沖縄への送還計画は、1948年12月24日のGHQの覚書により、入局受付が締め切られた49年3月で一応終了する。これを受け同年4月13日、神戸港から最終送還船が久場崎港に向け出航した (16)。その後は、主にソ連地区からの復員兵が送還されてきた。「沖縄タイムス」は、8月11日に引き揚げてきた97人中27人がソ連からの引揚者であると伝えている（8月14日付）。

久場崎港に入港した船の中には、沖縄から本土各地に復員する軍人たちを乗せて、帰っていくこともあった (17)。

2. 戦後への出発ーインヌミ収容所

(1) 引揚民の受け入れ

敗戦後、海外や県外から強制的に送還された沖縄人の受入先となったのが、インヌミ収

容所と久場崎収容所であることは前述したとおりである。引揚者はこの二つの収容所のいずれかを経て各自の郷里へと帰り、戦後への第一歩を踏み出したのであった。

両収容所の開設は、公式には1946年7月1日 (18)で、最初の受け入れは8月17日に熊本、鹿児島、宮崎の各県からの引揚者、556名である。彼らは、軍政府副長官クレイグ大佐や志喜屋孝信民政府知事らの出迎えの下、久場崎港（ブラウンビーチ）で歓迎セレモニーを受けた (19)。埠頭には「ウェルカム・ユー・ホーム」と横書きされた幕が掲げられ、やっとたどり着いた彼らをまずは安堵させた (20) という。

出迎えに際して、軍政府は用意周到に2度もリハーサルを行っていた。8月13日には、クレイグ大佐の参加の下、歓迎ムードは一層高まった。その前日（8月12日）の軍民連絡会議では、①当日は、知事をはじめ各部長も共に迎えること、②大きなコンセットは引揚者のための湯茶接待所に使用すること、③新聞記者に撮影をさせるべきとの軍政府の発言がある (21)。軍政府の引揚者に対する執拗なまでの気遣いがあった。ところで、日本本土からの引き揚げに関する新聞報道は、既報の7月より遅れて8月1日から始まる (22) と伝えたり、数度に及ぶ変更待ちわびる家族は戸惑っていたようだ。

1946年、日本本土や台湾、布哇、満州などの地域から約11万3千人の人達が、沖縄に帰還したと『沖縄民政要覧1946年』は記している (表4) が、その数字は米軍報告 (表1) と若干の相違が見られる。

引揚者のピークは1946年10月から11月頃であったが、その後、徐々にその数も減ってきた。収容施設のひとつ久場崎収容所は、12月20日に受入業務を停止、28日には閉所となるが日本本土からの最終船受入などの残務処理のため12月31日をもって終了する (23)。しかし、実際にはそれ以後の引揚者もあり、イン

表4 沖縄への帰還者 (人)

送出先別	帰還者数		計
	男	女	
日 本	56,612	45,171	101,783
台 湾	3,092	2,825	5,917
朝 鮮	22	11	33
支 那	181	34	215
満 州	426	461	887
布 哇	1,286	—	1,286
南 方	1,229	623	1,852
大 島	26	19	45
先 島	96	78	174
そ の 他	1,089	62	1,151
計	64,059	49,284	113,343

(1946年12月末日)

※沖縄民政府総務部調査課『沖縄民政要覧1946年』より作成。

ヌミ収容所のみで受入業務をすることになった (24)。

それではインヌミ収容所は、いつまで継続したのであるか。1949年8月14日付「沖縄タイムス」によれば、同年7月23日に沖縄を襲ったグロリア台風でインヌミ収容所は壊滅状態となり、7月25日に知念地区の旧警察署跡に移ったという。この台風は、瞬間最大風速が60km/秒を越す大型台風で、死傷者は約300名を数え、住宅や諸施設にも甚大な被害を出している。事実、インヌミ収容所は台風で大打撃を受け、知念地区に移動したとの証言もあった。また、同年11月1日付の「沖縄タイムス」には、知念のキャストロ収容所にソ連からの復員兵が収容されたとあり、インヌミ収容所は、現沖縄市高原から7月25日に知念地区にあった民政府と入れ替わる形で

移ったとみて間違いないだろう。同収容所は、シベリア引揚者の受け入れを主業務としながら、その後、ほどなく閉所したと思われる。

(2)受け入れから送還まで

次に引揚者たちが、各自の故郷へどのような手続きを経て帰村していったのかを見てみよう。久場崎港に降り立った引揚者たちは、MP (憲兵) やCP (民警察)、医療スタッフ、そして収容所職員が見守る中、まずDDTの洗礼を受けた。そして、久場崎収容所へ入る引揚者は港に隣接する収容所へ徒歩で向かい、インヌミ収容所へはGMCトラックで移動したが、その際、波止場から上陸に至るまでの輸送は米軍政府が指揮をとった (25)。

一方、引揚者たちが港に着いて上陸の準備をしているころ、収容所では既に彼らの帰村準備が開始されていた。引揚者たちが本土や外地から沖縄に引き揚げてくるときに作成された名簿は、現地の収容所や地方引揚援護局から引揚船の船長などに託されていた。インヌミ収容所の場合は、船が港につくと収容所職員がその名簿を受け取って持ち帰ってくる。そして、引揚者が港で収容所内の規則をはじめいろいろ説明を受けている頃、事務所ではその名簿をもとに、市町村ごとにグルーピングして新しい名簿作りの作業が始まっていた。そうして名簿が出来上がると、引揚者は名簿と引揚証明書、受入依頼書とともに各市町村へ送られるのである (26)。

しかし、場所によっては立入禁止区域の地域があり、帰村出来ない引揚者の中にはインヌミ周辺でテント生活を営む者もいた。引揚者は、1日ないし数日には、居住市町村に帰れたようだが、インヌミから遠い地域や離島への引揚者の中には、1ヵ月近くも収容所暮らしを余儀なくされる人達がいた。

故国の港に上陸し、収容所にたどりついた人々はそこで初めて足をのばして一息つくことができた。カバヤーにコンセット、コーヒ

一にソーセージ、レーションなどの米製品が彼らを温かく迎えたのである。引揚証明書とわずかな所持金、そして持てるだけの荷物を背負って帰ってきた引揚者の大半は、軍政府の指示により千円以上の所持金調査を受けた。これは、日本人の資産は略奪資産であり、他方、国内のインフレーションを刺激しないようにとの連合国軍総司令部の方針からきているという(27)。

ところで、インヌミ収容所は一度に4千人を収容できるように整備されたようだが、引揚者の収容だけでなく、日本兵の本土への送還や沖縄から本土大学への留学生の待機施設としても利用されている。1949年の「うるま新報」を見ると、日本への留学生約70人が待機中であり(2月28日)、来月初旬には出発予定とある(3月2日)。さらに同収容所は離島から来る人達の受入施設にもなっていた。

ちなみに、「インヌミ」という名称は、別称であるにもかかわらず一般的に定着しており、今回はこの名称を多用したが、公式には「キャステロ海外引揚民収容所」と称し、その他キャステロキャンプ、キャステロ収容所、インヌミヤー、インヌミヤードゥイなどとも呼ばれていた(28)。

3. 収容所からの出発

(1)市の急造、そして旧村制の復活

1944年6月、米軍がサイパン島に侵攻すると、これに深い衝撃を受けた政府と日本軍第32軍(沖縄守備軍)は守備強化のため、7月から九州や台湾におよそ8万人の県民を疎開させる。翌45年2月には本島の住民10万人を北部へ移動させる計画も進めるが、3月中旬までに約3万人が疎開したのみである(29)。結果的には、米軍の本島上陸前後の混乱で約8万5千人が北部の山間部へ移ったという(30)。「どうせ死ぬなら故郷で」とある種、自らの意志で居残った人たちも含め、殆どの住民は

戦場に放り出されたのであった。

米軍上陸の翌日、4月2日には北谷の砂辺一帯に米軍の難民収容所(民間人収容所)が設置された(31)のをはじめ、4月下旬には米軍の支配下に入った北部地区にも収容所が置かれた。米軍は捕虜になった日本兵やその保護下に入った住民を次々と中部・北部の捕虜収容所や難民収容所に送り込んだ。これは、「沖縄上陸作戦と同時に、本土侵攻にそなえて中部・南部を無人地帯にし基地を作ったため」(『宜野座村誌』第二巻)という(32)。つまり、米軍の作戦上の理由から強制的に移動させたもので、そのため終戦直後には戦中の避難民も含め、32万人以上が中北部に集中して収容され、飢えやマラリアと闘っていた。

彼らを収容した難民収容所は、大きくわけて沖縄本島に11カ所、周辺離島に5カ所(33)が置かれていた。一方、現地召集の軍属を含む日本兵は、金武村屋嘉の捕虜収容所に収容された。本島内には最大規模の屋嘉を中心に7つの仮収容所が設置されていた(34)。彼らは毎日のように死体処理作業や米軍物資の運搬、米軍基地の修理、諸建設作業などの軍作業にかり出されながら、故郷に帰る日を一日千秋の思いで過ごしていた。翌46年にはほとんどの捕虜が日本へ送還されたが、沖縄出身者の中にはハワイへ送られる捕虜もいた(35)。

ちなみに、沖縄本島において米軍が保護した住民数は、4月末で11万人、5月末で14万人、日本軍の組織的抵抗の終わった6月末には28万人と急増し、7月末には32万余人に達したという(36)。

米軍は戦闘と住民の保護管理を併行しながら、やがて行政機構の建て直しも行なっていく。戦後初の中央行政機関ともいうべき「沖縄諮詢会」は1945年8月20日にスタートし、軍政府の諮問に対する答申、中央政治行政機構に関する計画・立案、軍政府への陳情などを役目とした。あくまで暫定的な機関であったが、46年4月に沖縄民政府が創設されるま

での間、住民を代表する機関として機能し続けた。

1945年9月には、米軍政府は組織的な地方行政システムを構築するため「地方行政緊急措置要綱」を発表し、従来の収容地区を中心に市機構を整備した。この結果、県内の16地区に市が誕生し(37)、市会議員選挙や市長選挙が行なわれ地方行政の第一歩が踏み出されたのである。

かくて戦後初の奇妙な新しい市が誕生したが、10月に入ると軍政府は、沖縄本島の住民を旧居住地区に速やかに移すために「地区及び地区境界の変更」と「住民再定住計画及び方針」を発表した(38)。

その計画案は10月23日に軍政府より各地区隊長へ指示され、それに伴って各収容所から旧居住地域への移動が開始された。住民待望の帰村は、大規模な住民移動を生じ、その結果、市制が維持できなくなり、12月には「沖縄行政機構改革要綱」が發布されて戦前の市町村制が復活することになる。ただし、それは帰村時期とも関わり、各地区同時に適用されたのではないようだ。

那覇市歴史資料室所蔵「一九四五年 疎開者帰還二関スル書類 惣慶区役所」にはく人口移動に伴ふ区の合併、廃止に関する文書がある。住民の移動によって区の人口が300人以下になると、区の廃止や隣接区との合併が決定されたり、もちろん全ての区民が移動した時には、区は廃止になるといった内容である。

ところで、1945年8月15日の仮沖縄人諮詢会設立と軍政府方針に関する声明によると、当時の総人口およそ32万人の内、石川・前原地区の5万5千人を除く26万5千人を均等に振り分けながら漠那、宜野座、古知屋など旧国頭郡内の7区に移動させるという大移住計画が持ち上がった。その計画をコザキャンプで例にとると、1945年6月10日に移動名簿が提出されたようで、7月8日には提出された

名簿の調整が行なわれ、そして8月11日に移動する順序が明示されている。しかし、同月21日になると結局、中止となったのである(沖縄市役所『仲宗根山戸日誌①』)。

では、ここで美里村の資料を紹介しながら、市の解体と村制復活の様子を見ることにしよう。

1945年10月1日、美里、具志川、勝連、与那城の4ヵ村を市域とする前原市が誕生するが、前述したように12月には市政が解体された。すると、翌46年2月21日、米軍地区隊長付の通訳が市役所に登庁し、前原市長に地区連隊長命令「戦前の村を復活せしめる事」を伝達した。そして10時に地区連隊長(ノーレン大尉)より、市長始め旧4ヵ村の関係者に「諸君を各々の村長に命ずる。而して来る3月1日より与那城、勝連村は戦前の役所敷地に、具志川村は当分具志川区の兵舎跡、美里村は戦前の役所敷地に復帰出来るまでは、美浦区の兵舎跡で事務を開始するよう、尚、助役課長その他の職員は一週間以内に選定して報告し事務開始に支障無きように」と命じている(39)。ここに、移動後の新しい村長が任命され、新しい村が復活したのである。

1946年4月、軍政府は沖縄諮詢会をそのまま移行する形で沖縄民政府を設立し、諮詢会の業務を引き継いだ。この民政府も諮詢会同様、軍政府の管理下に置かれ、たんなる補助機関のような役割しかもっていなかったようだが、住民は確かな足取りで戦後への再建を始めていた。

(2)収容所のなかから

本島上陸と同時に「ニミッツ布告」を發布した米軍は、海軍軍政府を設置して住民の保護・管理を開始した。上陸地近くでは前述したように早くも臨時の収容所が建てられ、以後、収容者が増えるごとに仮収容所が増えていった。特に中部での収容所間の移動は激しく、移動を強いられる住民にとってそれは死

の恐怖を感じるものだったという。

ほとんど着の身着のままの状態で収容された住民にとって、一定地域に鉄条網を張り巡らし外部との交通を遮断された収容所での生活は、衣・食・住のほとんどを米軍からの補給（配給）物資に頼らざるを得なかった。しかし、多くの住民は正規の配給物資では飢えを凌げず、病人の死亡率は高くなり、食糧探しに伴う犯罪も急増していった。さらにソテツの実などで中毒死する人たちが増え、食糧を求め柵の外へでた女性が暴行される事件も起こった。やがて、食糧難は大きな問題となり、軍政府への陳情は絶えることがなかったという。ちなみに周辺離島を含めた21ヵ所のキャンプ（45年8月頃か）の総人口は33万4千余人⁽⁴⁰⁾というから、実に膨大な量の配給品を必要としたことだろう。不足がちな食糧事情、それを穴埋めするかのように住民間では「戦果」と称する米軍からの盗難物資が出回っていた。

ところで、米軍は食糧などを無償で配給するかわりに、住民に作業への協力を命じていた。いわゆる軍作業の始まりである。当初は戦禍に荒れた収容所内での伝染病に対する発生予防の作業が主であった。ちなみに、本島では1946年の伝染病患者数が17万5千人に及び、16万人がマラリアに罹っていたようだ。

米兵監視の下、労働に適する男女を選びシェルター建設や洗濯作業、軍施設の建設などが毎日の様に行なわれた。第一線から送られてくる米兵の死体埋葬作業、日本軍の糧秣倉庫からの食糧探しなどにも多くの住民がかり出された。軍作業へのかり出しは、住民だけではなく。捕虜収容所のP・Wも同じである。沖縄諮詢会の軍民連絡会議では、米軍側より「P・Wが帰るのでその代わりに頑丈な労働力を送って欲しい」という要請が出されている⁽⁴¹⁾。

収容所での生活が長期化すると、勝手に食糧の調達や離散家族の安否確認のため管理外

に出ていく住民も増えてきた。軍事作戦上の問題からか、米軍政府は1945年10月に「住民の行動取締まり」を発令し、住民の交通や移動の自由を禁止した⁽⁴²⁾。住民は米軍の許可（バス）なしには移動できず、それをあえて破れば「越境」として犯罪者となり、銃殺や30日間の重労働に処せられたりした。夜間に戦闘地区を横切ろうとした住民が殺されたこともあったという。米軍は、立入許可証の携帯を義務付け、さらに住民の行動規制を厳しくするが、名目は住民による窃盗防止、住民の安全保護上の問題にあったという。

1947年3月、ようやく住民の昼間の通行が許され、翌48年3月には夜間外出禁止令も解かれた。もちろん米軍基地内を除くが、住民がかつてのように自由に沖縄を闊歩できるようになったのである。

ついでながら、1945年12月末から46年までの田井等地区の住民生活に関する通行規則を見てみよう（沖縄市町村長会『地方自治七周年記念誌』）。

1. 田井等地区より他の軍政地方に通行する者は、警察隊長より委任されたる通訳兵の署名した通行許可書を要し、通行中は常にこの許可書を所持すべし。
2. 田井等地方区に於いて他市町村へ通行する者は、村長又は町長の通行許可書を持参すべし。
3. 同一町村内に於いて他字へ通行するものは、区長の通行許可書を持参すべし。

厳しい通行規制に縛られていた住民の姿や窮屈さを仲宗根はその著者の中で指摘している⁽⁴³⁾。これらの厳しい制約は日本の無条件降伏や米軍の復員などが背景となって段階的に解除されていったようだ。

(3)わが家へ帰ろう

各収容所は、戦後復興の起点となったが、それは同時に4半世紀にわたる米軍統治の出発点でもあった。沖縄全域には当てはまらない

いであろうが、米軍は1945年4月中旬には早くも地域によってはメイヤー（村長）を任命し、治安維持のために警察署長や農業・衛生・労務の班長も配置して、住民自治の行政をおしすすめている（44）。

ちなみに、越來村（現沖縄市）のコザキャンプでは1945年6月7日に村長・助役選挙が実施され、7月以降は初等学校が開校するなど、戦後復興の環境が整備される中、講演会や芸能会も盛んに行なわれ、急速に復興への機運を盛り上げている。

ところで、米軍は無条件に帰村を許可したのではなく、米軍の基地建設など沖縄統治上、必要のない地域を開放して帰村を許可し再建の準備を進めさせたのである。米軍が広大な土地を軍用地として接収していったため、基地に故郷を奪われた人は帰村できないまま周辺地域を転々とし、なかには現在にいたるまで故郷、わが家に帰ることができない人々も少なくない。当然ながら、彼らからは帰村促進の陳情が次々と出されていた（45）。これは、引揚者も同様に戦前期に移民として海外に渡った人のなかには、今だかつて、故郷に帰れない人もいるのである。

1945年10月9日、「阿久根」という猛烈な台風が沖縄本島を襲った（46）。荒れ狂った台風は、住民だけでなく米軍施設にも相当な被害を与えた。船舶や浮棧橋は陸上や砂浜に打ち上げられ、飛行機や飛行場も破壊された。さらに米軍側に数百人にも上る死傷者がでたという。

この台風により、米兵の復員に拍車がかかったとされるが、一方で軍政府と諮詢会との連絡会議では住民移動の問題がさらに活発に

討議されていく（47）。『沖縄から琉球へ』によると、①出来る限り旧町村旧部落に移動させること。②移動には先発隊を派遣して仮小屋と食糧の準備をさせること等の移動方針が決定され、これらは軍政本部から地区隊長へ、諮詢会から各市当局へと通達されていった。

米軍政府は、1945年10月末に「2ヵ月間に20万人の移動を完了する予定」と発表しているが（48）、それ以前の9月にはすでに軍から収容所へ指示があり、収容所の区長会や班長会の席上で伝達され、人口調査や移動申告書の提出など、確実に帰村の準備は進んでいった（49）。

1945年10月に入ると、米軍政府は住民を旧居住地に移すための諸事項をまとめた「移動計画案指示要綱」や市の区域に人口を示した「市域と人口」（表5）を報じて速やかなる移動を各地区隊長に指示していることは、既に述べた。

当時の「ウルマ新報」は移動の状況を以下のように伝えている。移動計画は着々と実施しつつあるが、軍政本部は1945年10月29日から11月中旬までに約一万一千余人が旧居住地

表5

市域と人口

市	人口(人)	区	域
知念村	37,060	知念 佐敷 玉城 具志頭 大里 南風原 東風平	
糸満市	70,730	真和志 那覇 首里 小禄 豊見城 高嶺 真壁 摩文仁 喜屋武 兼城 糸満	
前原市	27,238	具志川 与那城 勝連 南美里	
古謝市	69,289	読谷山 北谷 越來 中城 宜野湾 浦添 西原	
石川市	19,996	恩納 北美里	
宜野座市	8,146	金武	
久志市	5,289	久志	
田井等市	51,806	今帰仁 本部 羽地 名護	
辺土名市	24,869	国頭 大宜味 東	

※ 『ウルマ新報』1945年11月7日
米国海軍軍政府本部指令第24号（1945年10月14日）「地区及び地区境界の変更」『アメリカの沖縄統治関係法規総覧Ⅳ』より作成。

やその近傍に移動した旨を発表した。さらに、移動はトラックや徒歩であるが、「受入先二適当ナ家が建ツ迄ハ何人ト雖モ移動スルコトハ出来ナイ」との記述もある(50)。中城や恩納村などから始まった住民大移動は、1946年1月一杯で終了する予定(51)であったが、実際には4月から5月頃までにはほぼ終了しているようだ。当然、基地と化した地域への帰村は遅れることになる。

疎開した人々が帰村する際には、諸注意事項があったようだ。宜野座村惣慶区では帰村する住民のための文書<宜野座市人口移動二関スル書類綴>があり、1945年10月28日に人口移動部から区長や各係(業務、輸送、指導)宛てに通達されたものである。その中の文書「移動出発の件」には、出発時間や食料の事が記されている。その内容は

①集合は、午前8時までに各地区の指定場所に集まること。

②2日分の食糧を配給券と引き換えるが、移動前日までに各地区配給所で受け取っておくこと。

③暴風や大雨でなければ決行すること。
などである。

また、移動にあたり他市からの潜入者を防ぐため、移動者名簿は支給者台帳と照合するようにとの厳重な通達が、区長や世話役に届けられていた。

書類綴の中には、惣慶区から出発する越来村民の移動に関する文書があるので紹介しよう(1945年11月9日文書)。

①移動の時に歩行できる者は、午前6時までに集合、午前8時までに金武入口の憲兵詰所に到着し、通行証を貰うことになっている。

②歩行の難しい人は、午前8時までに地区移動集合場所に集まり、輸送を行なう予定であった。しかし、軍の指示により輸送は中止、徒歩で移動することになった。移動に際しては、班編成がなされていたようだ。

(惣慶区役所、前掲書)

次に、各収容所にいる住民を受け入れるまでの帰村準備を沖縄市宇美里の事例で見てみよう。

美里では1946年2月3日に「美里復興企画委員会」が設置され、3月17日には家屋建設準備のため清掃作業が行われている。次いで4月には移動してくる住民に備え家屋の配分についての協議が行われ、売店が建造された。5月に入ると残存家屋の修理に便所作りが行なわれ、そして13日には前原警察署より建設状況の視察があり、その頃には約3000坪にも及ぶ甘藷の植付けがなされている。5月中旬には、各収容所にいる住民の移動の打ち合わせがあり、食糧準備のための甘藷掘り作業も進められた。また、21日には移動に備え前原警察署から再度の部落内視察を受けている。23日は住民大移動を明日に控え清掃作業が実施され、いよいよ世紀の移動が24日に始まった(52)。

かいつまんで移動状況を紹介したが、美里区は故郷に戻ってくるのに約4ヵ月を要しており、その間に2回の警察視察を受けている。

美里の事例からも分かるように、最初に数十人から数百人の先発隊(先遣隊など)が組織され、各収容所にいる住民を故郷に受け入れる準備をするのである。先発隊は、まず戦禍の後かたづけに農耕準備、残存家屋の修理に仮住宅の建設など諸作業を行っている。受入準備が出来るといよいよ住民の移動が始まるが、宜野湾は国頭地域のより遠方(北側)から受け入れを行なったことが惣慶区での世話役だった桃原亀郎さんの日記にも記されており(53)、他村も宜野湾同様、遠方からの受け入れを優先して行っていたようである。

こうして1945年の10月ごろから46年の春にかけて沖縄本島でおよそ30万人という大規模な住民移動が行われたのである。

佐敷の例をみるが、ここでは面白い取り決めがあった。

佐敷は、1946年1月から3月に移動態勢や入村準備についての協議を行なっている。その内容は、①村内道路や家数など米軍の指示通り整備すること、②宅地は衛生や生産を考慮し、なるべく平坦な農耕地を避けて傾斜地を利用すること、③道路整備はなるべく基盤型に整然とすること、などである。移動準備は毎日行われ、4月中旬には完了し、第1回目の移動により入村が始まったのである(54)。基盤目をなす佐敷の街の形態は、あるいはこの終戦直後の移動に起因するのかもしれない。

最後に浦添村を例に上げよう。浦添村民はコザ、石川、知念、宜野座、金武など各地の収容所に散居し、住民は帰村できる日を待ち望んでいた。1946年2月6日、いよいよ帰村が許可された。復旧設営隊(先発隊)が野嵩やコザ、石川、金武などの収容所から約500人選抜され、仲間キャンプに調査に行く。彼らは、米軍からテントを入手し、次々と小屋を設営していき、村民受け入れの準備を整えていった。こうして準備が出来ると各収容所から村民が仲間に帰ってきた。村民が故郷の地を踏んで、4月に村行政がスタートした(55)。ちなみに、コザキャンプからの浦添村民の移動は、3月7日から9日までの3日間で行なわれたようだ(『仲宗根山戸日誌②』)。

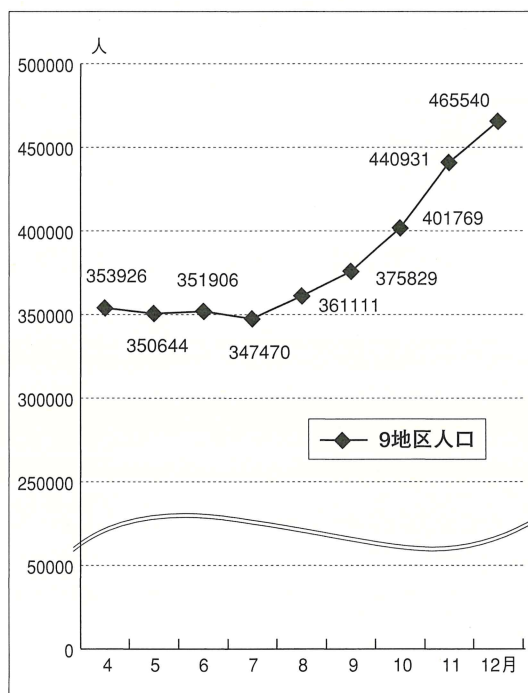
収容所からの住民移動も落ちついた1946年4月から12月までの人口動態をみると(グラフ1)、日本本土や海外からの引き揚げとかかわる8月に増加していることがわかる。

こうして沖縄の戦後復興の槌音は鈍いながらも確実に響いていった。1945年11月以降の新聞を見ると、「狭い乍も楽しい我が家」、「張切るコザ市」、「洋裁学校開く」等々、着々と進む住民移動の様子や産業復興に励む地域の姿が生き生きと紙面を埋めている。

おわりに

1945年9月7日、越来村森根(現嘉手納基

グラフ1 9地区の総人口



※9地区とは糸満、知念、胡差、前原、石川、宜野座、久志、田井等、辺土名である。

※1946年4月から12月の総人口で離島を含んでいない。

※沖縄民政府総務部調査課『沖縄民政要覧1946年』より作成

地内)で降伏調印式が行なわれ、沖縄戦の幕は閉じた。戦場となった沖縄本島の住民は、米軍の占領政策のため中北部に設置された収容所を中心に戦後生活のスタートを余儀なくされた。有刺鉄線が張り巡らされ、多くの人々が雑居する収容所は、衛生・食事・通貨問題など多くのハードルをかかえていた。しかし、住民待望の帰村許可によって旧居住地への移動が始まり、46年ごろまでには30万人近くの人々が本島内を移動した。そこへ県外や国外からおよそ17万の人々が引き揚げてきたのである。沖縄戦、そして戦後の民族移動、まさに想像を絶する巨大な歴史の渦が沖縄を取り巻いた。戦争によって廃虚と化した郷土、戦争によって数多くの人命を失った島。米軍の統治政策の下、まさにゼロからの出発であ

ったが、沖縄で戦渦を生き延びた人々はもちろん、海外や県外からの引揚者たちは、実に逞しく戦後復興の担い手となっていた。彼ら引揚者たちの中には、のちに教員、技術者、医者、政治家等々として、27年余の異民族統治の沖縄で、その再建に多大なエネルギーを注いだ方々が含まれていた。

今回は、敗戦に伴う戦後引き揚げ、収容所生活、そして人口移動をごくかいつまんで眺めてきた。

一方で今回はほとんど触れることができなかったが、佐敷や石川、そしてコザなど、米軍基地や軍用道路の建設、そして戦中・終戦直後の収容所にその都市基盤の形成が求められそうな街たちもあった。

また、1945年10月の阿久根台風は、住民移動の問題に拍車をかけた。沖縄戦を境に米国の統治下に組み込まれた沖縄は、1948年（リビー）と49年（グロリア）の大型台風が契機になって恒久的な基地建設が始まる。「台風銀座」と呼ばれる沖縄であるが、何かと「台風」がキーワードになる場合がありそうだ。

沖縄戦後史はまだまだ我々の手に届かぬ位置にある。

〔注〕

(1)厚生省援護局『引揚げと援護三十年の歩み』

1978年4月。

(2)同上。

(3)同上。

(4)同上。

(5)一方、〈引揚げに関する基本指令〉には、軍事上の必要により沖縄本島への引き揚げは禁止させられており、引き揚げについては検討中と記す（前掲『引揚げと援護三十年の歩み』）。

(6)沖縄への送還者数を把握するためGHQの指示により、沖縄出身者の登録が2月18日と3月に行なわれた。その結果、70%の人々が帰還を希望している（前掲『引揚げと援護三十年の歩み』）。

(7)前掲『引揚げと援護三十年の歩み』。

(8)沖縄市役所『インヌミから50年目の証言』 沖縄市史資料集・5 1995年9月。

(9)地方引揚援護局は、函館、浦賀、名古屋、田辺、舞鶴、宇品、呉、大竹、仙崎、下関、別府、博多、唐津、佐世保、鹿児島のみ15ヵ所である（前掲『引揚げと援護三十年の歩み』）。

(10)援護所などは横浜、札幌、青森、小月、門司、戸畑、加治木の7ヵ所である（前掲『引揚げと援護三十年の歩み』）。

(11)前掲『引揚げと援護三十年の歩み』。

(12)〈引揚げに関する基本指令〉によると、「非日本人」を中国人、台湾人、朝鮮及琉球人のみとし、日本へ、又は日本からの引き揚げはGHQの許可する人員に限られていた（前掲『引揚げと援護三十年の歩み』）。

(13)「ウルマ新報」1946年4月3日。

(14)「ウルマ新報」1946年8月30日。

(15)軍政府「琉球人引揚げ計画の最終報告書」
1947年1月。

(16)佐世保引揚援護局『佐世保引揚援護局史』下巻 1951年3月。

(17)日本軍の捕虜の数は1945年12月に16,346人となっている（上原正稔『沖縄戦アメリカ軍戦時記録』三一書房 1986年7月）。沖縄本島から日本への引き揚げは、1945年10月9日から47年1月8日に終了とある（前掲『引揚げと援護三十年の歩み』）が、実際には45年11月に入ってからのものである。

(18)「公式には」という限定を付したのには、理由がある。これは証言や資料でも確認できるが、収容所の開所以前の1945年10月には、インヌミ収容所で受入態勢が不十分なまま、すでに南洋方面からの引揚者を受け入れているのである。『引揚げと援護三十年の歩み』には10月25日に南朝鮮からの引き揚げが開始されたことが記されている。またワトキンス文書刊行委員会『沖縄戦後初期占領資料』（緑林堂書店、1994年5月）によると、46年1月15日付けの文書に、マリアナ諸島から引き揚げが間もなく始まるとの

条文があり、軍政府副司令官からキャステロキャンプ（インヌミ収容所）へ6,500人分の食糧を準備するようにとの指示も出されている。それから同月29日付の文書には、24,000人の引揚者があること、女・子どもが多いこと、入港をブラウンビーチ（久場崎港）・馬天・金武湾のどちらかにすること、キャステロキャンプは250張りのテントを用意し、食糧や毛布をはじめ交通手段・宿泊施設の確保、衛生面の強化など、いろいろな受入準備をするようにとの指示が出されている。さらに開所に向けての準備のため、同年の6月頃には、草刈り作業に従事したとの証言も得た。

つまり、インヌミ収容所は45年10月には南洋その他の地域から引揚者を受け入れており、不確定ながらも受入準備が翌46年1月から進められ、6月頃からはオープンにむけ正式な取り組みがなされたのである。

(19)前掲『インヌミから50年目の証言』。

(20)「うるま新報」1946年8月23日。

(21)沖縄県教育委員会『沖縄県史料』戦後2 沖縄民政府記録1 1988年3月。

(22)「うるま新報」1946年7月26日。

(23)前掲「琉球人引揚げ計画の最終報告書」。

(24)「うるま新報」1946年12月27日。

(25)前掲『沖縄県史料』戦後2 沖縄民政府記録1。

(26)浦添村「復員名簿」。

(27)岩槻泰雄『新版 戦後引揚げの記録』時事通信社 1995年10月。

(28)前掲『インヌミから50年目の証言』。

(29)防衛庁防衛研修所戦史部『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』1968年1月。

(30)沖縄タイムス社『鉄の暴風』1950年8月。

(31)旧字上勢頭郷友会『上勢頭誌』（中巻・通史編〔Ⅱ〕1993年9月）によると、1945年4月2日、砂辺の海岸近くには有刺鉄線を張り巡らした百坪ぐらいの捕虜収容所（難民収容所か一筆者注）があり、そこには二人の老人が収容されており、この収容所は6日の朝までには住民の数も7、8百人にふくれ上っていたとある。と

ころが、上原正稔『沖縄戦アメリカ軍戦時記録』には、砂辺のキャンプは2日に設置され、その後、4日には閉鎖されて約3千人の住民は新しく設置された野嵩のキャンプに移ったとあり、『上勢頭誌』と一部、齟齬がある。いずれにせよ、両書とも4月2日には、砂辺にすでに収容所が置かれていたとする点では一致している。

(32)宜野座村役場『宜野座村誌』第二巻 資料編 I 移民・開墾・戦争体験 1987年3月。

(33)難民収容所は、本島が古謝、前原、石川、田井等、辺土名、宜野座、漢那、古知屋、瀬嵩、大浦崎、久志の11ヵ所、周辺離島は栗国、平安座、久米島、伊平屋、慶良間の5ヵ所である。

(34)屋嘉、楚辺、牧港、小禄、ライカム、奥武山、嘉手納の7ヵ所である（仲宗根源和『沖縄から琉球へ』月刊沖縄社、1973年5月）。

(35)ハワイへは1945年6月10日頃から7月3日頃までの間に3回、3,180人の県人捕虜が移送された。そして46年10月から12月にかけて彼らは沖縄に送還された（金武町役場『戦後50年金武町平和推進事業報告書』1996年3月）。一方、『引揚げと援護三十年の歩み』は4回に渡ってハワイへ移送したとする。

(36)前掲『沖縄戦アメリカ軍戦時記録』。

(37)本島では古謝市、石川市、辺土名市、田井等市、漢那市、宜野座市、古知屋市、久志市、瀬嵩市、前原市、知念市、平安座市の12市である（沖縄市町村長会『地方自治七周年記念誌』1955年12月）。

(38)「米国海軍軍政府本部指令第24号」（1945年10月14日）の「地区及び地区境界の変更」には、古知屋、瀬嵩、本部、平安座、許田、漢那の廃止を記している。また、「住民再定住計画及び方針」は「米国海軍軍政府本部指令第29号」（1945年10月23日）による（池宮商会『アメリカの沖縄統治関係法規総覧Ⅳ』月刊沖縄社1983年5月）。

(39)美里村役所『戦後十年』。

(40)前掲『沖縄から琉球へ』。

(41)沖縄県教育委員会『沖縄県史料』戦後1 沖縄

諮詢会記録 1986年3月。

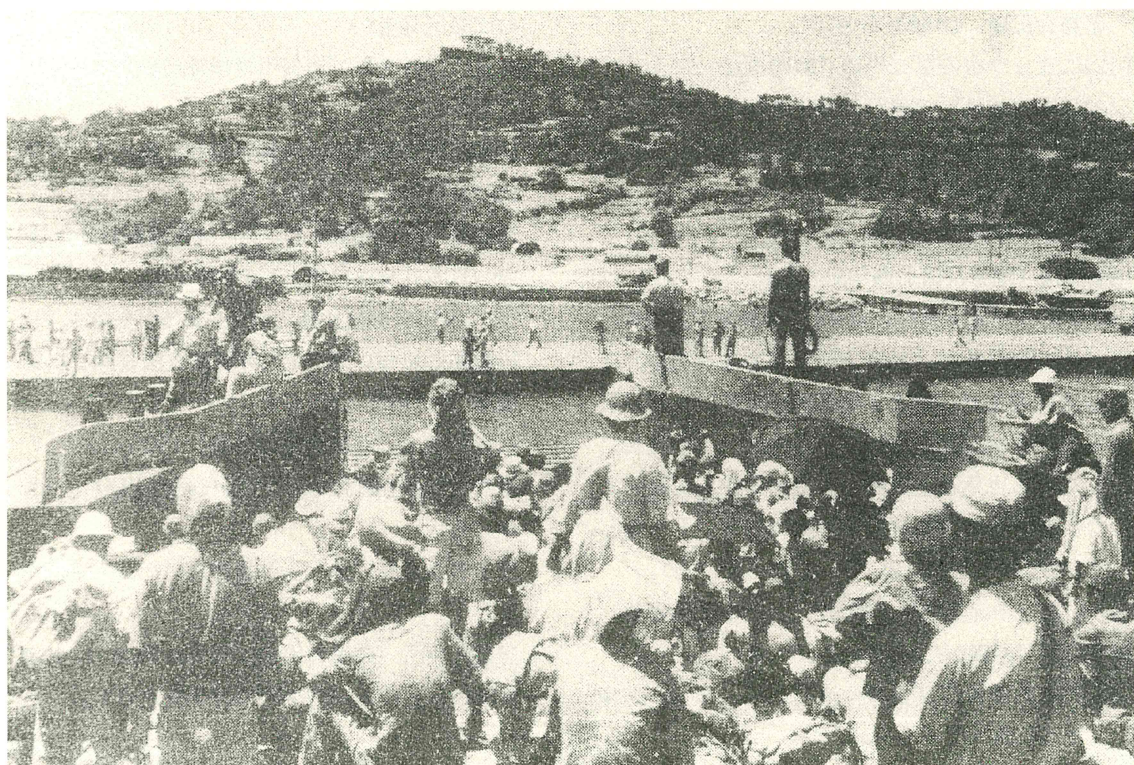
- (42)ニミッツ布告第二号の「戦時刑法」によって住民の区域外への通行は禁止された（池宮商会『アメリカの沖縄統治関係法規総覧Ⅰ』「米国海軍軍政府布告第二号」）。
- (43)前掲『沖縄から琉球へ』。
- (44)前掲『地方自治七周年記念誌』。
- (45)前掲『沖縄県史料』戦後1 沖縄諮詢会記録。
- (46)最大風速45^{km}／秒の中型台風であったが、米国側に死傷者・行方不明者400余人にも及ぶ被害と米軍施設にも大打撃を与えた。この台風により、あき墓を避難所として利用する契機ともなった。また、軍施設の移転のコメントも報じられた（「うるま新報」1945年10月17日）。
- (47)前掲『沖縄県史料』戦後1 沖縄諮詢会記録。
- (48)前掲『沖縄から琉球へ』。
- (49)沖縄市教育委員会『仲宗根山戸日誌①』沖縄市史資料集・2 1988年3月。
- (50)「ウルマ新報」1945年11月14日。
- (51)前掲『沖縄県史料』戦後1 沖縄諮詢会記録。
- (52)美里区『美里区移動15周年』。
- (53)宜野湾市『戦後初期の宜野湾－桃原亀郎日記』1997年3月。
- (54)佐敷村『佐敷村誌』1964年3月。
- (55)浦添市教育委員会『浦添市史』第七巻・資料編6 浦添の戦後 1987年3月。

〔参考文献〕

- ・沖縄市役所『仲宗根山戸日誌②』沖縄市史資料集3 1992年12月
- ・佐世保引揚援護局『佐世保引揚援護局史』上下巻 1951年3月
- ・鹿児島引揚援護局『鹿児島引揚援護局史』1947年3月
- ・厚生省仙崎引揚援護局『仙崎引揚援護局史』1946年12月
- ・博多引揚援護局『局史』1947年9月
- ・宇品引揚援護局『宇品引揚援護局史』1947年12月
- ・宇品引揚援護局大竹出張所『宇品引揚援護局大

竹出張所局史』

- ・浦賀引揚援護局『浦賀引揚援護局史』1947年1月
- ・沖縄県教育委員会『沖縄県史料』戦後3 沖縄民政府記録2 1990年3月
- ・外務省外交史料館日本外交史辞典編纂委員会『新版 日本外交史辞典』1992年5月
- ・安仁屋政昭『戦後沖縄における海外引き揚げ』『史料編集室紀要』第21号 沖縄県立図書館史料編集室 1996年3月
- ・引揚援護庁『引揚援護の記録』1950年3月
- ・厚生省引揚援護局『続・引揚援護の記録』1955年3月
- ・厚生省援護局『続々・引揚援護の記録』1963年3月
- ・惣慶区役所『疎開者帰還二関スル書類』1945年
- ・沖縄民政府総務部調査課『沖縄民政要覧』1946年
- ・琉球新報社『琉球新報』
- ・沖縄タイムス社『沖縄タイムス』
- ・うるま新報社『うるま新報』
- ・ウルマ新報社『ウルマ新報』
- ・中城村役場『中城村史』第四巻 戦争体験編 1990年3月



引揚者が久場崎港に上陸（1946年）



共同作業（1946年）

〔沖縄市史編集室所蔵〕



新しい村ができる（1946年）



嘉間良収容所内の配給所（1946年）
軍曹や通訳を交えての打ち合わせ

〔沖縄市史編集室所蔵〕

食時半里ノ道ヲ帰寮シテ雑炊ヲスツテ午後ノ授業ニ出カケル子達ノ後姿ヲ見ルコトハツライ。麦ノ收穫モスグダソ馬鈴薯ノ取入レモジキダトモウ暫クノ辛抱ダト言ツテモ、子供達ニハ食物ノ辛抱ホドツライモノハナイ。

(4) 食糧不足ニ依ル教育的障害

教育ハ先ヅ空腹感ノ克服カラ、教育ニ先行スルモノ（明日ノ教育ヨリ今日ノ食物）殆ンド食物ニ氣ヲ奪ハレ、道德教育ノ困難性ヲ感ズル、行動ガ打算的唯物的ニナル傾向ガアル。

(5) 食糧難ノ打開

イ、規正数量内デノ配給方ノ懇請

ロ、野草ノ高度利用

ハ、未利用食資源ノ活用（醬油ノシボリカス等）

ニ、早稲物（一日デモ早ク收穫出来ルモノ）ノ植付

(6) 衣生活―持ツテ来タ洋服ハ殆ンド着ラレズニナル、配給ハナシ補修布ノ一片サヘ持ヌ子供達、外出衣ガナイ故ニ遠足ニモ出ラレヌ氣ノ毒ナ子モアル、道行ク姿ヲ見テモ疎開ノ子ト見當ガツク、訴ヘテモ願ガ叶ヘヌ、軍払下品ニヤット人ノ子ラシク装ヘルヤウニナツタ。

(7) 敷物一枚ヲ持タヌ生活

冬中敷物ヲ使ハズノ最低生活、之以上ノ忍苦ノ生活ガアラウカ仮住居モ仮住居、原始的生活デアル、自力デムシロヲ織ラウトシテモ藁サヘ買ヘヌ。

(8) 牛豚モ去ツタ冬ハ氣ノ毒ダツタ、春ト共ニ肥工出シテ来タ、家族ノ一員トシテ考ヘタイ。

(9) 少イ物資デ如何ニ建設スルカ

物ガナイト言ツテ手ヲコマヌイテハスマサレヌ。

創意工夫シテ生ミ出ス電燈ノ引込ヲ始メ農具、家事用具、學習

用具、一切自ラノ解決デナケレバナラナカツタ。

(10) 資金難―凡テヲ使ヒ果シテ一錢モナカツタ時ノ苦痛

(11) 如何ニシテ永住ノ氣ヲ持タセルカ

食糧問題ヲ解決シナイ限り郷愁的感傷ハ直ラヌト思フ

(12) □□児童（□□的）ノ取扱ヒ

(八) 今後の難点と要望事項

一、宿舍ノ補修 雨モリノスル各棟ノ補修特ニ屋根ノ葺變ヘ

ハ重要事ナリ 然シ其ノ材料ノ入手難ヲ如何ニ解決スル

カ

二、土地問題

地主ヲ如何ニシテ納得サセテ鍬入レ日ヲ一日モ早ク實現

出来ルカ

三、敷物ノ解決

衣ノ問題

四、日用品ノ配給（石ケン、手拭、紙

現物配布（悩ミハ殆ンド解消スル）

五、資金難

予算基準ノ全面的引上ゲ

生活費ヲ年度始メニ補助支出

農夫ノ設置（予算化）

六、分教場ノ教育

現状ハ生活アツテノ教育如何ニシテ食生活ヲ安定サセル

カ、晴耕雨読、昼耕夜読、時間割ヲ持タナイデモ教育効

果ノ上ガル教育法ノ採用

一〇、完全ナル戦災孤兒院の性格ニ迄、厚生省關係ニ迄

一一、本事業ニ対スル篤志家ノ動員

七、施設現在状況

- 1、形式的施設ハ 三、四、見取図参照ノコト
- 2、飢餓ノ恐怖突破（自給自足ノ強化）
 - 1、開墾作業
 - 2、自給肥料ノ徹底的増産（生産ノ根本）
 - 3、薪ノ自給
 - 4、空地利用
 - 5、自給種苗（温床経営）
 - 6、養豚、牛、鶏（有畜農業）
 - 7、野草ノ高度利用（營養資源）
 - 8、養兔場トシテ県農業会ヨリ指定（設備中）
- 3、保健施設
 - 1、冷水摩擦ノ励行
 - 2、身体検査ノ重視
 - 3、入浴ノ徹底
 - 4、衛生諸訓練ノ重視
 - 5、清潔日ノ設定
- 4、情操ノ醇化―無争学園ノ建設
 - 1、公德心ノ昂揚
 - 2、和樂会、演芸会、感謝会
 - 3、遊び道具ノ考案、製作
 - 4、自治会―生活ノ自主化
- 5、修練方面
 - 1、共励切磋
- 6、其ノ他
 - 1、部落民ヘノ奉仕（毎日曜）

八、現在マデニ最モ苦心セル点

(1) 土地を求めての苦しみ

無軌道ナ物価高二生活ノ窮迫ハ日ニ加ハルバカリデ、自作スルニアラザレバコノ苦難ハ切り抜ケラレヌ、深刻ナ生活苦ノ打開ニ広大ナ土地ヲ求メテノ悩ミ、折角理想的ナ開墾地ガアツテモ地主ガ許シテクレヌ、三拝九拝シテ鋤入レヲ行フ、何事モ自力デ開拓シテ行カネバナラヌ、凡テヲ自力デ立上ルコトハ苦シイ事デアル、之ハ沖繩疎開民ノ誰モノ苦痛デアル。

(2) 開墾者ノ喜ビハ開墾者ノミガ知ル、

開墾ハ苦シイ作業デアル、大キナ杉根トツ組ンデ直径一間バカリモ大キナ穴ヲ掘ツテハソノ中ヘ入ツテ土ミドロニナツテホリ起ス重イ唐鍬ヲ打下シテ一株モ残サナイヤウニ根氣ヨクホリ出ス苦シイ働デアル、然モ食糧ガ伴ハヌ三度三度雑炊デハ戦ヘヌ作業デアル、然シ子供達ハ朗ラカニヤツテクレタ。進行スル跡ヲ見テハ涙ナシニハ居ラレヌ。「餓死突破」ノ立札モ幼キ彼等ニハ無理ト思ヒツツ。

然シ雄々シクヤツテクレタ。今デハ麦ガ色付キ馬鈴薯ガ農家ノソレヲ断然乗越エ、道行ク人々ニ驚カレテ居ル、苦即樂子供達ノ労苦モ近イ中ニ報ヒラレントシテ居ル、朝ハ起床ト直グ開墾跡ヘ走ル、作物ノ伸ビル姿ニ接スル法悦開墾者ノミガ知ル。

矢張り沖繩ノ子供ハヨク頑張ル。

(3) 弁当ヲ持タセ得ナイ淋シサ、

愈々明日カラ弁当持参ダト子供ハ言フ、現在ノ配給量デ然モ代替品モ順調ニ貰ヘヌ現状如何ニ工面シテモ補ヒガトレヌ。一日中出歩イテモ芋一貫モ買ヘヌ事ヲ何トシヨウ、農村部落ノ子供達ト机ヲ並ベテ弁当ニ有ツケナイ疎開ノ子ノ氣ノ毒サ、心中察スルニ胸モ力キムシラレル思ヒコノ位ノ事モ果シ得ヌ残念サ、中



提供：親富祖永吉

六、将来ノ年次計画							
衣	食	住	農耕	学習	其ノ他	予算	
○軍松下品ノ仕立直シ ○補修 ○フトン打直シ ○配給懇請	○二町歩開懇 ○種兎場ノ指定設置 ○製塩 ○網引	○宿舍ノ補修 ○便所改築、肥埴 ○分宿舍ノ設置	○自給肥料ノ徹底 ○堆肥舎、灰溜 ○収納舎、加工室	○机、黒板其ノ他備品	○橋 ○資本金ノ獲得 ○副業ノ研究 竹細工中心 ○薬品ノ購入	一、〇〇〇〇円	
○上級生方下級生へ松下ゲ ○ミシン購入	○製粉機 ○製メン機 購入 ○開懇		○担当医ノ設置 ○品評会 ○農事講習へ派遣	○教室	○工作具ノ充実 ○行商実習 ○練習用自転車		
〃	〃		○家畜増産 ○簡易鍛冶		○ハキモノノ完全自給		



愛汗學園の建設全景

提供：親富祖永吉



愛汗學園：はたらく子供たち

提供：親富祖永吉

二、全 内訳 一三、二一四円（総額訂正か。）

A、開設費 一一二一七円

1、宿舍建設費 飯宿舍ノ四棟三二・五坪ノ補修ヒ

五〇〇〇円 家事室外一棟十五坪ノ新設ヒ 薪舎 便所

湯殿七・五坪新設

2、臨時備品造修費、電燈引込費（二〇〇米）

九〇〇円 ハラヂオV

3、畜舎建設費 牛舎 豚舎 鶏舎

七〇〇円

4、農舎建設費

五〇〇円

5、農機具費 鋤三五 鎌 シヨベル

肥桶三〇 タンガ 種マキ機

一五〇〇 全柄杓 鉋 碎土機

6、家畜購入費 八六〇〇V五〇〇円

7、調査費 一二五円

8、人員輸送費 二二七円

9、物件輸送費 五〇〇円

B、農場費 九六二円

1、土地借受料 敷地一・五反 六六円

畑 九反 三九六円

2、雑費 五〇〇円 種子代 四二〇円（種子唐芋

ヲ含む）

肥料代 八〇円

三、建物坪数 五八・五坪

宿舎 四一・二五 倉庫 六・二五

畜舎農舎 四・五 湯殿 二・〇〇

薪舎 三・ 便所 一・五

四、敷地並二耕地坪数 二八五〇坪

敷地 四五〇坪

耕地 二四〇〇坪

場名 第一農場 小作 坪数 作物名

第二 " " 六〇〇 小麦、大豆、小豆、南瓜

第三 " " 一八〇 馬鈴薯、里芋、陸稻、南瓜、小豆

第四 " " 四二〇 小麦、大豆

第五 " " 六〇〇 大麦

五、施設見取図（別紙）

施設場所

東臼杵郡富島町大字塩見奥野九一〇九

六、工賃

賃金 延人員

大人 十五円 二七〇人

小人 七円 九〇〇人

計 一、〇三五〇円

五、就學援護費	一、食費	四〇三二〇	一人月六十円ノ五六名分
	一、教科書學用品費	一八八〇	
	二、被服費及雜費	四七〇	一人年十円
六、開設費	一、校舍建設費	一四一〇	”三十円
	二、臨時備品修造費	八五三六	
	三、畜舎建設ヒ	四〇〇〇	
	四、農舎建設ヒ	九四〇	
	五、農器具ヒ	五〇〇	
	六、家畜購入ヒ	五〇〇	
	七、調査ヒ	一二五	
	八、人員輸送ヒ	一七一	
	九、物件輸送ヒ	五〇〇	
合 計		七五、八六三円	開設費八、五三六円ヲ差引 六七、三二七円ノ六分三、六三三

歳入歳出差引残ナシ

富島町長 三尾 良次郎

戦災孤児収容施設建設状況

親富祖
銘 苺
永吉
眞榮

一、建設費総額 一万二、一七九円

資料(3)
附属文書

棚		第	
学第一號	学事關係諸令達通諜	昭和二十二年	永久保存
冊ノ内四			
宮崎縣			

昭和二十一年五月

戦災孤児収容施設状況調書

東臼杵郡富島町

市ヶ瀬戦災孤児集合宿教育所

資料(3)

富庶第三五七号

昭和二十一年四月二十七日

富島町長 三尾良次郎〔宮崎県東臼杵郡富島町長角印〕

内務部長殿

戦災孤児集団合宿教育二関スル件

標記ノ件ニ付別紙ノ通り関係書類相提出候也

議案第 号

昭和二十一年度富島町歳入歳出予算

(沖縄県集団引揚児童二関スル)

歳入

科目疑項	説明種類	本年度予算額	付記
一、国庫支出金		七五八六三円	
一、補助金		七五八六三	
一、補助金		七五八六三	
合 計		七五八六三	

歳出

科目項目	説明種類	本年度予算額	附記
一、校費寮費		三三六二円	児童十七名寮費三寮費三
一、校費		四七〇	一人年十円
二、寮費		九四〇	二十円
三、体育衛生費		九四〇	二十円
四、伝染病防疫費		一二	〇、二五円

二、農場費	五、修善費	一〇〇〇	
一、土地借受料	一、土地借受料	一五〇五	一段年一〇〇円ノ五段分
二、農器具補修費	二、農器具補修費	五〇五	
三、雑費	三、雑費	五〇〇	
三、給料及諸給		二〇二六〇	
一、教員		一一六〇	
二、寮母	一、特殊勤務手当	九六〇	一人月四〇円二人分
	二、旅費	二〇〇	一人年一〇〇円
	一、給料	九五六〇	
	二、臨時家族手当	四八〇〇	一人月一〇〇円ノ四人分
	三、戦時勤勉手当	九六〇	一人月二十円
	四、賞與	四八〇	給料ノ一割
	五、特殊勤務手当	一九二〇	ノ四割
	六、旅費	一二〇〇	一人月二十五円ノ四人分
三、作業員		二〇〇	一人年五十円
一、給料		七六二〇	
二、家族手当		三六〇〇	一人月一〇〇円ノ三人分
三、戦時勤勉手当		一六八〇	一人月二十円
四、賞與		三六〇	給料ノ一割
五、特殊勤務手当		一四四〇	ノ四割
四、嘱託手当	五、特殊勤務手当	五四〇	一人月十五円ノ三人分
五、嘱託医手当	一、手当	一四四〇	一人月三十円ノ四人分
一、手当		一四四〇	
二、寮母		四八〇	
三、戦時勤勉手当		四八〇	
四、賞與		四八〇	
五、特殊勤務手当		四八〇	
六、旅費		四〇三二〇	一人月四〇円ノ一人分

語を意識的に用いている場合が多く存在する。これらは、沖縄からの疎開が特別な施策であることを示しているといつてよいであろう。』続いて、「たしかに、一九四四年七月二二日の文部次官通牒『学童集団疎開並ニ之ガ経費ニ対スル国库補助ニ関スル件』は、疎開都市として……那覇あるいは沖縄県を含んでいない。これは、疎開と引揚との間に行政上の区別があったのではないかと考えられる。』と推論している。沖縄県の学童の県外「疎開」を、当初、国側あるいは九州の受入自治体が「引揚児童」として対応、認識したのは、沖縄からの引揚は、「(前述のように) 大本営陸軍部が主導して研究・計画し、軍隊の本格的な配備と時を同じくして実施したもので、これは「作戦上ノ必要ニ基キ離島等ニ於ケル市町村民ノ全部ハ大部分ノ引揚方行ハレ……」(『公文雑纂』昭和十九年 巻五十四内務省) たことによると指摘している。

沖縄県の学童疎開に関する公文書(行政文書)の現存数は少ない。宮崎県立図書館所蔵の「通牒」はその欠落を補い余りあるものである。当然にして、沖縄現代史・教育史研究にとっても重要な資料となろう。

資料(1)

昭和二十一年八月十五日

東臼杵郡富島町第一富高国民学校長 山田 馨(国民学校角印)

宮崎県内務部長殿

沖縄県集団学童学年別児童調に関する件

〔消印・宮崎県/21・8・20〕

昭和二十一年八月十二日附発教第二五五号に依る標記の件に関し左記の通り報告致します

記

本校に居りました集団学童は昨年度本町第二富高国民学校へ転じましたため本年四月現在にては該当ありません。

資料(2)

発二富第 号外

昭和二十一年八月十四日

△第二富高▽

東臼杵郡富島町塩見国民学校長 秋田 正〔学校角印〕

宮崎県内務部長殿

沖縄県集団学童数報告の件

標記の発教第二五五号件左記の通り報告致します

〔消印・宮崎県/21・8・16〕

記

	男	女	計
初一	〇	一	一
初二	一	〇	一
初三	〇	〇	〇
初四	三	〇	三
初五	二	二	四
初六	七	一〇	一〇
高一	一〇	三	十三
高二	十二	四	十六
計	三十五	十三	四十八

備考 元第一富高校受入ノ分モ含ム

昭和二十年度沖縄県国民学校集団引揚児童受入費清算調査
送付の件

(6) (東白杵郡) 岩脇村長 児玉 嘉市

昭和二十一年度戦災孤児等集団合宿教育所施設費予算書送
付の件

「通謀」九綴りの一つに、文書扉「昭和二十一年五月／戦災孤児
収容施設状況調査／東白杵郡富島町／市ヶ瀬戦災孤児集団合宿教育
所」が付帯している。この文書は、疎開児童引率の教師・親富祖永
吉、銘苅眞榮の提出文書で、(3)の附属文書である。

「通謀」七と九にみられる市ヶ瀬戦災孤児集団合宿教育所(別
称・愛汗学園。写真参照)に関する文書に大きな違いはないが、表
紙(資料本文扉)の有無や、多少の見え消し文の有無等があるが、
七、九を照合しつつ写し、紹介することにする。本文中の「 」が
見え消し文である。注意したいのは、今日の状況から差別語、また
は関係者の心情を鑑み、止む得ず伏字(□で印す)にした箇所もあ
ることを、あらかじめお断わりしておきたい。

(1) (3) 文章は、浦添国民学校疎開学童九十二人(その他に職員二、
世話人五、家族一)を受け入れた宮崎県東白杵郡富島町の第一富高
国民学校と、第二富高国民学校に関する文書で、(4) (6) 文書は、同
じく浦添国民学校疎開学童二十四人(その他職員一、世話人二、家
族二)の疎開を受け入れた、東白杵郡岩脇村の平岩国民学校関係文
書である。

第一富高国民学校へ疎開児童四十五人を引率した親富祖永吉は、
『疎開生活二ヶ年の回顧』(ノート)を著し、平岩国民学校に二十四
人の児童を引率した石川盛栄は戦後(一九七五年)、『二十年目に綴
る「学童疎開思い出の記」ー主として第三班の記録からー』(原稿

用紙五十一枚)の手記を著している。同時に、疎開地での記録写真
幾葉もある。

石川盛栄引率の児童は、岩脇村の平岩国民学校から、白梅寮(挿
入図参照のこと)完成二日後の昭和二十年九月二十二日に「愛汗学
園」へ、銘苅眞榮引率の第二富高(塩見)国民学校編入の児童は、
先きの同年九月八日に「学園」へ移動し、浦添国民学校疎開児童が、
宮崎県着後初めて一同に会した二十二日、その再会を記念して大演
劇会を開催しお互いの無事を祝ったことを、親富祖が『疎開生活二
ヶ年の回顧』のなかで書き記している。市ヶ瀬教育所設置に関連し
て、行政上(公文書)、昭和二十一年五月の段階で、彼等学童たち
の身分は「戦災孤児」として位置付けられていた。

本紀要では疎開学童が、故郷沖縄への帰還(引き揚げ)を断念
(?)し、異境での自活生活の地となった宮崎県富島町市ヶ瀬の
「愛汗学園」に関する資料(3)の附属文書「市ヶ瀬戦災孤児集団合宿
教育所」を中心に紹介することを趣旨としているので、岩脇村(平
岩国民学校)疎開関連資料は、紙面に限りがあるので、今回は削除
することにした。

資料本文中、注意してみると「引揚児童」という用語が使用され
ている。この「引揚」について、近藤健一郎は、論文「第二次世界
大戦末期における沖縄からの『引揚』の実施過程ー児童生徒の戦場
からの排除ー」(『日本教育史研究』第一七号、一九九八)で、「沖
縄からの疎開は、東京など重要都市からの学童集団疎開と同時期に
並行して実施しながら、その対象地域に加えられてはいない。また
政府は『沖縄県下生徒児童ノ疎開転学ニ関スル件』のように沖縄に
についても疎開という語を用いた場合もあるけれども、『沖縄県集団
引揚児童受入ニ関スル件』との如く、疎開ではなく『引揚』という

『学事関係諸令達通課』 収載の学童疎開関係公文書について

長間 安彦

那覇市の九〇％を壊滅した、いわゆる「十・十空襲」は一九四四（昭和十九）年十月十日早朝のことである。それから数か月後に米軍による沖縄への総攻撃がおこなわれ、多くの日米の兵士と民間人、そして朝鮮人の方々が戦死した。米軍部隊のこの「十・十空襲」は、フィリピンのレイテ島上陸作戦に連動したものであったといわれる。児童生徒の県外疎開（集団学童疎開）が実施されたのは、「那覇の大空襲」の約三カ月前のことである。

一九四四年七月、サイパン陥落が決定的になったのを機に、本土・台湾へ老幼婦女子約十万人の県外疎開が、緊急閣議をもって発令された。七月十九日付けで、教親第五九五号「学童疎開準備二関スル件・沖縄県学童集団疎開準備要項」通達が、沖縄県下各学校校長宛に沖縄県内政部長によって発せられた（『沖縄県史』第8巻）。

浦添の学童疎開の先陣をきったのは、仲西国民学校の八七人の学童たちである。仲西国民学校の学童集団疎開は昭和十九年八月二十一日出発の「対馬丸」に乗船することになっていたが、一寮母の採用決定が遅れたため、その難を逃れたという（『浦添市史』第五巻）。

浦添の国民学校生（仲西・浦添）の県外疎開に関する調査、資料は、『浦添市史』第五巻資料編4・戦争体験記録の、「第四章疎開と

戦争」に詳しい。それは、学童らを引率した教員が書き記した「日誌」「回顧録」からの引用、さらに当事者の体験談によって構成、まとめられている。他に、琉球新報紙上で一〇五回にわたり連載した（一九四四年八月～一九四五年四月。一九四五年五月に『沖縄学童たちの疎開』として刊行）取材記事「学童たちの疎開」などがある。

ここで紹介する学童疎開関係公文書は、宮崎県立図書館が保管していた『学事関係諸令達通課』（全六冊簿。以下、「通課」と略する。）に収録されているものの一部である。本館沖縄学研究室に所蔵される「通課」は、那覇市歴史資料室が一九四〇年六月に現地宮崎県に赴き、沖縄県から宮崎県へ疎開した学童疎開に関する部分が含まれている簿冊二から六をマイクロフィルムで収集（昭和十九年八月から昭和二十二年までの行政文書。紙焼き数二五七八枚。五簿冊）した「通課」を、全十五冊（A4判・影印本）に再編したものである。したがって、本文中の「通課」の通し番号は当方所蔵のそれになっている。「通課」七・八収録の簿冊の目次によれば、浦添国民学校の学童疎開に関する記事として、宮崎県側（受入の村当局・学校）が収受した公文書六点が細見される。

- (1) 東臼杵郡富島町第一富高国民学校長 山田 馨
沖縄県集団学童学年別児童数調に関する件
- (2) (東臼杵郡) 富島町塩見国民学校長 秋田 正
沖縄県集団学童数報告の件
- (3) 富島町長 三尾 良次郎
戦災孤児等集団合宿教育に関する件
- (4) 東臼杵郡岩脇村平岩国民学校長 金丸 文雄
沖縄県集団学童学年別児童数調に関する件
- (5) 東臼杵郡岩脇村長 児玉 嘉市

〔本号執筆者〕

森 田 牧 子 (MORITA, Makiko)	浦添市立図書館主事
石 川 あきの (ISHIKAWA, Akino)	浦添市立図書館嘱託員
徳 元 剛 (TOKUMOTO, Tsuyoshi)	琉球王国評定所文書編集嘱託員
野 原 千 明 (NOHARA, Chiaki)	沖縄学研究室嘱託員
佐 伯 信 之 (SAEKI, Nobuyuki)	浦添市教育委員会文化課主事
新 里 まゆみ (MAYUMI, Shinzato)	浦添市教育委員会文化課文化財 調査嘱託員
北 條 真 子 (HOJOU, Masako)	浦添市教育委員会文化課文化財 調査嘱託員
山 本 正 昭 (YAMAMOTO, Masaaki)	沖縄県立埋蔵文化財センター 専門員
鳥 山 淳 (TORIYAMA, Atsushi)	沖縄大学地域研究所特別研究員
伊 敷 勝 美 (ISHIKI, Katsumi)	沖縄市総務部総務課主事 (市史編集担当)
長 間 安 彦 (NAGAMA, Yasuhiko)	沖縄学研究室嘱託員

2001年3月16日 印刷

2001年3月23日 発行

浦添市立図書館紀要 No.12

編 集 浦 添 市 立 図 書 館
〒901-2114 沖縄県浦添市安波茶2-2-1
Tel : (098) 876-4946
Fax : (098) 875-1772

発 行 浦 添 市 教 育 委 員 会

印 刷 グローバル企画印刷株式会社
〒901-1111 沖縄県南風原町字兼城577
Tel : (098) 889-3222
Fax : (098) 889-0444



埔城市立圖書館